

人類学博物館紀要 第 42 号
(ISSN 0388-8711)

南山大学人類学博物館紀要

第 42 号

南山大学人類学博物館

2023

巻頭言

2023年度の人類学博物館紀要ができた。今回は2本の論文と1本の資料紹介を掲載している。そのうち、資料紹介はご寄贈いただいた南山大学名誉教授の丸山徹先生にご執筆いただいた。御礼申し上げたい。

このように博物館で所蔵する資料の研究は、常に進められていなければならない。それが博物館の仕事としては最優先されるべきであり、大学博物館であればなおさらのことである。加藤大智氏・廣瀬允人氏による根方岩陰遺跡の研究は、60年も前の調査記録から復元された研究である。60年もの間、ほぼ手付かずであったことは博物館としての責任を感じなければならないが、若手研究者によって現在の視点から整理され、世に出されたことは喜ぶべきことであろう。

博物館が資料を所蔵するということは、その資料を用いて繰り返し研究が可能であるということである。そういう意味では、中里信之氏による大須二子山古墳出土須恵器の研究は、すでに進行している研究に一石投じるものと言えよう。従来、大須二子山古墳の須恵器の多くは、墳丘下の下層遺構出土のものと考えられてきたが、その中で今回取り上げられた器台形土器（中里氏は高杯形器台）は出土位置からも型式学的観点からも墳丘に伴うものであることが明らかにされた。こうした資料の再検討によって研究が進むことこそ、博物館にとっては大きな意味がある。

人類学博物館の「使命と役割」には、新たな研究の創出が謳われている。博物館資料を従来の学術的な枠組みの中で理解するに留めず、様々なジャンルを横断する新たな研究の方法と視点を開拓したいという方針を示したものである。繰り返しになるが、博物館が資料を維持している限りにおいて、それは可能なのである。

今日、博物館に対する要求が多岐に互ってくる一方で、付加された対外的な活動に時間を取られて、博物館が本来すべき調査研究が十分にできない状況に置かれている。NHKのEテレの番組で『バックヤード』という博物館等の裏側を紹介する番組があるが、その謳い文句は「本当の“知”は裏に隠されている」である。隠す必要はないかもしれないが、博物館の核心は展示や教育活動といった見えている部分の裏側にこそある。そして、それを支えるのが研究である。最近では国立科学博物館が資料収集と資料保全の費用としてクラウドファンディングを呼びかけ、5億円が集まったというニュースが話題となったが、それに対する意見は別にして、科博が持つ資料の魅力と研究活動が多くの人に共感・支持されていることの表れだと思う。

博物館法の改正で博物館が観光事業と紐付けされた。しかし、博物館が研究することを忘れてはならない。博物館ではない。そのことだけははっきりしている。

2023年12月
南山大学人類学博物館



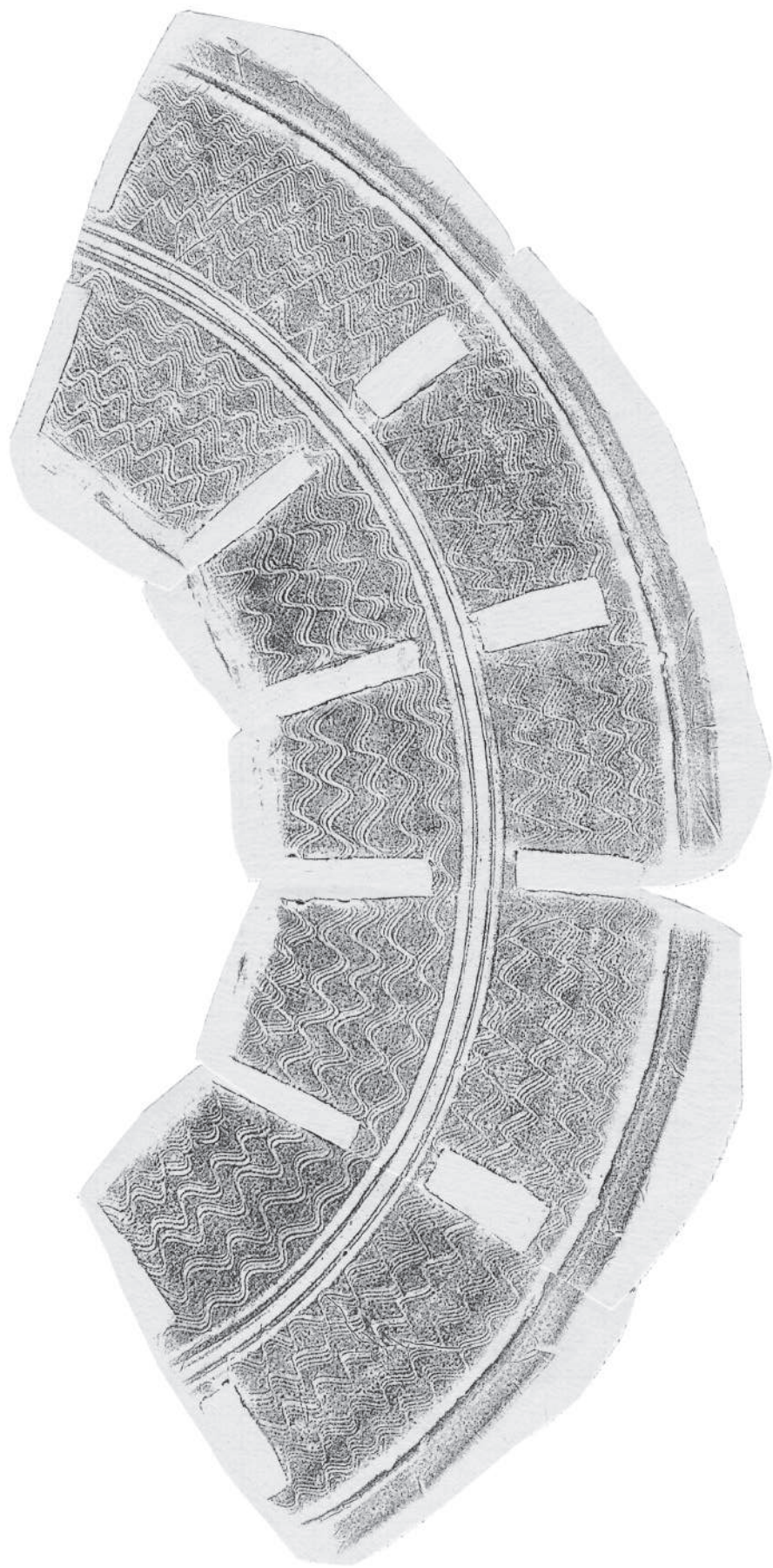
写真1 大須二子山古墳出土高杯形器台全景



写真2 大須二子山古墳出土高杯形器台杯部内面



写真3 大須二子山古墳出土高杯形器台脚部内面



口絵 1 大須二子山古墳出土高杯形器台脚部拓本 (S = 1/3)

目 次

巻頭言

根方岩陰遺跡の研究——1965年の調査記録と縄文時代早期から前期初頭の出土遺物——	加藤大智・廣瀬允人… 1
大須二子山古墳出土の高杯形器台とその諸問題	中里信之… 41
〈資料紹介〉切手コレクションの寄贈——昭和の切手、小学生コレクターの思い出——	丸山 徹… 53

根方岩陰遺跡の研究

——1965年の調査記録と縄文時代早期から前期初頭の出土遺物——

加藤大智・廣瀬允人

1. 根方岩陰遺跡の概要

1.1. 根方岩陰遺跡と遺物整理の背景

根方（ごんぼう）岩陰遺跡は、岐阜県高山市丹生川町大字根方（北緯 36°10'34.53" 度、東経 137°22'49.31" 度、標高約 740m）に位置する（図1）。小八賀川（こはちががわ）右岸の河岸段丘上に位置する当該遺跡は馬ツギ遺跡とも称され、縄文時代早期から晩期にかけての遺物が出土している（江原他 1986、小林・早川 1967）。

根方岩陰遺跡は 60 年代に全国で活発に実施された洞穴・岩陰遺跡発掘調査の一環として発掘された遺跡である。当時南山大学に在職していた小林知生教授を中心に発掘調査が実施された。当時は、栃原岩陰遺跡など今日の考古学の発展に寄与した岩陰・洞穴遺跡の発掘調査が盛んであった（水ノ江 2020）。石灰岩質の洞穴・岩陰遺跡は動物遺存体が残りやすく、人骨の保存状態も良いことで知られている。そのため、酸性土壌の日本列島においては貴重な資料を得ることが出来

るということで注目されてきた。また包含層も整然と堆積することから縄文土器の編年においても重要な情報を提供し得る。小林はそうした意識に加え、「ヨーロッパにおける諸洞穴遺跡同様の壁画の発見を目指した洞穴探検に熱心」（吉田 2009）でもあったとされる。そのため当時、東海地方を中心に各地を踏査し、未知の洞窟・岩陰遺跡を探索していた。その中で発見された、いくつかの岩陰遺跡において発掘調査が精力的に実施されており、岩井戸岩陰遺跡や港町岩陰遺跡などが知られている。これらの発掘調査のいくつかは正式な報告書が刊行されたが、岐阜県郡上市和良の田平岩陰遺跡など、報告書が未刊行の遺跡もある。ここで報告する根方岩陰遺跡もその一つで、『日本の洞穴遺跡』（小林・早川 1967）でその概略が報告されたが、正式な形での調査報告書としての発表はなされなかった。そのため縄文時代早期～前期の土器型式の層位的傾向が飛騨地方において指標的な位置づけになっているにもかかわらず、発掘区の位置や第2区以外

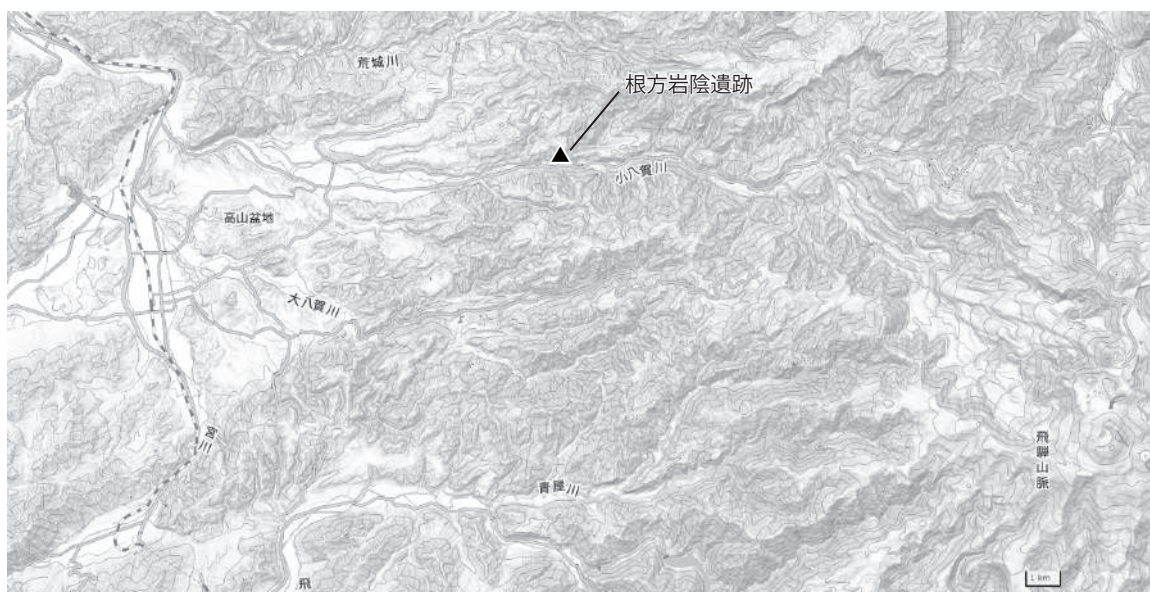


図1 根方岩陰遺跡の位置（国土地理院の地理院地図 vector を使用）



写真1 発掘調査時の根方岩陰遺跡 (1)

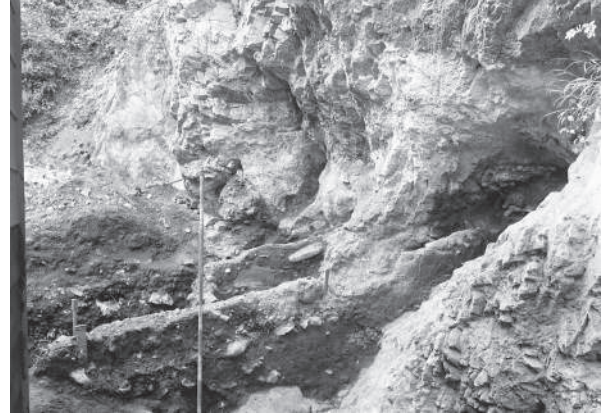


写真2 発掘調査時の根方岩陰遺跡 (2)

の地層断面図などの基礎データが不明瞭なままであった。したがって今回、公表されなかった基礎データを可能な限り集成・復原することで、この問題の解消を試みた。土器型式ごとの層位的段階変化、及びそれに伴う石器や動物遺存体の内容について提示する。

1.2. 既往の調査歴

遺跡の調査歴については、すでに公表されている内容に従えば以下のとおりである。根方岩陰遺跡は、1963年に根方公民館の建設に伴う岩陰部分の掘削によって多くの遺物が出土したことから、1965年に小林知生を団長とする南山大学発掘調査団らによって同年7月と8月に二度、発掘調査された(小林・早川1967)。この公民館の建設に際して、少なくとも深さ1mに及ぶ縄文時代中期から晩期にかけての遺物包含層も消失していた。しかし、縄文時代早期中葉から縄文時代前期初頭の包含層は残されており、この包含層に対して発掘調査を実施したのである(写真1, 2)。概報では2×2mのトレンチを5ヶ所設けたことになっている。この調査で、高山寺式土器や貝殻・沈線文系土器など縄文時代早期中葉の土器から石塚式土器、神ノ木式土器など縄文時代前期の土器と、これらに伴って石鏃や石匙、敲石などの石器が出土している。また石灰質の岩陰であることによりイノシシやニホンジカなどの動物遺存体も多く出土している。加えて、海産貝製品なども報告されている。

第一次調査から20年後の1985年には京都大学霊長類研究所によって、第二次発掘調査が実施された(江原他1986)。この調査では第一次発掘調査における調査区の西側の地点に三つの調査区を設けている。この調査で出土した土器は縄文時代早期のものが多く、貝殻条痕文の土器片が大半であるが山形文の押型文土器

や無文土器なども出土している。山形文に関しては、第一次調査で出土した楕円文よりも古い傾向にあり(中島2008)、楕円文の時期より前からこの岩陰が利用されていたことを示している。そのほかには縄文時代晩期の条痕文土器が数点出土している。石器は石鏃や石匙などが出土している。また動物遺存体についてはイノシシやニホンジカ、ニホンカワウソウが確認されている。第二次調査の資料群は全体的に第一次調査の内容に類似するが、量としては少ない。

2. 人類学博物館保管の記録類と出土遺物

2.1. 記録類

南山大学人類学博物館に保管されている記録類の内、いくつかはすでに吉田泰幸(2009)によって報告されている。しかしその詳細について明らかになっていないこと、さらに今回いくつかの資料を発見したことから、改めて報告する。

2021年度に人類学博物館では考古資料等が収蔵されているG棟第二展示室で、改装に伴う考古遺物の整理が実施された。根方岩陰遺跡の資料もその際に整理されたものの一つで、一部資料が散逸しているおそれがあるものの、タバコ6箱分の遺物と遺物台帳などの記録が収納されていることが判明した。以下、それらを列挙する。

【文書類】

①遺物台帳(1)

遺物台帳には遺物番号、遺物名、調査区、出土レベル、備考、出土層位が記載されている。なお各遺物の出土したレベルは基準点からの深度として示されている。

②遺物台帳(2)

前述の(1)とは別に石器のみの遺物台帳も確認で

きた。また石材も記載されている。

③石器の検討文章の下書き

石器の事実記載と分析が記載されている。

【図版類】

- ①岩陰の形状と発掘調査区の配置
- ②岩陰の断面図
- ③第1区東壁、第2区東壁、第3区西・東壁、第4区東壁の土層断面図及びトレス図
- ④各調査区の石器組成表
- ⑤各調査区の層対比表(1)
- ⑥各調査区の層対比表(2)
- ⑦遺物の平面分布図
- ⑧遺物の垂直分布図
- ⑨台石?の実測図
- ⑩土器の拓本⁽¹⁾
- ⑪石器のスケッチ及び実測図
- ⑫各層ごとの出土遺物の整理表?

図版①については土器片を中心に、いくつかの遺物の出土位置も記載されている。なお調査区の土層断面図は第1-4区のものしか確認できなかった。遺物台帳に記載されている出土調査区を見ても第4区の資料までで第5区の出土資料の存在は認められなかった。しかし隣接する第4区で遺物が出土していることを踏まえれば、第5区に遺物がなかったとは考えにくい。第5区では発掘自体をそもそもしていない可能性も排除できないが、第5区の遺物と土層断面図は本来あった可能性が高い。

⑨の台石は人類学博物館に収蔵されている根方岩陰遺跡のコンテナ内には存在せず、現在どこにあるのかは不明である。

【写真】(写真1・2)

今回新たに4枚の写真が確認できた。2009年の整理でみつかった写真にはなかったもので、恐らく他にフィルムネガファイルが存在していたことを示唆している。

【メモ】

メモ類は数多く残されており、内容もさまざまなものが確認できた。ひとえに整理作業に伴って一時的に制作されたものであろう。それらの一部は情報の復原に際して重要な知見を提供している。各層の対比のために残されたメモなどがその実例である。その一方で、石器の最大長・最大幅・最大厚が残されたメモや、石鏃の分類に際して製作されたであろうメモも残されている。

以上の残された記録から情報をまとめる。概報のむ

すびにて述べられているとおり、正式な報告書が刊行できるほどの整理作業が行われていたことが見てとれる記録をいくつか確認した。石器についても悉皆的な検討が実施されていたことが伺え、その検討の文章も認められた。これらは概報で記載されているよりもはるかに詳細なものである。その一方で、調査日誌に関しては見つけることが出来なかった。そのため調査の経過は詳細不明である。

2.2. 遺物

遺物は人類学博物館のG棟収蔵庫にテンバコ6箱分が収蔵されていた。また遺物の記録類もそこに残されていた。遺物は基本的に注記されており、遺物台帳の番号と適合していた。また注記されていない遺物に関しても番号が記載されたメモが同封されていたり、層位情報等が袋に記載されていた。

3. 整理の方法

以上でまとめた通り、概報では報告されていない各調査区の調査区図の配置図や、第2区以外の層位断面図などが確認された。特に土層断面図は遺物の層位情報を決定する手立てになり得ることが予想された。また遺物台帳には基準点からの各遺物が出土した深度が記載されていた。筆者らは、これらをもとに層位やトレンチの位置の復原を試みた。また復原した情報を遺物と照らし合わせた。これら残された遺物のうち石器は、器種、サイズ、石材等を、動物遺存体については動物種、部位、サイズ、重量の基礎データを集計した。そしてそれらの層位段階ごとの変遷を確認した。

動物遺存体の同定に際しては、筆者所蔵の現生参照標本や出版されている動物骨、歯牙、殻の形態情報を参考にした(奥谷編2000、吉良1982、波部1982、西本2002、2007、松井2008、松岡他2013、France2009、Hillson2009)。動物遺存体の計測については、基本的に各部位の長さ、幅、骨端の幅と奥行き(von den Driesch1976)、現存長・幅を記録し、骨片化しているものはまとめて重量のみを測定した。

4. 情報の復原

4.1. 南山大学発掘調査地点のトレンチ配置の復原

南山大学の発掘調査地点のトレンチ配置について概報の情報を参照しつつ、公表されてこなかったデータを提示する。トレンチの配置は図2のとおりである。

概報の通り、五つのトレンチが設けられていることが分かる。しかし2×2mをはるかに超えて発掘調査を試みていることが分かる。また概報に記載されていないが第2・3区では、拡張区も設けられている。調査区内に存在するサブトレンチのような線は恐らく最深部のトレンチの形状を指していると思われる。

岩陰の横断面図（図3）からは、岩陰最深部で地表面から30cm程度、根方公民館の建設に伴って消失していることがうかがえる。一方で発掘開始時の地表面は岩陰から離れるにしたがって標高が下がっている。概報では1m程度掘削されているとしているが、テラス部分におけるものとみられる。

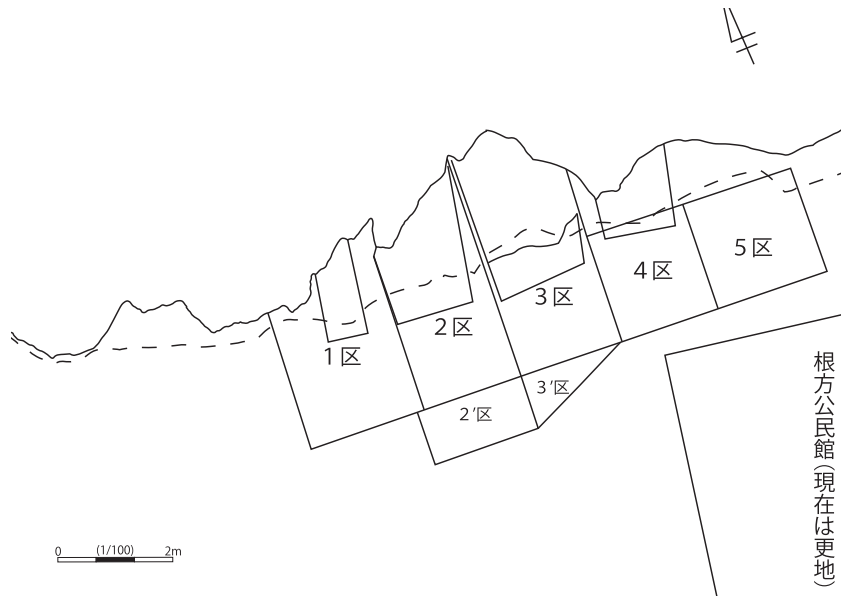


図2 トレンチの配置図

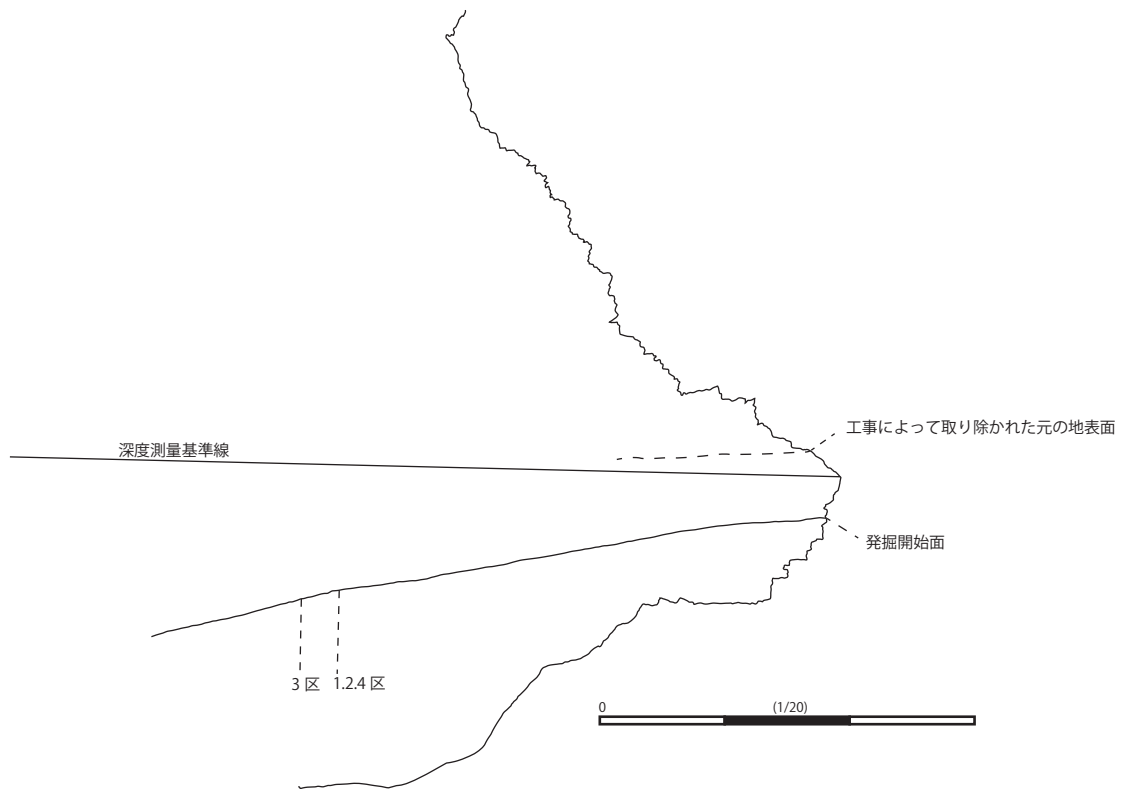


図3 根方岩陰の横断面図

4.2. 土器型式と層位区分

概報での層位区分は、層については堆積層で区分しているものの、その更なる細分は土器型式に沿う形で分けられている。そのため層位区分の根拠を再検証するためには、まず土器型式をみていく必要がある。しかし概報にてすでに詳細に分類されているため新たに分類し直すことは控えたいが概報の発表から50年以上経ていることも踏まえ、当時明らかになっていなかったことを付け加えておく。

(1) 土器型式

概報において「下層出土土器」のb類とされている土器は貝殻・沈線文系であることは言及されていたが、その型式については明示されていなかった。しかし今日的には貫ノ木式（領塚 2005）と理解されているようである（岡本 2017）。信州中心に見られる型式であり、山岳地帯を越え、ここまで波及していたことが示唆される。

同じく、「下層出土土器」のc類とされている土器

は、粕畑式的であることが指摘されながらも、茅山式的な要素も認め、茅山式類似土器としているが、今日的には八崎Ⅰ式（増子 1983）と理解されているようである（山下 1999）。

「中層出土土器」のc類の一部の土器が天神山遺跡の発掘調査で新しい型式として認定できる可能性があることを指摘しているものの、概報にて石山式に含まれている。しかし指摘している通り、今日においては、これらは天神山式として理解されている。

これらと、概報での記載を踏まえると、当該遺跡では、前期は石塚式、神ノ木式、その他では関山式や木島式などが見られ、早期後半では石山式、天神山式、入海Ⅰ式、入海Ⅱ式、上ノ山式、粕畑式、八崎Ⅰ式、早期前半では、高山寺式、貫ノ木式、及び第二次調査でみられた山形文の押型文土器が出土していることになる（図 24）。

(2) 層位の復原

層位についていくつか概報で公表されたものよりも詳細な記録が残されていた（図 4）。尚、層位の区分や層

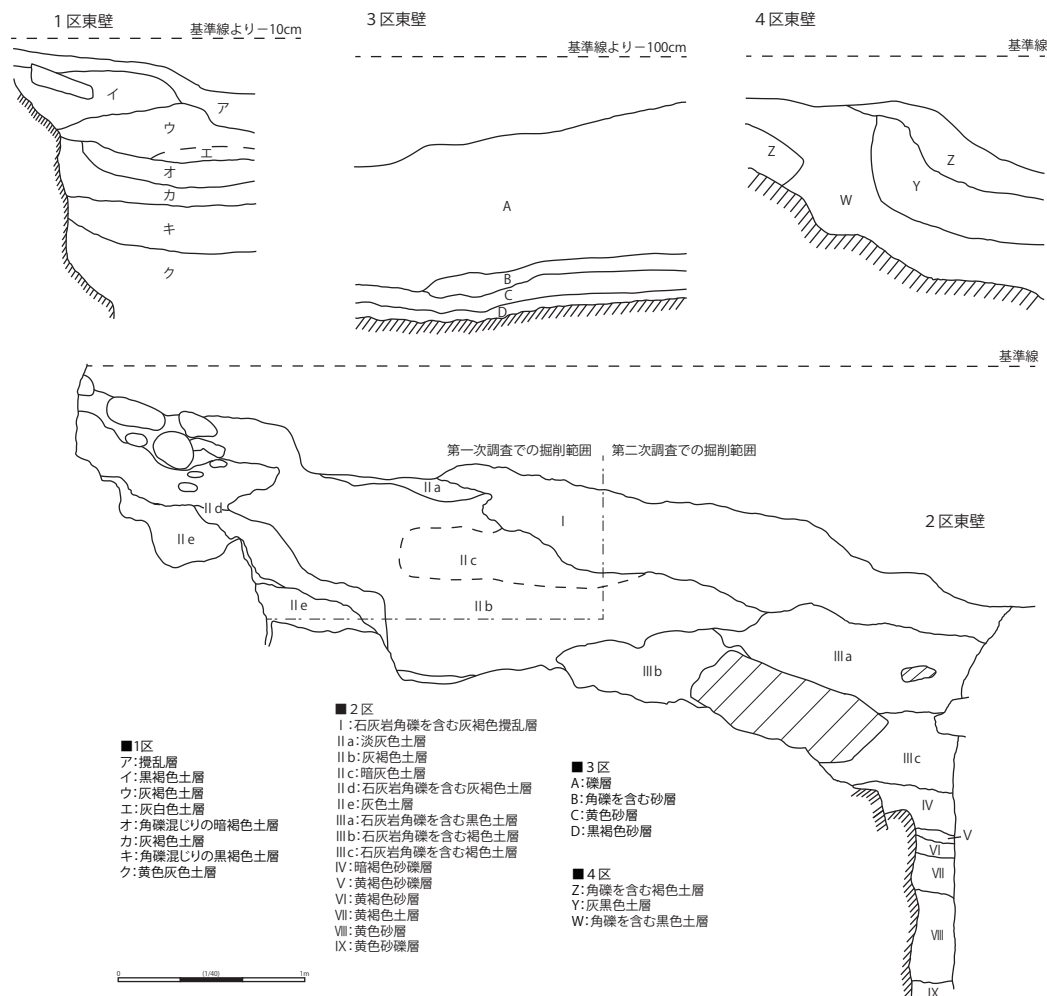


図 4 各調査区東壁のセクション図

の表記などは残された記録のものをそのまま使用した。

概報において層位は第Ⅰ層が上層、第Ⅱ層から第Ⅷ層までを中層、第Ⅸ層から第Ⅻ層までを下層に分類している。なお、さらに下層のⅫ層からⅩⅦ層に関しては無遺物層であったとされる。しかし中層と下層についてはそれぞれ上部と下部にさらに細分している。その細分は出土する土器型式の傾向で決定している。しかし「上部・下部」の深度に関しては記載もなく、その実態は不明瞭である。また一方で概報に記載のあるとおり上層にも中層にも石山式土器が、同様に中層上部にも中層下部にも石山式が混入しているなど、堆積は安定していない。またこの層位区分の復原を人類学博物館に残されている記録から試みたが、それはかなわなかった。さらにそもそもの概報のローマ数字での細分そのものの根拠を見つけだすことはできなかった。発掘調査時点で、各調査区で層位区分は統一されていない。第1区ではアイウエオで区分されている。一方、第2区・第3区は共にローマ数字であるものの、それぞれ互換性がない。第4区はアルファベットで区分されている。記録の中には、これら層位区分の対応表がいくつか残されていたが、概報とは異なっている。実際に第3区に関しては17層に細分できる旨が概報に記載されているが、残されている記録からはどのように細分できるかまでは復原できなかった。そのため概報で提示されていたローマ数字での区分と上層中層下層での層位区分はともに整合性を見出せない。

そのため、遺物台帳に記載されている各遺物の深度、層位、各調査区、日付を抽出した。そして、特に各調査区における土器型式ごとの出土深度から、概報で示されている層位的段階区分が可能であるか調査区ごとに検証した。具体的には深度10cmごとに、出土する土器型式を確認したが、出土している土器型式が認められない場合は、その深度段階の上下で出土している土器型式や、隣接する調査区の同じ深度段階で出土している土器型式、堆積層、日付など多角的に検討したうえで決定した。また別段階の土器型式が重複する場合は、より新しい土器型式を以てその深度段階の区分けを決定した。

その結果、概ね概報で提示されている5段階の層位的な段階区分に矛盾はなかった。しかし遺物台帳以外の記録から層の区分が可能であるか検証できなかったこと、特に深度を重視して層位区分を検証したこと、土器型式を以て層を決定している以上「層」と記載することは不適切であることから、概報の層位区分をそのまま踏襲することは控えたい。したがって筆者らは新たに

土器型式の深度をもとに、上部、中部、下部と三つに細分し、かつ中部を(上)(中)(下)の三つに細分した。

各区における上部から下部までの段階の深度範囲は以下のように想定した。ただし、土器の出土が少ない部分は隣接区の想定深度範囲も判断材料とした。上部は石塚式、神ノ木式土器、その他前期、中期の土器型式が出土している。その深度は第1区で70-90cm、第2区で60-90cm、第3区で50-80cm、第4区で50-70cmである。中部(上)は石山式、木鳥式土器が出土している。その深度は、第1区で90-130cm、第2区で90-120cm、第3区で80-110cm、第4区で70-90cmである。中部(中)は入海Ⅰ式、入海Ⅱ式、天神山式、石山式土器が出土している。その深度は第1区で130-160cm、第2区で120-150cm、第3区で110-140cm、第4区で90-130cmである。中部(下)は八崎Ⅰ式、粕畑式、上ノ山式土器が出土している。その深度は第1区で160-180cm、第2区で150-180cm、第3区で140-180cm、第4区で130-180cmである。下部は貫ノ木式、高山寺式土器が出土している。その深度は、第2区で180-210cm、第3区で180-220cm、第4区で180-200cmである(図5)。

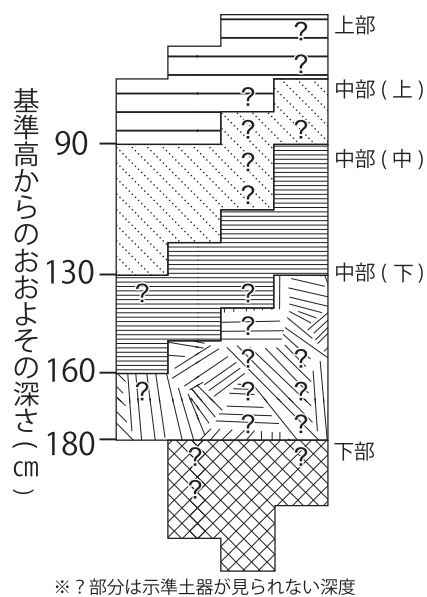


図5 層位的段階区分の模式図

5. 出土した石器と動物遺存体

5.1. 石器

5.1.1 各石器の基礎情報

今回の整理で確認できた段階ごとの石器の内訳は次

のとおりである⁽²⁾。

上部は石鏃が12点、スクレイパーが2点、石匙が6点、敲石が1点である。中部(上)は石鏃が21点、石錐が3点、スクレイパーが12点、石匙が10点、磨製石斧が2点である。中部(中)は石鏃が15点、石錐が1点、スクレイパーが7点、石匙が2点、石皿が1点、凹石が3点、敲石が1点、磨石が1点である。中部(下)は石鏃が12点、石錐が3点、スクレイパーが9点、石匙が2点、敲石が3点である。下部は石鏃が9点、スクレイパーが4点という内訳である(図6)⁽³⁾。

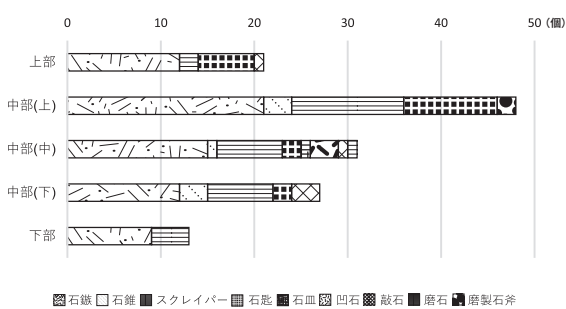


図6 石器の組成

以下ここでは下部から上部までの段階ごとに石器(図7, 8, 9)の観察所見を述べる。また観察データを表1-10に示した。

(1) 下部の石器

1-3はスクレイパーである。1は幅広な剥片を素材としている。背面側には両側縁ともに刃部を作出するための加工が細かく施されている一方で、腹面左側縁上部や右側縁では一部に施されているのみである。末端の欠損は、剥離の前後関係から加工の後に発生したものと考えられる。背面右側縁側の末端の加工はその欠損の後に施されており、末端の欠損後もリダクションし、継続して利用されていたことを示唆している。2は縦長の剥片を素材としている。背面の右半分は素材剥片を得た際に形成された剥離痕が散見される。両面の側縁には形を整えるための剥離痕が見られる。その一方で刃部は背面右側面に腹面側からの加工によって細かく作出されている。先端が尖り、概形も槍先状となっているが、先端部を尖らせる加工の意図は見られないため、尖頭器とは認定できない。3もやや大型の縦長の剥片を素材としている。背面に残存する剥離痕からは打面転移を伴う素材剥片剥離の様子がうかがえる。両面ともに直接打法による整形剥離が見られるほか、背面左側縁上部には鋭利な部分を取り除くため

の細かい剥離が施されている。刃部は背面右側縁下部にわずかに作出されている。1-3はともに下呂石。

22-26は石鏃である。22, 23は他の石鏃に比べ大型である。ただしそれぞれ基部形態はやや異なる。22は基部に大きな加工を加えた後、側縁の加工に移行している。23も基部の加工後に側縁の加工に移行している。24は基部の加工後に側縁側に粗雑な加工を施すことによって形が形成されている。25はいわゆる長靴鏃(上峯他2017)と呼ばれる石鏃である。正面側の大部分に素材面が残っている一方で、裏面右側には斜めに平行な加工が連続して施されている。26も基部を加工したのち、両側縁をやや斜状平行ぎみに連続して加工している。

(2) 中部(下)の石器

4, 5はスクレイパーである。4は幅広の縦長の剥片を素材としている。背面側には打面転移した形跡が認められる。腹面末端部は折面ではなく剥離痕であり、刃部の加工を切っている。そのため打面転移を何度も試みて剥片剥離して得られた1枚の剥片を素材としていることがうかがえる。素材面と刃部を含む剥離痕の一部が風化している。刃部は両側縁ともに両面加工によって形成されている。5は幅広の縦長の剥片を素材としている。両面に残存する素材面は風化している。一方の刃部は風化しておらず、素材剥片の獲得と刃部の加工に時間差があったを示唆する。側縁の加工は細かくはなく粗く打ち割られて形成されている。刃部ではなく整形のための剥離の可能性もある。石材は安山岩。

6は縦長の剥片の打面を下にした状態で素材としている石匙である。素材剥片を剥がす際に背面側の稜線が剥離誘導線としての役割を担っていた。打面部は円礫の自然面でクラックなどが残置しているためつまみを形成するには適さない。そのためつまみは打点の反対に設けられたものと考えられる。つまみは明瞭でなく、少ない剥離によって形作られている。つまみは両面から作出されているのに対し、刃部は腹面側からのみ形成されている。石材は円礫の青白チャート。

27-30は石鏃である。27は側縁を加工したのち、基部を加工し、形を整えている。全体形はやや左右非対称である。28も27同様、側縁の加工後に基部の加工を施している。やや左右非対称ぎみである。29は基部の両端の剥離痕が側縁の剥離痕に切られているのに対し、中央部は側縁の加工を切っている。つまり側縁の加工と基部の加工が交互に実施されていたことを示唆している。40は石錐である。全体形は有茎の石鏃や尖頭器を彷彿させるが、先端部を突出させるような



図7 根方岩陰遺跡の石器 (1)

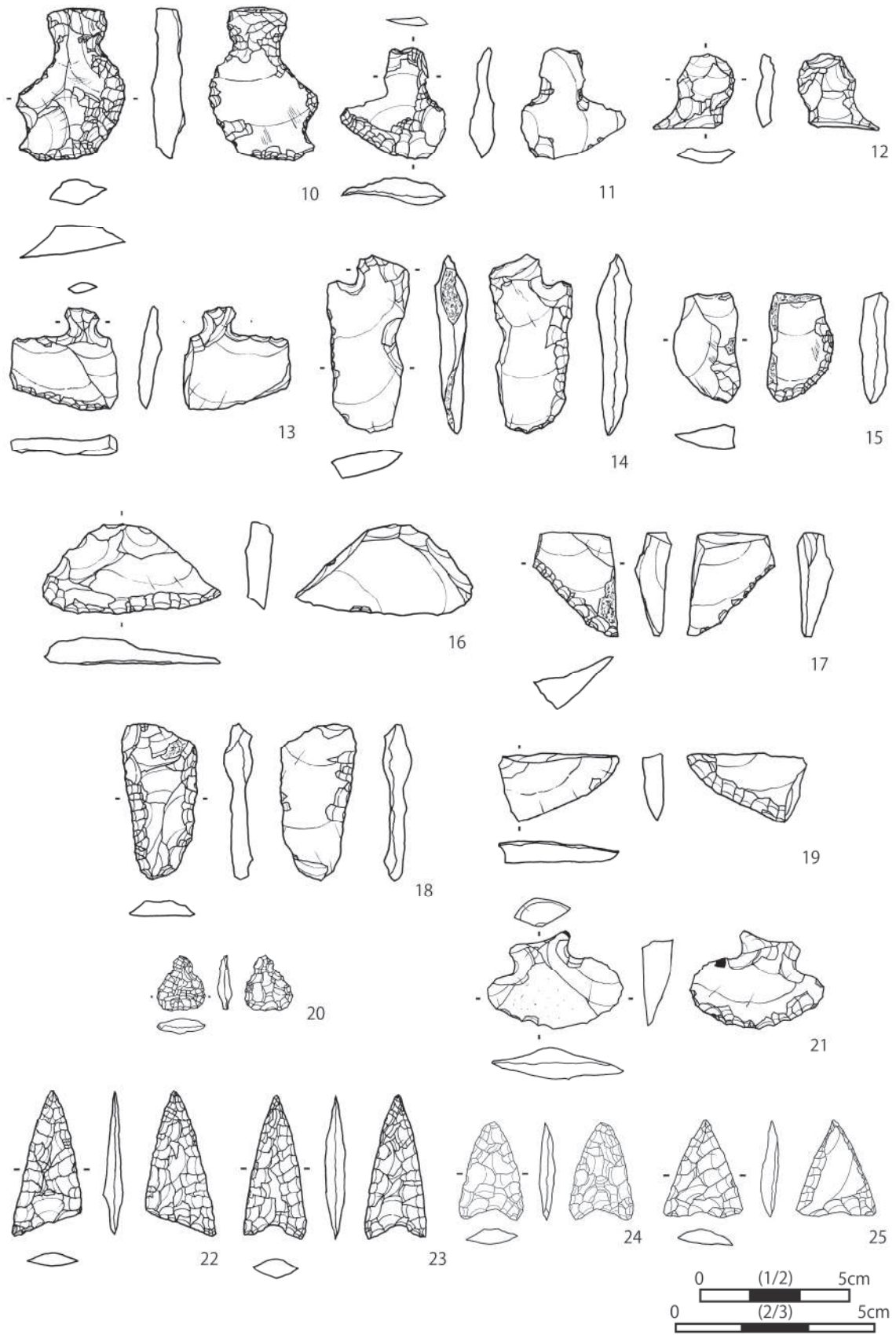


図8 根方岩陰遺跡の石器 (2) 10-21 : S=1/2、22-25 : S=2/3

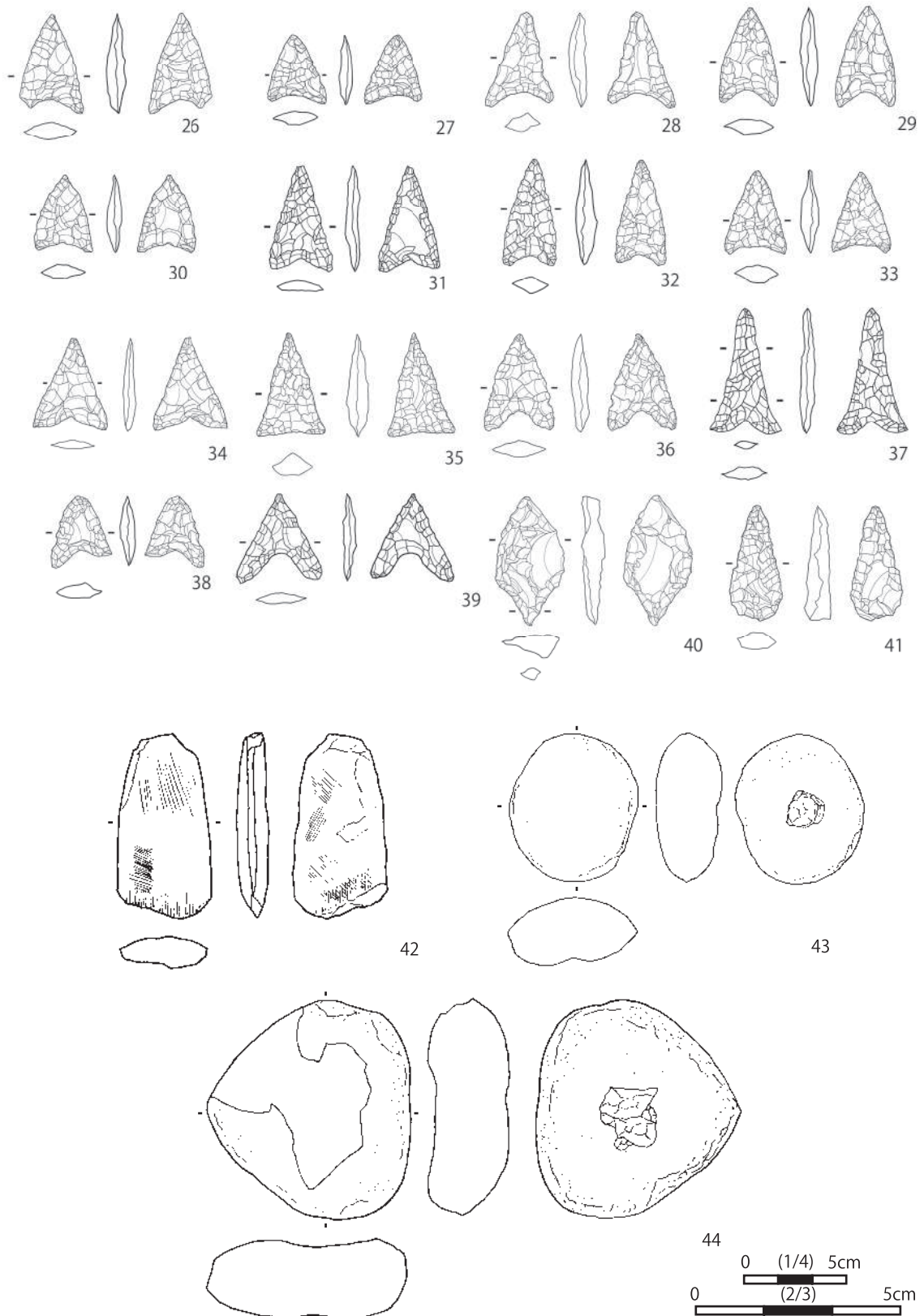


図9 根方岩陰遺跡の石器 (3) 26 ~ 42 : S=2/3、43 ~ 44 : S=1/4

表1 石鏃観察表 (1)

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
22	511	4	185	A 中Ⅶ?	下部	下呂石	35.7	15.14	5.32	
23	514	4	195	A 中	下部	下呂石	36.4	17.27	4.84	
24	477	3	195	AⅦ'	下部	下呂石	23.68	15.62	3.81	
25	453	3	211	AⅦ	下部	下呂石	23.82	19.46	3.87	
	489	4	187		下部	下呂石	17.47	14.78	5.24	
26	497	4	185	A 中	下部	下呂石	23.75	15.11	4.65	
	490	4	188		下部	下呂石	21.88	13.34	3.74	
	517	2	195	Ⅶ	下部	下呂石	17.78	14.59	4.48	
	479	4	180	A 中	下部	チャート	13.46	13.33	4.14	
	254	3	158	Ⅶ~Ⅱ''	中部 (下)	下呂石	26.02	15.46	4.54	
27	427	3	170	α -A Ⅵ~Ⅶ	中部 (下)	黒曜岩	16.1	13.67	3.49	
	488	2	170	Ⅶ	中部 (下)	下呂石	25.13	19.61	4.86	
	506	2	165	Ⅶ	中部 (下)	下呂石	22.23	16.87	4.63	
	468	2	163	Ⅶ	中部 (下)	下呂石	23.15	15.14	4.31	
	536	2	158	Ⅱ''	中部 (下)	下呂石	20.26	15.61	4.33	
28	513	2	174	Ⅵ	中部 (下)	下呂石	21.89	15.76	4.67	
	470	4	160		中部 (下)	下呂石	19.65	14.83	5.31	
	483	4	177		中部 (下)	下呂石	23.26	17.3	4.64	
	448	4	164		中部 (下)	チャート	19.32	14.1	3.53	
29	463	4	168		中部 (下)	サヌカイト	23.48	14.21	3.72	
30	461	4	163		中部 (下)	チャート	18.57	13.77	3.75	
	414	2	148	Ⅱ''or 下	中部 (中)	黒曜岩	13.2	10.92	2.81	
	434-1	2	153	Ⅱ''or 下	中部 (中)	下呂石	21.26	12.38	4.96	
	445	2	166	Ⅱ''or 下	中部 (中)	下呂石	18.17	14.77	3.64	
31	474	1	146		中部 (中)	黒曜岩	25.09	14.97	3.09	
32	342	2	139	Ⅶ	中部 (中)	チャート	25.01	12.76	5.24	
	298	2	142	V'	中部 (中)	黒曜岩	21.46	13.06	4.14	
	422	2	149	Ⅱ''(Ⅶ)	中部 (中)	チャート	17.57	12.37	3.57	
	415	2	147	Ⅱ''(Ⅱ中)	中部 (中)	黒曜岩	19.85	13.93	3.99	
	280	2	125	Ⅱ~Ⅱ''	中部 (中)	チャート	17.26	13.4	3.64	
	420	2	150	Ⅱ''	中部 (中)	チャート	13.42	14.36	2.65	
	313	3	128	a I 下	中部 (中)	黒曜岩	18.6	14.33	3.7	
	529	1	142		中部 (中)	下呂石	17.48	14.2	4.65	
33	355	4	119		中部 (中)	黒曜岩	19.74	14.66	5.3	
	414	2	148		中部 (中)	チャート	20.95	19.17	3.53	未成品
	330	2	130		中部 (中)	下呂石	18.86	19.02	4.42	
	124	3	80	Ⅱ~Ⅲ	中部 (上)	下呂石	16.9	16.13	3.29	
	109	3	82	Ⅱ(Ⅲ)	中部 (上)	チャート	28.74	21.13	4.79	
	123	3	80	Ⅱ	中部 (上)	黒曜岩	14.21	13.46	3.04	
	202	2	99.5	Ⅲ	中部 (上)	黒曜岩	21.78	10.77	3.12	
34	247	2	106	Ⅱ(Ⅳ')	中部 (上)	下呂石	21.84	17.82	2.88	
	199	2	96	Ⅲ	中部 (上)	黒曜岩	20.93	16.8	2.55	
	249	2	106	Ⅱ(Ⅳ')	中部 (上)	下呂石	18.63	18.33	4.08	
	192	3	125	Ⅱ~Ⅱ''	中部 (上)	チャート	16.88	16.46	3.84	
	214	2	100	Ⅱ	中部 (上)	黒曜岩	23	6.64	3.84	
35	196	3	約120	Ⅱ	中部 (上)	チャート	24.99	16.32	5.55	
36	263	2	104	Ⅱ	中部 (上)	チャート	24.25	17.81	4.52	
37	182	2	93	Ⅲ	中部 (上)	下呂石	30.1	15.49	3.58	
	201	2	97	Ⅲ	中部 (上)	黒曜岩	14.12	16.17	3.63	
	524	1	100	カ	中部 (上)	黒曜岩	19.38	17.55	3.05	

表2 石鏃観察表 (2)

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
38	101	1	91		中部 (上)	チャート	14.46	10.36	3.15	
	95	1	96	カ	中部 (上)	チャート	17.94	13.3	3.56	
	267	4	88		中部 (上)	下呂石	14.99	15.1	3.56	
	240	4	72		中部 (上)	黒曜岩	18.63	8.72	4.28	
	158	4	74		中部 (上)	下呂石	20.03	13.19	2.78	
	80	1	90		中部 (上)	チャート	16.77	11.56	2.8	
	454-4	1	127		中部 (上)	サヌカイト	16.68	13.85	3.36	
	108	2	70	I	上部	チャート	30.75	23.7	7.76	
	154	2	85	V, (IV')	上部	下呂石	26.67	15.72	4.19	
	71	2	71	I	上部	下呂石	19.6	19.87	2.43	
	146	2	76	I	上部	黒曜岩	24.79	15.57	2.77	
	138	2	72	I~II	上部	チャート	12.69	13.79	3.88	
	73	2	61.5	II	上部	下呂石	22.04	15.19	3.48	
	195	2	67	II (IV)	上部	チャート	25.13	15.6	3.96	
39	20	12	33	II上	上部	サヌカイト	20.57	20.07	2.91	
	82	2	56	II	上部	下呂石	22.37	11.04	3.04	
	62	2	55	II'	上部	下呂石	18.14	12.04	2.6	
	188	4	66	X	上部	下呂石	16.98	11.1	3.31	

表3 石錐観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
40	501	2	163	VII	中部 (下)	チャート	39.32	23.04	12.22	
	471	4	160		中部 (下)	チャート	23.92	8.53	3.9	
	409	4	131		中部 (下)	チャート	36.13	18.97	7.29	
	393	4	115		中部 (中)	チャート	38.87	12.38	6.72	
	336	2	104	I~II	中部 (上)	チャート	21.58	15.31	7.61	
	214	2	100	IV'	中部 (上)	黒曜岩	15.68	8.95	2.62	
41	215	2	94	IV' (II)	中部 (上)	頁岩	30.8	12.22	4.85	
	144	2	80	II	上部	チャート	27.82	13.23	5.89	

表4 磨製石斧観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
41	405	3	143	α II''	中部 (上)	蛇紋岩				
	74-1	1	93	オ	中部 (上)	流紋岩				

表5 敲石観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
—	510	1	175		中部 (下)	安山岩	121.94	79.47	53.68	
	512	2	180		中部 (下)	安山岩	72.93	68.42	50.24	
	359	2	147	VI~(I)	中部 (中)	安山岩	99.2	93.51	48.39	
	—				上部		99.2			

表6 凹石観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
43	360	2	140	II''~VII	中部 (中)	砂岩	70.01	58.55	30.87	
	395	4	117		中部 (中)	礫岩	98.16	68.92	27.19	
	349	4	113		中部 (中)	安山岩	111.6	60.95	31.89	
	456	4	158		中部 (下)	安山岩	109.57	90.97	63.4	

表7 石皿観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
44	340	2	140	VI	中部 (中)	—	107.49	103.51	36.94	

表8 磨石観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	備考
	320	4	112	Xa上	中部(中)	濃飛流紋岩	95.1	83.51	44.1	

表9 石匙観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	刃部の加工の方向			刃部角(°)				備考
										左	右	末端	1	2	3	4	
	363	3	131	a I下	中部(下)	チャート	44.29	36.11	11.83	腹	腹		52	43			
7	487	2	177		中部(下)	チャート	72.23	23.02	7.81		腹			54			
8	316	3	127	II'	中部(中)	チャート	61.84	36.49	7.14	腹	背		47	46			
9	274	4	101		中部(中)	チャート	29.9	49.26	9.74			腹		51			
	84	3	83	III~I	中部(上)	チャート	28.42	44.54	7.12			腹		43			
	236	2	106	I(III)	中部(上)	チャート	36.75	28.79	6.97	腹	背		35	34			
11	170	2	90	II	中部(上)	黒曜岩	36.65	34.04	8.3			腹		47			
13	384	2	105	I~II	中部(上)	下呂石	33.28	35.41	5.7			背		56			
12	272	2	105	II(IV')	中部(上)	下呂石	28.63	26.54	6.76							つまみ部分のみ残存	
	113	1	99	?	中部(上)	チャート	39.62	48.98	7.94			腹		60			
	122	1	98	カ(キ)	中部(上)	チャート	25.71	43.48	8.26			腹		60			
10	212	4	87	X	中部(上)	黒曜岩	50.02	34.25	9.87	腹	腹		49	58			
14	174	4	76		中部(上)	下呂石	56.63	32.15	10.52	背			41				
	121	1	112		中部(上)	チャート	55.71	31.36	7.64	腹			63	55			
	454	1	127	キ?	中部(上)	チャート	45.98	37.45	8.19	腹	腹		59				
	12	3	60	II上	上部	下呂石	82.29	33.16	10.14			腹		61			
	41	2	71.5	II	上部	頁岩	36.39	32.81	7.12			腹		49			
20	22	2	58	II	上部	チャート	18.27	15.39	5.03			両		52			
21	142	4	64		上部	下呂石	33.16	44.62	10.44			腹		59			
	131	2	70	IV~IV'	上部	下呂石	35.03	58.89	8.62		両	腹	64	40			
	49	3	50		上部	チャート	59.5	29.61	6.37	腹	背		48	39			

表10 スクレイパー観察表

実測図番号	ID	地区	深度	層位	段階区分	石材	最大長	最大幅	最大厚	刃部の加工の方向			刃部角(°)				備考
										左	右	末端	1	2	3	4	
2	450	3	202	VII'	下部	下呂石	62.53	32.38	15.94	腹			50				
1	509	2	180		下部	下呂石	57.53	22.46	10.51	両	両		71	60			
3	508	2	194		下部	下呂石	89.28	38.12	15.49	両	両		64				
	476	3	190		下部	流紋岩か	58.72	56.18	17.91	背	両	背	78	76	71		
4	535	2	162	II'	中部(下)	下呂石	52.74	42.98	9.45	両	両		45	34			
	436	3	178	A VI下	中部(下)	下呂石	31.39	55.28	10.6			背	71				
	462	4	168		中部(下)	チャート	90.83	54.77	19.19	腹	両		49	64			
	438	4	145		中部(下)	下呂石	56.61	37.95	8.6	腹	腹		65	39			
	431	4	137		中部(下)	下呂石	39.49	56.6	11.1			背	64				
5	399	4	130		中部(下)	—	46.2	38.22	12.52	背	背		65	72			
	290	2	128	V'	中部(中)	下呂石	39.32	49.19	9.06		両		55	47			
	193	3	120	II''	中部(中)	チャート	39.54	35.51	9.52	腹			43				
	164	3	123	II~II''	中部(中)	下呂石	51.02	42.16	10.65	腹		腹	49	72			
	530	1	144		中部(中)	下呂石	84.19	56.46	25.39	両	両		63	57	79		
	524	1	144		中部(中)	下呂石	66.02	37.44	10.21	腹	腹	腹	48	64			
	365	4	129		中部(中)	—	37.05	48.53	12.24		両	腹	57	34			
8	316	3	127		中部(中)	チャート	61.84	36.49	7.14	腹	背		47	46			
	321	4	118		中部(中)	下呂石	53.76	38.07	12.48	腹		腹	24	33			
16	222	2	104	III	中部(上)	下呂石	30.19	58.93	8.79			腹	50				
15	175	2	95	II	中部(上)	黒曜岩	33.71	20.31	8.44		腹	腹	32				
18	204	2	99.5	I	中部(上)	チャート	52.09	26.56	8.99	両	腹		42	54			
19	148	3	103	II	中部(上)	下呂石	38.76	22.25	5.83	腹			50				
	125	3	99	II~(III)	中部(上)	チャート	24.8	27.24	4.74		腹		48				
	223	2	94	III	中部(上)	チャート	38.14	27.15	9.36	両	両		70	79	63	69	
	260	2	109	II(IV')	中部(上)	チャート	42.53	68.33	18.42			腹	53				
	125	3	109	II~II'	中部(上)	チャート	40.77	32.65	6.71	腹			36				
17	165	3	105	III	中部(上)	下呂石	34.53	26.57	10.67	腹			43				
	119	1	103	?	中部(上)	チャート	41.31	36.57	7.91	腹	腹		51	34			
	227	4	75	X	中部(上)	チャート	65.87	39.95	11.52	腹			32				
	120	1	111		中部(上)	メノウ	28.85	52.23	9.3			両	51				
	207	2	96	II(IV')	上部	下呂石	67.38	41.08	10.51		腹		57				
	238	2	78		上部	—	49.71	34.66	15.82	腹			46				

加工は明確でないことを踏まえると石錐とするのが妥当である。全体形を大まかに整えた後、錐の部分を周到に加工している。

(3) 中部(中)の石器

7は剥片剥離時に縦に半裁した剥片を素材としているスクレイパーである。背面からは打面転移を経て作出された剥片であることがうかがえる。背面側にいくつか大きめの剥離を施したのち、それを打面に腹面右側縁に細かく加工を施しているが末端部まで到達しない。背面下部に見られる複数の剥離痕は鋭利な部分を取り除く目的のものであろう。石材は流紋岩。8、9は石匙である。8は連続して同じ打面で剥がされている縦長の剥片を素材としている。平坦な剥離による整形は見られない。加工は両面にあるが背面左側縁は両面から加工されているのに対し、背面右側縁は腹面側からのみ加工されている。末端の折れ面は両側縁の刃部の形成後に生じたもので、細かなリダクションがみられる。継続して使用されたものと考えられる。石材は黒色のチャート。9は横長の剥片を素材とする石匙である。つまみ部分は明瞭でないものの、両面からの加工によってつまみを形成しようと試みており、一方の刃部は腹面側からの加工によって形成されている。背面右下の刃部が欠損しているため、未成品ではなく使用されていた可能性は高い。石材は赤いチャート。

31-33は石鏃である。31は側縁と基部の加工を入れ替えながら施している。32は基部の加工後に側縁の加工が施されている。側縁の剥離痕が大きいものが目立つ。33は側縁と基部の加工を入れ替えながら施している。42は凹石である。表面のみに使用の形跡が見られる。43は石皿である。しかし裏面は石皿として、表面は凹石として使用された形跡がある。

(4) 中部(上)の石器

10-14は石匙である。10は、やや寸詰まりの縦長の剥片を素材としている。打点部にはコーンがよく発達している。つまみの部分は厚みを減らす加工を施したのち抉るような加工を施すことによって形成されている。両面ともに半円状に刃部形成のための加工が施されているが特に背面はそれが細かく無数にある一方で、腹面は細かなくまばらである。半円状に大きく抉れている部分は大きく抉る加工を施したのち、細かな加工で形を整えていることから、この形状は何らかの用途を想定して形成された可能性がある。石材は黒曜岩である。11は幅広の剥片を横に倒した状態で素材としている。素材剥片剥離時に形成されたガルウィングの一部が見られる。背面右の大きな剥離痕や、折

り取る加工によって全体形を整えたのち、つまみ部分や刃部を作出している。12は石匙のつまみ部分のみ残存したものである。つまみの大きさから、欠損部分はかなり大きなものであったであろう。石材は下呂石。13は横長の剥片を素材とする。つまみは両面から加工が施されている。つまみの上部は形を整えるだけでなく厚さを減らすための剥離も施されている。背面左側の折れ面はつまみの形成後に形成されている。刃部との前後関係は不明だが、全体形を整えるために意図的に折り取った可能性がある。刃部は背面側から加工されている。石材は下呂石である。14は縦長の剥片を素材とする石匙である。つまみ部分は大きな剥離によって形成されており、細かな加工は認められない。刃部は背面側から腹面側にかけて形成されている。一方で背面の左側縁の剥離痕は使用時に生じたものであろう。石材は下呂石。

15-19はスクレイパーである。15は自然面を打点とする縦長の剥片を素材としている。背面側からの精巧な剥離によって刃部は形成されている。石材やまだら状にわずかに赤みを帯びる黒曜岩である。16は腹面側に残された平坦な剥離面から横長の剥片を素材としたものと推測される。打面や末端形状は、整形によって喪失されている。腹面側からの加工によって形成されている。腹面右側の折れ面は刃部の加工後にできたものである。石材は下呂石である。17は腹面側からの加工で刃部が形成されている。腹部側の剥離痕は恐らく使用時のものであろう。背面左側の折れ面は刃部を作出後であるため使用中に生じたものであろう。石材は下呂石。18は縦長の剥片を素材としている。コーンは発達している。腹面右側縁の一部に形を整えるための加工がわずかに施されている。刃部の加工は腹面側からの剥離のみで形成されている。末端の折れ面は加工後に形成されたものであろう。石材はチャートである。19はスクレイパーの中では比較的小型である。背面上部の折れ面は刃部の作出前に形成されているため意図的に小さい素材を選定したことがうかがえる。一方で腹面右側の折れ面は刃部形成後に生じている。刃部は背面側からのみの加工で形成されている。素材の影響で腹面刃部が右側に行くにつれて斜度が緩やかになる。石材は下呂石。

34-38は石鏃である。34は側縁の加工が基部の加工に先行している。表面・裏面ともに、左側縁の加工を、右側縁の加工が切っていることは側縁の加工の前後関係を示唆している。脚部はやや外にふんばっている。35は基部の加工と側縁の加工が交互に施されて

いる。36の表面は基部の加工の後に側縁の加工が施されているが、裏面は側縁の加工の後に基部の加工が施されている。37は全体形が二等辺三角形で、脚部が外側にふんばるように開いている。基部の加工は側縁の加工の後に施されている。42は蛇紋岩製の磨製石斧である。末端部がやや欠損している。

(5) 上部

20は小型の石匙で素材剥片の形状は不明である。全面に周到に加工が施されているが、腹面から背面にかけて刃部作出のようにより細かい加工が施されている。21は横長の剥片を素材とした石匙である。つまみ部分は大きな剝離痕によって形成され、やや粗雑である。刃部は背面側からの加工によって形成されている。腹面側には使用時に生じた剝離痕が散見される。石材は下呂石。39は石鏃である。基部と側縁を交互に加工し、形を整えている。41は石錐である。全体に周到な加工を施している。

5.1.2 各時期（土器型式段階）の石器の傾向

スクレイパー類、石鏃のそれぞれの石材割合は図10と図11のとおりである。各時期において、石器石材の割合に変動がある。下部は石鏃・スクレイパー類ともに下呂石製⁴⁾のものが大多数を占める。しかし中部（下）からは石鏃の石材に黒曜岩が含まれるようになる。さらにスクレイパー類はチャート製の利用が増えるなど下呂石以外の利用が進む。中部（中）になると石鏃の石材において下呂石の利用が停滞し、チャートや黒曜岩の占める割合が増大する。スクレイパー類においてはあまり変わらない。中部（上）で

は石鏃は石材割合にあまり変わらないが、スクレイパー類では、これまで石鏃でのみ利用されていた黒曜岩製のものが出現するようになる。これは供給される素材に大きいものも含まれるようになり、スクレイパー類の素材として利用できるようになったためと考えられる。逆にそれ以外の段階では黒曜岩は石鏃のような小さい石器にしか利用できない程度の大きさの素材しか搬入されていないことを意味する。またチャートの利用も目立つ。上部ではまた石鏃・スクレイパー類ともに下呂石の利用が目立つようになる。こうした石材利用の傾向はおそらく、遠隔地石材の供給量、搬入される素材の大きさに起因する。黒曜岩の中には透明な部分が存在しているものが多く西霧ヶ峰系の黒曜岩の可能性が高い。産地と当該遺跡の間には険しい山岳地帯が聳えているが、それを越えてここまでやってきたものと想定できよう。そしてその背景には当然、それらの集団とのつながりの強弱を見出すことが出来る。一方でチャートは遺跡の周辺に分布しており、在地の石材として遠隔地石材の供給を補うように使用されたものと考えられよう。またわずかにサヌカイト製の石器も見られたが、これは当該遺跡で最も遠方からもたらされたものの一つであろう。

また各段階における石鏃とスクレイパー類の割合を出したものが図13である。中部（上）の段階において石鏃とスクレイパー類の割合が同じ程度になり、かつその出土数も他の段階に比べ多い傾向にある。このことはこの段階において活発な生活の姿を考えることができる。

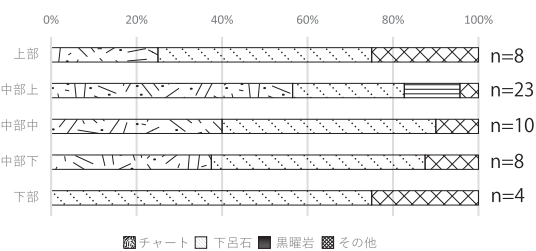


図10 スクレイパー類の石材割合

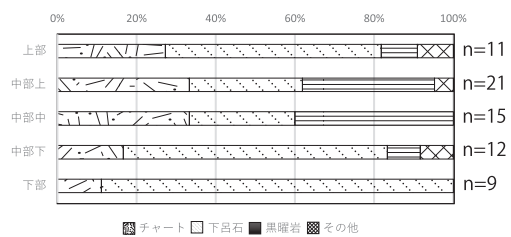


図11 石鏃の石材割合

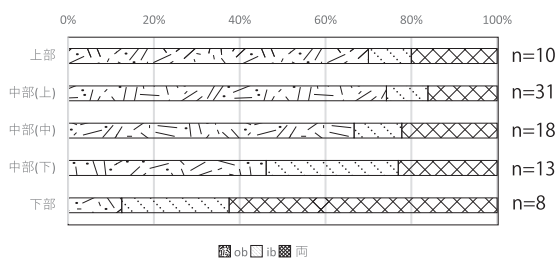


図12 スクレイパー類の加工傾向

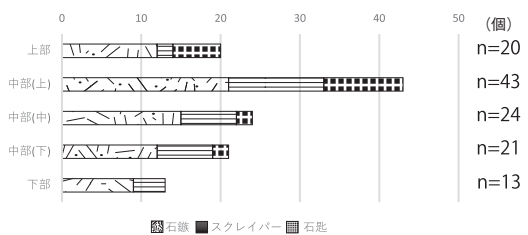


図13 各段階における石鏃とスクレイパー類の数

またスクレイパー類について、各種分析を試みた（図12）。刃部の加工については、各段階とも腹面側から背面側への二次加工（obverse retouch）が主流であるが中部（下）では背面側から腹面側への二次加工（inverse retouch）も目立つ。さらに中部（中）では両面加工が目立つ。また刃部の枚数も中部（下）や中部（中）では2枚以上設けられるのが主流であるが、一方で中部（上）や上部では1枚のみ設けるものが増える。ここに各段階における技術的な傾向を見出すことが出来る。

またスクレイパー類の刃部角についても若干の変化を見出すことが出来る（図14）⁽⁵⁾。中部（下）は刃部角が高いものが多いが、中部（中）では71-80°と41-50°の級間にピークが見られる。高い刃部角が存在する一方で、刃部角が低いものも存在することは、双方が求められたものであろう。中部（上）になるとその刃部角のピークは51-60°の級間とやや高くなるが、全体的に、50°以下のように刃部角の低いものも多い。各段階において求められる刃部角に若干の差異がある可能性を示唆する。

形態的にも特徴的なものをいくつか見出すことが出来る。下部で出土した石鏃25はいわゆる長靴鏃である。

これは下部で高山寺式土器が出土したことと調和的である。しかし石鏃22や23のような大型の石鏃が高山寺式土器に共存する事例は寡聞にして聞かない。しかし同じく下部で出土する貫ノ木式に近い沈線文土器期の遺跡である鍋久保遺跡でこのような石鏃が出土している（森島他1976）。つまりこの石鏃は沈線文土器に伴う可能性がある。根方岩陰遺跡には東西の文化の重なりを石鏃からも示唆しているのである。

上部で出土した石鏃39は形態的に近畿地方で見られる「脚端部が尖り、基部下縁がふくらむ」（大下2003）石鏃に類似する。この石鏃が近畿地方で出現する時期も上部の時期に近い。この石鏃の石材がサヌカイトであることも踏まえると近畿的な石鏃の形態がここまで持ち運ばれていることを示唆している。当該遺跡でサヌカイト製の剥片も出土しているが、上部で出土する他の石鏃とも形態的に孤立していることを踏まえるならば、完成品がここまで持ち込まれた可能性は充分にある。

また158のような小型の石匙は北陸地方や東北地方近畿地方でも散見されている。前期末に出現することが示唆されており（五味1983、上峯2018）、上部で検

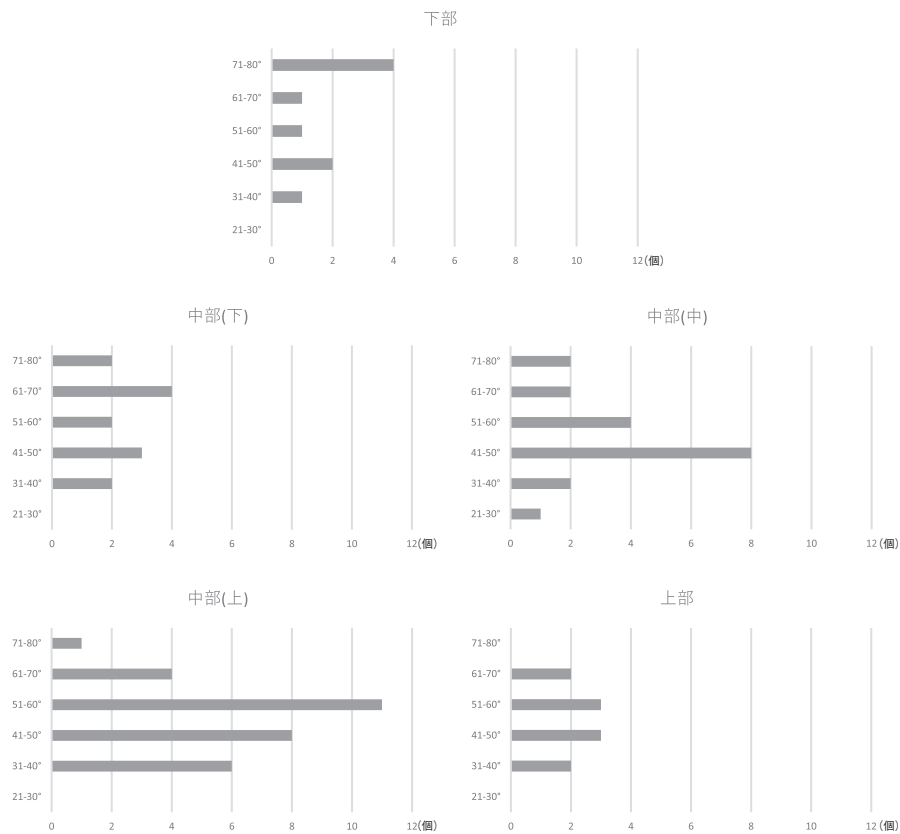


図14 スクレイパー類の刃部角の角度

出されたことと矛盾しない。

尚、剥片と石核に関しては、収蔵されているものの、深度情報等を復原できたものは少ない。そのため分析や比較検討は困難であった。しかし残された資料からは若干の検討はできた。

下部では剥片、石核は、一切見られなかった。つまり下部では製品のみが出土したことになる。それは下部の段階において、当該地域で剥片生産をしていないことを示唆する。このことは下部における資料数の少なさや石材割合において下呂石がその大半を占めることとリンクする。また近辺に分布する在地石材であるチャートが他の段階と比べほとんど利用されていないことを踏まえると、岩陰の利用自体も一時的なものであった可能性を示唆する。以降の段階においては、剥片や石核が見られるようになる。また剥片の大きさについては各段階において黒曜岩製のものは他の石材と比較しても一回り小さい。それは先述した通り、当該遺跡に搬入された素材の大きさに起因する。尚、中部（中）では凹石が出土している。しかし両極打法によって得られた剥片や楔形石器などは各段階においてほとんど見られないことから基本的に直接打法によって剥片剥離は遂行されていたものと考えられる。そして凹石は剥片剥離技術以外で使用されていたものと考えられるのである。

このように各部ごとに形態的な特徴の変化や技術的傾向、石器石材の利用傾向の変化が見られた。そこには、各地域のつながりによるモノや情報の伝播などが背景にあるといえる。

5.2. 動植物遺存体

南山大学発掘調査団らによる根方岩陰遺跡の調査で得られたとされる動物遺存体について、注記があり、出土深度、層位、日付から帰属する時期（土器型式段階）が推測できる標本の動物種、部位、計測値等の基礎情報をまとめた（表 11, 表 12, 図 15, 図 16）。ただし、出土情報が確認できない動物遺存体も多くみられた。そのため、これらの出土情報未確認資料がデータに含まれないことが、各土器型式段階における出土量比データに偏りを生じさせている可能性が少なからずあることをデータの解釈に際して留意する必要がある。その他、植物遺存体が少量みられ、集計に含めた。動物遺存体についても概報（小林・早川 1967）にてある程度報告がなされているが、哺乳類遺存体の同定や計数に問題が認められることや、帰属時期ごとに資料群を分けず一括で報告しているため、改めて

より正確かつ扱いやすいデータを提示する必要がある。ここではその再データ化した内容とその結果から得られる知見について示す。

結果として、帰属する段階が推測可能であった動物遺存体資料の標本数（NSP）は、動物種未同定・不明のものを含め 879 点（2929.7g）で、そのうち哺乳類が 840 点（2857.1g）と最多であった。全体的にニホンジカ *Cervus nippon* とイノシシ *Sus scrofa* が多く（図 15）、各段階において、哺乳類の中で同定標本数（NISP）の 80% 前後を占めている。ただし「哺乳類」とまでしか同定していない骨片については NISP に含まれていない。上部以外では NISP でイノシシよりニホンジカの方がやや多い。重量では全体的にニホンジカの方が多い。

ニホンジカの骨に対する角部の点数の割合は中部（下）で 1 点もみられなくなるものの、下部で一番高く（54.5%）、上部（18.2%）にかけて減少する。上部と下部ではニホンジカの角と骨の点数に有意差がある（Chi squared test, $\text{Chi}^2: 4.59, p < 0.05$ ）。下部では、骨部分が残る角の基部が 1 点みられ、落角していないことから、秋から春（冬季）の間に死亡したものと考えられる。下部の時期（縄文早期中葉）において、冬季に根方岩陰を利用していた可能性が想定できる。一方、中部（下）段階ではニホンジカの角がみられず、前後の段階と有意に差がある（Chi squared test, $\text{Chi}^2: 11.22$ and $8.96, p < 0.005$ ）。下部と中部（中）段階のニホンジカの角と骨の NISP では有意差はみられない（Chi squared test, $\text{Chi}^2: 0.30, p = 0.581$ ）。このことから、中部（下）の時期には鹿角が得られない夏季における岩陰の利用がなされていた可能性も考えられる。しかし、前述のように出土情報が確認できない資料があることを考えると、ニホンジカの NISP が 11 から 30 点というサイズの小さな資料群におけるこうした比率の差による推測の信頼度は充分でない。中部（下）段階は NSP 中の NISP の割合が最も低く（17.5%）、むしろここでは風化が進んだために鹿角表面の特徴的な凹凸（舂目、ヌタメ）を確認できず角が同定されなかったという解釈も提示しておきたい。

ニホンジカとイノシシ以外では、ニホンカモシカ *Capricornis crispus*、ツキノワグマ *Ursus thibetanus*、ニホンザル *Macaca fuscata*、ムササビ *Petaurista leucogenys* といった山地性の動物種がみられる他、水辺を好むサギ科 *Ardeidae* gen. の遺存体もみられる。これらの動物種の存在は、山地が多く、河川に近い根方岩陰周辺の地形や立地を反映していると考えられる。ムササビや

表 11 根方岩陰遺跡の動物遺存体集計表

段階区分	ヒト	ニホンザル	ムササビ	ノウサギ	ツキノワグマ	イヌ科	カワウソノ/アナグマ	アナグマ	ニホンシカ(角)	ニホンシカ(骨)	イノシシ	ニホンカモシカ	有蹄類	哺乳類	サギ科の一種	ヤカドツノガイ	キセルモトキ	オオケマイマイ	マイマイ属の一種	ベンケイガイ	イシガイ科の一種	一枚貝	未同定	不明	オニグルミ
上部	1			1	7	2	1	2	4	18	23			133			1	1		2	4		9	1	209
中部(上)	1	1		3	3		1	2	6	24	14	3		240	1	1	1			4	1	1			301
中部(中)		1	1	4	4			7	7	9	11		61								1				95
中部(下)				4	4			16	16	10	2	2	4	154	1		1				1	5	2		200
下部		1	1			1		6	6	5	5		53			1									74
合計	2	3	2	1	18	3	1	2	23	72	63	5	4	641	2	1	3	1	1	1	7	11	1	11	879
上部	1			1	7	2	1	2	4	18	23			295.0			1	1		2					63
中部(上)	1	1		3	3		1	6	6	24	14	3		504.1	1	1	1			4	4				59
中部(中)		1	1	4	4			7	7	9	11			126.3											33
中部(下)				4	4			16	16	10	2	2	4	386.4	1	1	1				1				35
下部		1	1			1		6	6	5	5		152.8			1									21
合計	2	3	2	1	18	3	1	2	23	72	63	5	4	2	1	3	1	1	1	7	11	1	11	11	210
上部	13.9			1.6	56.7	1.6	1.5	3.0	33.3	116.5	115.1			295.0			0.6	0.4		15.7	7.5		3.6		666.0
中部(上)	1.0	2.4		6.9	6.9		184.6	152.1	108.2	18.4				504.1	0.6	8.2	0.4			17.4	0.5	1.0			1005.8
中部(中)		3.0	0.9	55.6	55.6		44.0	56.5	95.1					126.3								2.3			383.7
中部(下)				26.9	26.9		118.2	52.4	9.9	16.3	386.4	1.2	0.6	386.4	1.2	0.6				1.6	4.8		1.7		620.0
下部		3.6	1.0			0.4	40.2	23.3	28.4					152.8		0.6									254.2
合計	14.9	9.0	1.9	1.6	146.1	2.0	1.5	3.0	302.1	466.6	399.2	28.3	16.3	1464.6	1.8	0.6	1.6	0.4	3.9	34.7	15.1	1.0	5.3	5.3	2929.7
重量 Weight (g)																									

表 12-(1) 根方岩陰遺跡出土動物遺存体基礎データ

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L/R	近位 Shaft	距離 Distal	>50% remains	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Heal	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (other measurements, catch, polished, etc.)	
1	1	ウ	上部	?	688	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							119.3	20.4	18.1	19.6			Tip part (fine)	
2	1	ウエ	上部	83	69	イノシシ	Sus scrofa	Distal phalanx	y	y	y	y	30.2	15.0	14.0				30.2	15.0	14.0	1.7			Left side	
3	1	ウ	上部	?	689	クルミ	Juglans mandshurica	Nutshell				n							22.9	17.9	8.5	0.6	?			
4	2	II上	上部	?	660-11	ニホンノウサギ	Lepus brachyurus	Femur	R	y		n							47.8	18.8	12.8	1.6	y			
5	2	II'	上部	24	57	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	C1				y							17.9	11.6	53.1	6.9			Lower left side?	
6	2	II上	上部	?	660-3	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Humerus	L			y					57.9	27.5	39.8	57.9	27.5	12.6	y			
7	2	II上	上部	35	4-1	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Humerus	L	y		n							60.6	42.9	24.2	16.1	y		Smooth perpendicular	
8	2	II上	上部	?	660-1	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	3rd metacarpus	R	y	y	y	48.5	11.4	9.2	15.0	11.4	11.6	48.5	11.4	15.0	1.8	y			
9	2	II上	上部	?	660-2	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	3rd metacarpus	R	y	y	y	47.4	11.6	9.2	15.4	11.6	11.6	47.4	11.6	15.4	2.0	y			
10	2	II上	上部	35	4-11	イヌ科	Canidae gen.	Radius	L			y					12.9	8.4	38.1	12.9	8.4	0.8	y		Smooth perpendicular	
11	2	II上	上部	?	660-10	イヌ科	Canidae gen.	Ulna	L	y		n							33.9	6.3	12.3	0.8			Irregular perpendicular	
12	2	II上	上部	?	660-12	カワウソノ アナグマ	Lutra lutra or Meles anakuma	Femur	R	y		n							39.0	22.3	11.8	1.5	y			Meles?
13	2	II	上部	63	98-1	ニホンアナグマ	Meles anakuma	Femur	R			y					18.5	15.8	52.4	18.5	15.8	1.8				
14	2	II上	上部	?	660-13	ニホンアナグマ	Meles anakuma	Tibia	L	y		n							35.1	17.9	14.7	1.2	y			Smooth perpendicular
15	2	II'	上部	61	23	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							96.6	12.7	6.8	5.3				Worked
16	2	II上	上部	35	4-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							30.6	7.3	7.0	0.9	y			
17	2	II	上部	63	98-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							102.8	20.5	9.4	7.5				
18	2	II上	上部	?	660-6	ニホンジカ	Cervus nippon	Radius	R	y		n			40.6	22.2			86.7	40.6	22.2	21.0	y			Irregular perpendicular 660-5 ulna may be the same individual.
19	2	II上	上部	?	660-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Ulna	R	y		n							72.9	16.4	31.9	5.8	n			Proximal part
20	2	II上	上部	?	660-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Ulna	R	y		n							72.6	19.3	39.4	8.7				Smooth perpendicular
21	2	II上	上部	?	660-7	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus	L	y		n							25.9	19.6	14.8	3.0	y			Anterior part
22	2	II上	上部	35	4-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus				y							73.7	18.8	6.6	4.3				
23	2	II上	上部	35	4-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus				y							68.0	14.1	7.6	4.3				
24	2	II上	上部	63	64	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus				n							108.3	12.3	7.2	3.9				Smooth perpendicular
25	2	II	上部	63	98-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus				y							41.1	13.6	5.3	1.7				Anterior part
26	2	II上	上部	?	660-8	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	L	y		n							45.1	20.0	9.7	3.0	y			Posterior part
27	2	II上	上部	?	660-9	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus				n							35.7	17.8	7.2	2.3	y			Anterior part
28	2	IV(II上)	上部	65	116	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus				y							81.4	10.1	7.7	5.7				One end is polished and sharpened. Anterior part.
29	2	II	上部	63	98-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus				y							71.9	13.1	7.6	3.4				
30	2	II	上部	63	98-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus				y							41.4	16.0	6.3	2.5				
31	2	II上	上部	?	660-18	ニホンジカ	Cervus nippon	Thoracic vertebra				y							49.5	41.6	43.3	6.7	y			
32	2	II上	上部	35-84	742-1	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	L			n							45.8	23.0	34.6	7.3				C1-P2 remain.
33	2	II上	上部	35-84	742-2	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	R			n							44.8	26.7	40.7	6.9				A premandibular remain.

表 12-(2)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 Lateral	近位 Proximal	遠位 Distal	磨蝕 Shaft	直径 Diameter	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Fusion	被熱 Burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks <small>(other measurements, checked, polished, etc.)</small>	
34	2	II上	上部	35	4-6	イノシシ	Sus scrofa	Upper incisor				y								51.2	7.2	10.6	3.0					
35	2	II上	上部	35	4-7	イノシシ	Sus scrofa	Upper incisor				n								30.8	8.2	14.6	1.2					
36	2	II上	上部	35	4-8	イノシシ	Sus scrofa	Upper incisor				y								27.5	4.8	8.5	0.5				Deciduous teeth?	
37	2	II上	上部	35	4-9	イノシシ	Sus scrofa	Upper incisor				n								37.9	4.4	5.1	0.8				Deciduous teeth?	
38	2	II上	上部	35-84	742-5	イノシシ	Sus scrofa	Lower incisor	R			n								40.9	8.2	8.6	2.7					
39	2	II上	上部	35	4-5	イノシシ	Sus scrofa	Lower incisor	R			y								65.3	8.1	9.5	3.4					
40	2	II上	上部	35-84	742-3	イノシシ	Sus scrofa	Premolar				y								10.9	5.1	18.6	0.5					
41	2	II上	上部	35-84	742-4	イノシシ	Sus scrofa	Molar				n								9.7	10.4	20.8	1.3					
42	2	II上	上部	35-84	742-6	イノシシ	Sus scrofa	Canine				n								13.4	8.0	40.9	2.6					
43	2	II上	上部	35-84	742-7	イノシシ	Sus scrofa	Canine				n								12.9	7.1	35.9	2.2					
44	2	IV	上部	73	102-2	イノシシ	Sus scrofa	Tooth	R	y	y	y		53.4	12.0			12.0	14.3	41.9	4.4	6.1	0.7				Deciduous incisor?	
45	2	II上	上部	?	660-14	イノシシ	Sus scrofa	5th metacarpus	R											53.4	12.0	14.3	2.7	y				
46	2	II上	上部	35-84	742-8	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Mandible				n								22.5	10.5	23.2	1.6				Some teeth remain.	
47	2	II上	上部	63	98	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Incisor				y								25.9	9.2	6.9	0.8					
48	2	II上	上部	46	2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Radius				y								57.2	18.3	7.9	2.9			Spiral		
49	2	II上	上部	?	660-17	中型哺乳類	Medium mammal	Femur				y								33.6	6.8	16.4	0.8	y				
50	2	II上	上部	63	98-7	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Tibia	L	y		n								102.2	22.9	22.1	15.0			Spiral		
51	2	II上	上部	?	660-15	中型哺乳類	Medium mammal	Phalanx				y								23.2	6.5	8.3	0.4	y			Canidae?	
52	2	II上	上部	?	660-16	中型哺乳類	Medium mammal	Phalanx	y			n								22.3	8.7	6.7	0.3	y			Canidae?	
53	2	II上	上部	35	4-12	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Phalanx	y	y		y								32.3	7.3	7.7	0.6				Macrator?	
54	2	II上	上部	?	660-20	大型哺乳類	Large mammal	Vertebra				n								69.1	17.7	15.3	2.7				Spine part	
55	2	II上	上部	?	660-19	大型哺乳類	Large mammal	Lumbar vertebra				y								43.8	35.1	39.1	9.6	n				
56	2	II上	上部	?	660-22	大型哺乳類	Large mammal	Rib				n								72.7	24.9	13.1	3.2					
57	2	II上	上部	?	660-21	大型哺乳類	Large mammal	Sternum				n								116.4	59.7	14.1	11.9					
58	2	II上	上部	?	660-23	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X26				n											32.5					
59	2	IV	上部	61	118	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n								55.7	9.9	3.2	1.2				Perforated, Polished.	
60	2	IV	上部	67	103	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				y								146.8	27.9	10.2	20.7					
61	2	IV	上部	73	102-1	哺乳類	Mammal	Bone fr.				n								39.2	3.3	2.7	0.3					
62	2	II上	上部	61-63	36, 72	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X2				n											10.6					
63	2	II上	上部	35	4-3	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. XI1				n											22.3					
64	2	II上	上部	35	4-10	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n								63.9	12.7	5.8	2.2					
65	2	II上	上部	35	4-13	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X28				n											34.3					
66	2	IV	上部	63	100	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X2				n											7.1					
67	2	II上	上部	69	104	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				y								47.1	12.2	6.4	2.4			y		
68	2	II上	上部	43	10	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				y								62.0	12.7	5.8	2.4			Spiral		
69	2	III	上部	99	229	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				y								40.1	14.8	5.6	2.0					

表 12-(3)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L側 R側	近位 Shaft Distal	遠位 Shaft Proximal	>5% Ivory remains	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	融合 fusion	被熱 burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks <small>(other measurements, checked, polished, etc.)</small>		
70	2	II上	上部	35	4-3	中・大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							24.5	8.7	5.4	0.7	y					
71	2	II上	上部	35	4-4	中・大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X3				n										3.3					Boar cranium?	
72	2	II	上部	63	98-6	中・大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X15				n										22.7						
73	2	II	上部	63	98-8	中・大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X5		y		n							31.2	10.1	9.5	0.6						
74	2	I	上部	?	677-1	キセルモトキ	Mirus reinianus	Shell				y							10.2	19.0	17.9	0.4						
75	2	I	上部	?	677-2	ネオケママイマイ	Aegista vulgivaga	Shell				y																
76	2	II上	上部	46-74	678	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell	R			n										7.0					The height was estimated from the date (4 July) and Square.	
77	2	II	上部	70	680	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell				n										8.7						
78	2		上部	35-84	3ツ	二枚貝類	Bivalvia	Shell				n							40.8	18.7	8.2	3.8					Perforated and polished. The height was estimated from the date (3 July) and Square.	
79	2		上部	33-84	743	二枚貝類	Bivalvia	Shell frs. X3				n										3.7						
80	2	II上	上部	?	660-24	不明	Unknown	Bone frs. X5				n										1.6						
81	2	II上	上部	35	4-4	不明	Unknown	Bone frs. X2				n										1.2						
82	2	II上	上部	35	4-14	不明	Unknown	Bone fr.		y		n							34.2	7.7	5.3	0.4						
83	3	I	上部	69	3	ヒト	Homo sapiens	Humerus	R	y	y	n							106.7	20.9	17.0	13.9			Irregular perpendicular			
84	3	(II上) IV	上部	46	42-1	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Radius	R	y	y	n			26.7	22.5			104.6	26.7	22.5	13.3	y					
85	3	IV (II上)	上部	54	44-1	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	4th metacarpus	R	y	y	y	56.0	12.3	12.3	17.7	13.5	11.5	56.0	12.3	17.7	4.0	y					
86	3	I	上部	50	11-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	R			n							84.9	16.3	34.8	22.7					P4-M3 remain. M1 crown length 16.5 mm, breadth 10.9 mm, crown height 8.1 mm, M2 length 18.8 mm, breadth 11.6 mm, crown height 12.1 mm, M3 length 26.1 mm, breadth 11.8 mm, crown height around 14-15 mm.	
87	3	II上	上部	27	8-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	L	y	y	n							101.3	16.8	22.5	8.4	y					
88	3	III上 (IV)	上部	44	57-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Metapodium		y	y	n							84.1	16.6	10.7	3.9	n		Spiral			
89	3	III上	上部	27	8-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Middle phalanx	y	y	y	y			16.2	21.4			41.7	16.2	21.4	5.2	yy				Hind limb, Left side?	
90	3	I	上部	50	11-4	イノシシ	Sus scrofa	Upper C1				y							17.8	10.5	32.8	2.1						
91	3	I	上部	50	11-3	イノシシ	Sus scrofa	Lower M3				n							17.8	13.4	17.7	3.8						
92	3	II'	上部	64	32-1	イノシシ	Sus scrofa	Lower I1	L			y							9.7	7.2	66.1	3.5						
93	3	II'	上部	64	32-1	イノシシ	Sus scrofa	Lower I2	L			y							10.9	8.5	66.3	4.5						

表 12-(4)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段別区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L or R	近位 Shaft	梢部 Distal	測定 >50%	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Fusion	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (other measurements, anted./posted/etc.)	
94	3	II	上部	79	85-1	イノシシ	Sus scrofa	Scapula	L	y	y	n							84.7	48.8	26.3	21.9	y	Irregular perpendicular	Length of the processus articularis 37.6 mm, breadth of the glenoid cavity 26.0 mm, smallest length of the collum 27.5 mm	
95	3	I	上部	74	53-1	イノシシ	Sus scrofa	Humerus	L			y					45.7	42.9	48.6	45.7	42.9	21.1	y			
96	3	IV (II上)	上部	54	44-2	イノシシ	Sus scrofa	Middle phalanx				y					15.2	13.8	30.6	15.2	13.8	2.0	y			
97	3	II	上部	79	85-2	イノシシ	Sus scrofa	Lumbar vertebra				y							54.4	57.2	44.6	18.7	y		Almost complete.	
98	3	I	上部	74	53-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Vertebra				n							28.1	20.8	14.6	1.5				
99	3	II上	上部	27	8-4	大型哺乳類	Large mammal	Vertebra				n							42.7	29.2	21.1	5.9	n			
100	3	II上	上部	46	43-1	大型哺乳類	Large mammal	Lumbar vertebra				n							47.9	33.6	56.1	8.1	n			
101	3	(II上) IV	上部	46	42-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.		y		n							45.7	19.7	10.5	3.5			A fragment of 42-1?	
102	3	IV (II上)	上部	54	44-3	哺乳類	Mammal	Bone frs. X4				n										10.9				
103	3	II上	上部	27	8-1	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							43.1	9.9	14.4	1.9				
104	3	II上	上部	27	8-5	哺乳類	Mammal	Bone frs. X3				n										3.6				
105	3	II	上部	79	85-3	大型哺乳類	Large mammal	Bone frs. X3		y		n										11.1				
106	3	I	上部	50	11-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							28.9	12.3	14.7	1.3			A fragment of 11-1?	
107	3	III上 (IV)	上部	44	57-2	大型哺乳類	Large mammal	Bone fr.		y		n							84.0	25.4	8.6	8.4			Spiral	Tibia?
108	3	III上 (IV)	上部	44	57-3	大型哺乳類	Large mammal	Bone fr.		y		n							50.7	14.8	5.5	2.5			Spiral	
109	3	III上	上部	46	43-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X3				n										1.2				
110	3	III上	上部	27	8-6	不明	Unknown	Bone fr.		y		n							30.8	6.1	5.6	0.4			Bird?	
111	2	II下	上部-中部	?	669	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X2				n										2.8				
112	2	IV	上部-中部	87	162	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X2				n										1.4			There is a tooth.	
113	3	III上	上部-中部	27-80	741	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	C1				y							18.1	10.3	59.6	8.9				The height was estimated from the date (3 July) and Square, Upper right side?
114	3		上部-中部	76-99	?-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							30.5	15.3	13.9	3.4	y			Cut mark. The height was estimated from the date (4 July) and Square.
115	1	カ	中部(上)	95	79-12	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Phalanx	y	y	y	y	32.6	13.4	13.4	10.5	9.7	8.3	32.6	13.4	10.5	2.2	y			
116	1	オ	中部(上)	85	97-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				?							224.0	101.1	25.6	79.9			Irregular perpendicular	
117	1	オ	中部(上)	85	97-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				?							193.7	32.9	106.1	73.9			Irregular perpendicular	
118	1	カ	中部(上)	92	75-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							47.7	15.0	9.0	3.9	y		Smooth perpendicular	
119	1	カ	中部(上)	95	79-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							108.7	17.0	19.7	13.5			Worked?	
120	1	カ	中部(上)	95	79-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							65.5	14.6	19.2	6.5			Irregular perpendicular	Tip part (fine)
121	1	カ	中部(上)	95	79-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Radius	R	y		n							78.0	41.2	24.1	18.5	y		Irregular perpendicular	
122	1	カ	中部(上)	95	79-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	L			n							40.0	29.5	27.6	13.2			Irregular perpendicular	
123	1	カ	中部(上)	95	79-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx				y							25.2	12.8	12.5	1.8	y			Left side

表 12-(5)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L or R	近位 Distal	軸位 Shaft	遠位 Proximal	長さ Length (mm)	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Fusion	被熱 Burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (other measurements, checked, polished etc.)	
124	1	オ	中部(上)	87	74-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Middle phalanx		y	y	y	36.2	14.2	14.2	14.2	19.5	11.5	16.5	36.2	14.2	19.5	3.1	y			Left side	
125	1	カ	中部(上)	95	79-6	イノシシ	Sus scrofa	Lower incisor				n	40.3							40.3	6.3	8.8	1.4					
126	1	カ	中部(上)	95	79-8	イノシシ	Sus scrofa	Humerus	L	y		n	42.8							42.8	28.2	14.1	10.5			Spiral		
127	1	カ	中部(上)	95	79-7	イノシシ	Sus scrofa	4th metacarpus	R	y		n	46.8			18.6	17.4			46.8	18.6	17.4	5.1	y		Smooth perpendicular		
128	1	カ	中部(上)	95	79-10	イノシシ	Sus scrofa	Metapodium		y	y	n	26.7							26.7	11.6	13.8	1.2			Irregular perpendicular		
129	1	カ	中部(上)	95	79-11	イノシシ	Sus scrofa	Proximal phalanx		y	y	y	33.1							33.1	13.5	17.2	1.3	y		Irregular perpendicular	Right side	
130	1	カ	中部(上)	95	79-9	イノシシ	Sus scrofa	Distal phalanx		y	y	y	30.5	14.4	14.4	14.6				30.5	14.4	14.6	1.9			Smooth perpendicular	Left side	
131	1	オ	中部(上)	87	74-1	ニホンカモシカ	Capricornis crispus	Metacarpus	L	y		n	29.6			16.7				43.8	29.6	16.7	7.7	y				
132	1	オ	中部(上)	87	74-3	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. XI5				n											36.3					
133	1	オ	中部(上)	92	75-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X9				n											28.7					
134	1	カ	中部(上)	95	79-13	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X35				n											59.9					
135	1	キ	中部(上)	108	129	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n								15.9	9.1	3.3	0.5	y			Worked bone. Artificially polished.	
136	1	オカ	中部(上)	97	114	二枚貝類	Bivalvia	Shell fr.				n											0.5					Umbo part. Unionidae gen.?
137	2	II	中部(上)	?	682-2	キセルモトキ	Mirus reinianus	Shell				n											0.4					
138	2	III	中部(上)	112	278	ベンケイガイ	Glycymeris abolineata	Shell				n								65.1	56.7	7.4	8.2					Shell bracelet. Polished.
139	2	II	中部(上)	?	682-1	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell				n											12.5					
140	2	II	中部(上)	100	684	クルミ	Juglans mandshurica	Nutshell				n								15.2	13.8	6.1						
141	3	III上	中部(上)	?	738-26	ニホンザル	Macaca fuscata	Radius	R	y		n	58.8	11.9	10.9	2.4				58.8	11.9	10.9	2.4	y				
142	3	III上	中部(上)	?	738-28	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Metapodium		y	y	y	48.3			13.7				48.3	13.7	18.0	3.6	y	y			
143	3	III上	中部(上)	?	738-27	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Phalanx		y	y	y	21.8	9.1	9.1	6.5	6.7	5.3		21.8	9.1	6.5	1.1	y	y			
144	3	III上	中部(上)	?	738-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Radius	L			n	40.4	30.9						75.6	40.4	30.9	18.0	y				Medial part
145	3	III上	中部(上)	?	738-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Radius	R	y		n	53.3	21.9	14.5	14.5				53.3	21.9	14.5	3.0	y				
146	3	III上	中部(上)	?	738-10	ニホンジカ	Cervus nippon	Femur	L	y		n	49.6	23.5	10.1	10.1				49.6	23.5	10.1	5.6					
147	3	III上	中部(上)	?	738-8	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus	R		y	n	29.6	20.5	20.5	20.5				40.7	29.6	20.5	8.3	y		Irregular perpendicular		
148	3	III上	中部(上)	?	738-9	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus			y	n	56.5	19.9	11.4	11.4				56.5	19.9	11.4	4.5			Smooth perpendicular	Anterior part	
149	3	III上	中部(上)	?	738-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus			y	n	41.0	15.1	12.3	12.3				41.0	15.1	12.3	3.5			Smooth perpendicular		
150	3	III上	中部(上)	?	738-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	R	y		n	59.3	16.7	23.3	23.3				59.3	16.7	23.3	5.6	y		Smooth perpendicular	Lateral part	
151	3	III上	中部(上)	?	738-6	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	R	y		n	39.3	23.6	17.7	17.7				39.3	23.6	17.7	3.4	y				Posterior part
152	3	III上	中部(上)	?	738-7	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus			y	n	64.9	16.0	8.1	8.1				64.9	16.0	8.1	3.8					Posterior part
153	3	III上	中部(上)	?	738-16	ニホンジカ	Cervus nippon	Astragalus	L			y	38.3	23.8	20.4	20.4				38.3	23.8	20.4	5.8					
154	3	III上	中部(上)	?	738-18	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	R			n	36.7	25.5	28.3	28.3				36.7	25.5	28.3	8.5					
155	3	III上	中部(上)	?	738-19	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	R			n	36.5	11.8	34.0	34.0				36.5	11.8	34.0	2.2					
156	3	III上	中部(上)	?	738-20	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	R			n	29.0	11.3	36.0	36.0				29.0	11.3	36.0	3.3					
157	3	III上	中部(上)	?	738-11	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx		y	y	y	48.7	17.0	17.0	17.0	20.6	14.6	13.1	48.7	17.0	17.0	20.6	5.5	y			Right side

表 12-(6)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L側 R側	近位 Shaft Distal	梢部 Shaft Distal	>50% remains	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 癒合 Burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (other measurements, checked, polished, etc.)	
158	3	III上	中部(上)	?	738-12	ニホンジカ	Cervus nippon	Middle phalanx		y	y	n							22.1	11.0	14.3	0.9	y		Right side	
159	3	III上	中部(上)	?	738-13	ニホンジカ	Cervus nippon	Distal phalanx		y	y	y	42.4	13.9	22.8				42.4	13.9	22.8	3.3	y		Left side	
160	3	III上	中部(上)	?	738-14	ニホンジカ	Cervus nippon	Distal phalanx		y	y	y	37.2	13.6	22.5				37.2	13.6	22.5	2.2	y		Left side	
161	3	III上	中部(上)	?	738-15	ニホンジカ	Cervus nippon	Distal phalanx		y	y	y	33.1	11.8	19.5				33.1	11.8	19.5	1.9	y		Right side	
162	3	III上	中部(上)	?	738-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Axis				n							54.5	56.6	49.5	18.5				
163	3	III上	中部(上)	?	738-21	イノシシ	Sus scrofa	Humerus	R	y		n							64.8	38.5	22.6	14.1				
164	3	III上	中部(上)	?	738-22	イノシシ	Sus scrofa	Humerus	R		y	n							30.3	36.4	31.5	8.8				
165	3	III上	中部(上)	?	738-23	イノシシ	Sus scrofa	3rd metacarpus	R	y		n			20.7	17.4			40.1	20.7	17.4	4.6	y			
166	3	III上	中部(上)	?	738-24	イノシシ	Sus scrofa	3rd metatarsus	L	y		n			19.7	22.4			22.2	19.7	22.4	1.7	y			
167	3	III上	中部(上)	?	738-25	イノシシ	Sus scrofa	Proximal phalanx		y		n							25.2	13.0	20.4	1.3	y			
168	3	III上	中部(上)	?	738-17	ニホンカモシカ	Capricornis crispus	Calcaneus	L			y							44.8	22.9	26.7	4.8		Smooth perpendicular		
169	3	III上	中部(上)	?	738-30	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. XI42				n													Some bones are burnt.	
170	3	III上	中部(上)	?	738-29	サギ科	Ardeidae gen.	Tibiotarsus	L		y	n								36.3	9.0	8.7	0.6			Cut marks
171	3	III上	中部(上)	?	738-31	未同定	Unidentified	Bone fr.				n								24.4	16.9	13.3	1.0			
172	4		中部(上)	94	276	ヒト	Homo sapiens	Lower premolar				n								8.0	7.5	22.6	1.0			
173	4	W上	中部(上)	around 71	719	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n								61.0	14.3	16.7	6.9			Tip part (tine)
174	4	X	中部(上)	70-88	713-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Radius	R	y		n								47.3	22.2	22.5	7.7	y	Spiral	Medial part
175	4	X	中部(上)	88	259-1	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	L			n								99.6	29.5	58.2	43.8			M2-3 remain. M2 length 37.5 mm, breadth 17.1 mm, crown height 11.8 mm, M2 length 20.3 mm, breadth 15.2 mm, crown height 9.7 mm
176	4	X	中部(上)	88	259-2	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	L			n								86.0	20.5	36.6	10.9			Incisor and premolar teeth remain. Young?
177	4	X	中部(上)	70-88	713-2	イノシシ	Sus scrofa	5th metatarsus	R	y		n			8.6	15.8				40.5	8.6	15.8	1.6	y		
178	4	X	中部(上)	70-88	713-1	ニホンカモシカ	Capricornis crispus	Atlas				n								44.9	35.2	28.2	5.9			The height was estimated from the date (6 July) and Square.
179	4	X	中部(上)	70-88	713-4	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X38				n													155.8	
180	4	X	中部(上)	70-88	717-1	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell	L			n								25.6	11.6	6.8	1.2			The height was estimated from the date (6 July) and Square. Margaritifera laevis?
181	4	X	中部(上)	70-88	717-2	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell				n								28.4	14.4	4.3	1.0			Margaritifera laevis?
182	4	X	中部(上)	70-88	717-3	イシガイ科	Unionidae gen.	Shell				n								37.6	22.7	6.0	2.7			Margaritifera laevis?
183	3	II下	中部(中)	?	702	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	CI				n								29.1	8.5	15.6	2.5			
184	3	II下	中部(中)	around 120	703-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n								42.8	15.1	8.1	2.9			

表 12-(7)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L側 R側	近位 Shaft Distal	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	測長 Shaft Total	備考 Remarks (Other measurements, checked, polished, etc.)	
185	3	II中	中部(中)	109-130	689-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																		
186	3	II中	中部(中)	109-131	689-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																		
187	3	II下	中部(中)	around 120	703-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Lower M3	L																	
188	3	II下	中部(中)	110-130	616-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	R	y															Anterior part	
189	3	II下	中部(中)	around 120	703-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx																		
190	3	II中	中部(中)	109-132	689-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx		y	y															
191	3	II下	中部(中)	around 120	701	イノシシ	Sus scrofa	Tooth																	Brittle	
192	3	II中	中部(中)	109-133	689-4	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Cranium																	Macaca?	
193	3	II下	中部(中)	110-130	616-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Humerus		y															Anterior part	
194	3	II下	中部(中)	110-130	616-3	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.		y																
195	3	II下	中部(中)	around 120	703-4	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X19																		
196	3	II中	中部(中)	109-133	689-5	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X15																		
197	3	II下	中部(中)	?	705	二枚貝類	Bivalvia	Shell fr.																	Unionidae gen.?	
198	4	W	中部(中)	94	276-2	ニホンザル	Macaca fuscata	Cranium																		
199	4	W	中部(中)	110	338-1	ムササビ	Petaurista leucogenys	Mandible	R																C1, P2, M1, and M2 remain.	
200	4	W	中部(中)	94	276-21	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	C1																	Upper right side?	
201	4	W	中部(中)	94	276-1	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Femur	L		y														Smooth perpendicular	
202	4	W	中部(中)	94	276-20	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	Femur	L		y														276-1 may be the same individual.	
203	4	W	中部(中)	110	338-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																		
204	4	W	中部(中)	110	338-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																		
205	4	W	中部(中)	110	338-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																		
206	4	W	中部(中)	94	276-18	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler																	Tip part (fine)	
207	4	W	中部(中)	86-101	725	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	R																P2-3, M2-3 remain. M2 length 18.8 mm, breadth 10.9 mm, crown height 14.5 mm. The height was estimated from the date (7 July) and Square.	
208	4	W	中部(中)	94	276-19	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	L																M3 length 24.4 mm, breadth 11.7 mm, crown height 18.0 mm	
209	4	W	中部(中)	94	276-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus	R	y															Smooth perpendicular	
210	4	W	中部(中)	123	426-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus	R	y															Posterior	
211	4	W	中部(中)	110	338-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx			y														Irregular perpendicular	
212	4	W	中部(中)	94	276-12	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	R																M3 length 34.6 mm, breadth 19.8 mm, crown height 13.4 mm	
213	4	W	中部(中)	94	276-13	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	R																	

表 12-(8)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L側 L side (y/n)	近位 Shaft basal (y/n)	梢部 Shaft distal (y/n)	測定 測定 >5% remains (y/n)	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 癒合 Healed (y/n)	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (Other measurements, checked, polished, etc.)
214	4	W	中部(中)	94	276-14	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	R			n							62.1	20.3	24.0	6.3			
215	4	W	中部(中)	94	276-16	イノシシ	Sus scrofa	Upper incisor	R			n							44.4	8.2	16.1	3.4			
216	4	W	中部(中)	94	276-8	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	L			n							77.1	17.8	36.8	15.4			dp2-4 remain. dp4 length 18.8 mm, breadth 8.9 mm, crown height 4.1 mm. 6-14 months after birth.
217	4	W	中部(中)	94	276-9	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	R			n							45.0	17.1	34.9	5.7			dp4 remains. dp4 length 17.7 mm, breadth 8.5 mm, crown height 4.0 mm. 6-14 months after birth.
218	4	W	中部(中)	94	276-10	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	R			n							39.0	13.5	27.0	4.1			A fragment of 276-9?
219	4	W	中部(中)	94	276-11	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	R			n							81.0	20.7	34.6	18.2			M1 length 16.7 mm, breadth 11.4 mm, crown height 7.3 mm
220	4	W	中部(中)	94	276-15	イノシシ	Sus scrofa	M3				n							15.8	13.4	25.7	4.3			
221	4	W	中部(中)	94	276-4	イノシシ	Sus scrofa	Scapula	R		y	n							63.1	37.2	23.6	14.1	y		Smooth perpendicular
222	4	W	中部(中)	94	276-5	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Femur		y		n							31.1	28.4	18.6	3.5	y		Head part
223	4	W	中部(中)	94	276-6	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Rib				n							57.4	10.3	14.6	2.0			
224	4	W	中部(中)	94	276-7	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X4				n										19.4			
225	4		中部(中)	123	426-2	哺乳類	Mammal	Bone frs. X10				n										11.1			
226	4		中部(中)	123	426-3	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.		y		n							95.1	25.1	9.3	8.3			
227	4		中部(中)	110	338-6	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X5				n										10.9			
228	4	W	中部(中)	94	276-17	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X2				n										2.9			
229	1		中部(上-中)	97-139	691-1	ヒト	Homo sapiens	Premolar				y							8.0	6.4	20.7	1.0			Worn down. Crown height 3.6 mm. The height was estimated from the date (5 July) and Square.
230	1		中部(上-中)	97-139	691-2	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X5				n										6.9			
231	3	II中	中部(上-中)	?	688	マイマイ属	Euhadra sp.	Shell				n							31.4	30.2	20.7	1.0			
232	3	II中	中部(上-中)	?	697	二枚貝類	Bivalvia	Shell fr.				n										11.3			
233	4	X-W	中部(上-中)	94	266	ベンケイガイ	Glycymeris albolineata	Shell				n							75.5	25.2	7.9	7.2			Unionidae gen.?
234	2	II*	中部(下)	172	469-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	L			n							43.0	13.2	24.4	6.7			Shell bracelet. Polished. P3-4 remain. P4 length 14.7 mm, breadth 10.2 mm, crown height 9.4 mm.

表 12-(9)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 Lateral side	近位 Proximal	軸位 Shaft	遠位 Distal	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Fusion	被蒸 Burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks <small>(Other measurements, antech. pits etc.)</small>	
235	2	II*	中部(下)	172	469-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	L			n							48.8	16.5	33.3	18.7				M2-3 remain. M2 length 18.0 mm, breadth 11.7 mm, crown height 13.8 mm, M3 length 26.8 mm, breadth 12.0 mm, crown height 17.8 mm.	
236	2	II*	中部(下)	172	469-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	L			n							35.0	16.1	65.9	4.8				Posterior part	
237	2	II*	中部(下)	172	469-4	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X7				n										11.0					
238	2	II*	中部(下)	172	469-5	二枚貝類	Bivalvia	Shell fr.				n										0.2					Unionidae gen.?
239	2	VII	中部(下)	?	686	二枚貝類	Bivalvia	Shell frs. X3				n							77.9	13.5	5.5	3.1				Anterior part	
240	3	VI	中部(下)	140	339	ニホンジカ	Cervus nippon	Metacarpus		y		n							37.6	23.1	29.3	6.7				P4 and M1 remain.	
241	3	VI	中部(下)	?	710	イノシシ	Sus scrofa	Maxilla	R			n							25.0	5.0	6.7	0.5					
242	3	VII	中部(下)	?	706	イノシシ	Sus scrofa	Lower deciduous incisor				n							83.0	16.8	7.2	3.8					
243	3	II*(VII)	中部(下)	152	251	大型哺乳類	Large mammal	Bone fr.		y		n							59.4	20.9	7.0	4.1				Irregular perpendicular	
244	3	A VII	中部(下)	164	429	大型哺乳類	Large mammal	Bone fr.		y		n															
245	3	VI	中部(下)	?	711	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X9				n															
246	3	VII	中部(下)	?	708	キセルモドキ	Mirus rehinanus	Shell				y										0.6					Terrestrial
247	3	VII	中部(下)	?	707	イシガキ科	Unionidae gen.	Shell	L			n							19.3	12.5	63.5	11.3				Unio douglasiae?	
248	4	a	中部(下)	130	400	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	C1				y							18.2	11.5	47.7	8.7				Perforated. Upper left side?	
249	4	a-A	中部(下)	164	449	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	C1				y							37.8	12.7	12.4	2.6				Upper right side?	
250	4		中部(下)	145	437-3	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	1st metacarpus	R	y	y	y	37.8	12.7	12.7	12.4	10.6	9.2								Complete	
251	4	W下	中部(下)	?	731-17	ツキノワグマ	Ursus thibetanus	3rd metacarpus	R	y	y	y	56.9	13.8	11.9	19.1	13.8	13.2	56.9	13.8	19.1	4.3	y				Length 19.5 mm, breadth 18.7 mm, crown height 18.2 mm.
252	4	W下	中部(下)	137-140	729-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Upper M2	L			y							19.5	18.7	28.1	6.2					
253	4	W下	中部(下)	?	731-8	ニホンジカ	Cervus nippon	Humerus	L	y		n							71.3	32.0	25.3	16.1					
254	4		中部(下)	152	424-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus		y		n							56.8	15.6	9.1	3.8				Irregular perpendicular	
255	4	W下	中部(下)	around 140	728-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus		y		n							127.8	17.7	10.4	10.4					
256	4	W下	中部(下)	around 140	728-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Metatarsus		y		n							85.4	18.9	8.4	6.2					
257	4	W下	中部(下)	?	731-10	ニホンジカ	Cervus nippon	Astragalus	R	y	y	y	41.1	26.5	22.7	14.1			41.1	26.5	22.7	14.1					
258	4	W下	中部(下)	?	731-11	ニホンジカ	Cervus nippon	Astragalus	R	y	y	y							39.8	26.0	20.7	11.4					
259	4		中部(下)	152	425-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Lunate				y							16.6	12.5	21.8	1.9					
260	4	W下	中部(下)	?	731-9	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	R			n							45.2	26.5	27.7	6.0				Irregular perpendicular	
261	4	W	中部(下)	124-137	730-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Calcaneus	R			n							44.5	18.1	22.2	5.7	y			Smooth perpendicular	
262	4	W下	中部(下)	?	731-13	ニホンジカ	Cervus nippon	Lateral malleolus	L			y							15.6	10.3	20.5	1.2					
263	4	W下	中部(下)	?	731-12	ニホンジカ	Cervus nippon	Middle phalanx				y							11.3	16.6	11.3	16.6	1.9	y			Smooth perpendicular
264	4	W下	中部(下)	137-140	729-2	イノシシ	Sus scrofa	Upper I2	L			y							32.8	7.2	11.8	1.9					

表 12-(10)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L/R	近位 Shaft	梢部 Distal	測定 >50%	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 Heal	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (other measurements, cutted, polished etc.)
265	4	W下	中部(下)	137-140	729-3	イノシシ	Sus scrofa	Lower I2	R			y							36.2	7.5	9.7	2.1			
266	4	W下	中部(下)	?	731-5	イノシシ	Sus scrofa	Lower incisor	R			y							56.4	8.4	9.3	3.8			
267	4	W下	中部(下)	?	731-6	イノシシ	Sus scrofa	Tooth				n							31.9	7.1	7.8	1.2			
268	4	W下	中部(下)	?	731-4	イノシシ	Sus scrofa	Humerus	R	y		n							68.1	30.4	25.5	11.1		Spiral	
269	4	W下	中部(下)	?	731-3	イノシシ	Sus scrofa	Radius	R	y		n			32.7	23.0			64.0	32.7	23.0	9.9	y		
270	4	W下	中部(下)	?	731-7	イノシシ	Sus scrofa	5th metatarsus	L	y	y	y	70.9	10.9	9.9	17.6	10.9	17.2	70.9	10.9	17.6	4.6	y		
271	4	W下	中部(下)	?	731-2	イノシシ	Sus scrofa	Calcaneus	L			y							71.6	19.3	29.3	10.6	n		
272	4	W下	中部(下)	?	731-14	ニホンカモシカ	Capricornis crispus	Horn core				n							41.7	16.7	14.7	4.0			Tip part
273	4	W下	中部(下)	around 140	728-1	ニホンカモシカ	Capricornis crispus	Metacarpus	L	y		n							64.2	25.4	14.4	5.9	y	Spiral	
274	4	W下	中部(下)	152	425-3	有蹄類	Ungulate	Mandible	R			n							47.9	9.7	14.5	1.6			Anterior part. Deer or sow
275	4	W下	中部(下)	?	731-15	有蹄類	Ungulate	Mandible	L			n							40.8	8.5	13.0	1.7			
276	4	W下	中部(下)	152	425-2	有蹄類	Ungulate	Humerus	R		y	n							58.1	26.4	16.3	4.6	n		Deer or sow
277	4	W下	中部(下)	?	731-16	有蹄類	Ungulate	Humerus		y		n							33.4	35.1	43.8	8.4	n		
278	4	W下	中部(下)	145	437-1	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X5				n										50.3		Spiral	
279	4	W下	中部(下)	145	437-2	哺乳類	Mammal	Bone frs. X8				n										9.2			
280	4	W下	中部(下)	152	424-2	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X5				n										13.7			
281	4	W下	中部(下)	142	432-1	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							37.9	34.1	26.4	5.3			
282	4	W下	中部(下)	175	478	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							52.2	13.2	4.6	2.2			
283	4	W下	中部(下)	152	425-4	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X8				n										19.9			
284	4	W下	中部(下)	?	731-19	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X89				n										169.5			
285	4	W下	中部(下)	around 140	728-4	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X7				n										36.3			
286	4	W	中部(下)	124-137	730-2	中 - 大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X12				n										43.0			
287	4	W下	中部(下)	?	731-1	サギ科	Ardeidae gen.	Tibiotarsus	L	y	y	n							81.7	8.0	6.3	1.2			Ardea intermedia?
288	4	W下	中部(下)	142	432-2	二枚貝類	Bivalvia	Shell fr.				n										2.7			
289	4	W下	中部(下)	?	731-18	不明	Unknown	Bone frs. X2				n										1.7			
290	3	A底VII	下部	211	482-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							69.2	41.3	39.2	34.0			Base part with bone. Cut mark (?) in bone part (length 15.9 mm, breadth 3.7 mm, depth 3.5 mm) .
291	3	A底VII	下部	211	482-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							41.6	35.1	13.9	3.8			
292	3	A底VII	下部	211	482-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							21.3	14.4	6.1	0.7			
293	3	A底VII	下部	211	482-4	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							26.6	8.8	4.9	0.4			
294	3	A底VII	下部	211	482-5	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							22.5	10.6	4.6	0.4			
295	3	A底VII	下部	211	482-6	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							19.7	10.9	12.6	0.9			This bag (482) contains a poisher (?) (2.2 g) .
296	4	A	下部	>180	735	ニホンザル	Macaca fuscata	Humerus	R		y	n							35.9	29.3	12.6	3.6			Smooth perpendicular
297	4	A	下部	>180	732-7	ムササビ	Petaurista leucogenys	Femur	L	y	y	y										1.0			

表 12-(11)

No.	調査区 Square	層位 Layer	段階区分 Phase	出土深度 Height (cm)	ID	和名 Japanese name	分類 Taxon	部位 Element	左右 L or R	近位 Distal	軸位 Shaft	遠位 Proximal	GL (mm)	GB (mm)	Bp (mm)	Dp (mm)	Bd (mm)	Dd (mm)	Max Length (mm)	Max Breadth (mm)	Max Width (mm)	重量 Weight (g)	癒合 癒合 Healed burnt	破断面形態 Fracture type	備考 Remarks (Other measurements, etched, polished, etc.)
298	4	A	下部	>180	732-8	イヌ科	Canidae gen.	Metacarpus			y	y	y				5.8	5.6	38.9	6.3	5.6	0.4	y		Nyctereutes?
299	4	A	下部	>180	734-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Upper P3	L			y							12.0	14.2	18.9	2.1			Length 12.0 mm breadth 14.2 mm, crown height 9.8 mm.
300	4	A	下部	>180	732-2	ニホンジカ	Cervus nippon	Lower molar	L			n							15.9	7.6	20.6	1.7			
301	4	A	下部	>180	734-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Mandible	L			n							67.9	14.2	27.8	12.5		Spiral	P2, P3, and M1 remain. M1 length 15.4 mm, breadth 11.0 mm, crown height 7.3 mm.
302	4	A	下部	>180	732-3	ニホンジカ	Cervus nippon	Proximal phalanx		y	y	y	48.2	15.3	15.3	19.0	13.6	13.2	48.2	15.3	19.0	5.3	yy		Complete
303	4	A	下部	>180	732-1	ニホンジカ	Cervus nippon	Zygomatic	R			n							53.9	15.7	20.1	1.7			The height was estimated from the date (21 August) and Square.
304	4	A	下部	>180	733	イノシシ	Sus scrofa	Mandible	L			n							68.4	23.7	45.8	18.0			P3-4 remain.
305	4	A	下部	>180	732-9	イノシシ	Sus scrofa	3rd metacarpus	R	y	y	n							57.3	17.4	11.3	3.0	y		Anterior part
306	4	A	下部	>180	732-4	イノシシ	Sus scrofa	3rd metatarsus	L	y	y	y			17.6	22.0			49.6	17.6	22.0	3.6	y		
307	4	A	下部	>180	732-5	イノシシ	Sus scrofa	Metatarsus			y	n					10.4	14.8	35.2	10.4	14.8	1.6	y		Smooth perpendicular
308	4	A	下部	>180	732-6	イノシシ	Sus scrofa	5th metatarsus	R	y	y	y							57.6	9.4	13.9	2.2	n		
309	4	A	下部	>180	732-10	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone frs. X53				n										152.8			Some bones are burnt.
310	4		下部	185	527	ヤカドツノガイ	Dentalium octangulatum	Shell				?							25.4	4.6	4.4	0.6			Seashell
311	4	A	下部	>180	736	マイマイ属	Euhadra sp.	Shell				y							44.0	40.3	23.3	3.9			
312	2	II下	?	?	672	ニホンジカ	Cervus nippon	Upper M2	R			n							19.5	18.0	23.8	4.7			Unworn
313	2		?	?	?-1	哺乳類	Mammal	Bone fr.			y	n							25.0	5.7	3.3	0.2			Polished and sharpened.
314	2		?	?	?-2	哺乳類	Mammal	Bone fr.				n							28.3	6.1	3.5	0.5			Polished and sharpened.
315	2	II下	?	?	671	中-大型哺乳類	Medium-large mammal	Bone fr.				n							31.8	10.9	7.3	1.2			Sharpened
318	?		?	?	5-III- ツ	ニホンジカ	Cervus nippon	Antler				n							51.1	13.0	15.7	6.9			Around a tip (fine) part. There are scratches that could be interpreted as the result of use as a hand-held pressure flaker. The surface is burnt (?).

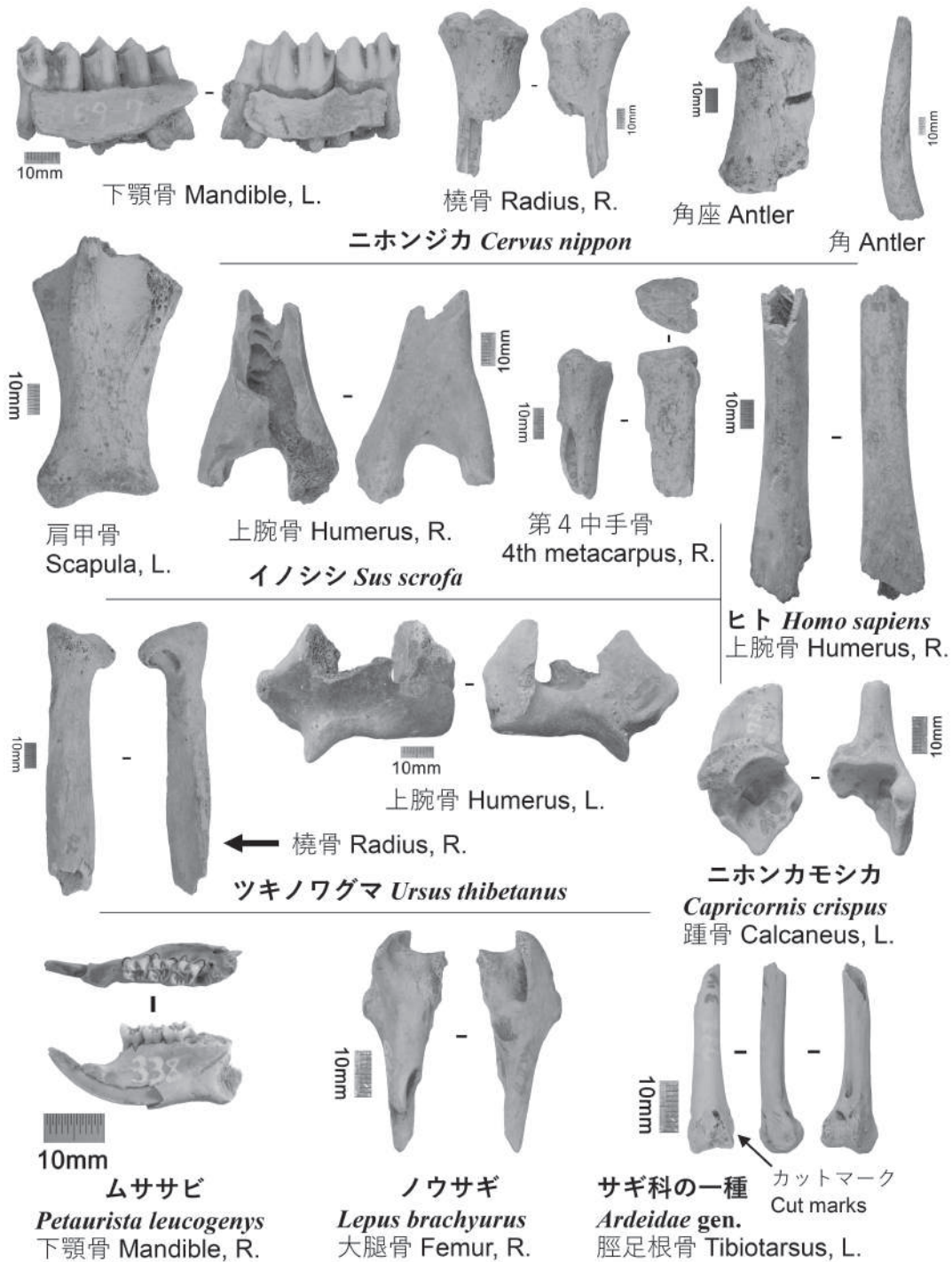


図 15 根方岩陰出土の動物遺存体 (1)

ノウサギ *Lepus brachyurus* など小型の狩猟対象哺乳類が少なからず認められることもこの根方岩陰の資料群の特徴の一つである。その他、骨端部が破損して情報が得にくいものの、ヒト *Homo sapiens* とみられる標本（上腕骨と小白歯）がそれぞれ上部と中部（上）段階で確認された。ヒトは京都大学霊長類研究所による調査の報告の際に、地元の人によって根方岩陰で採集さ

れていた頭蓋骨が報告されている（江原他 1986）。

以上の同定標本数のデータについて、NISPが3点以上の主要哺乳類種の各段階のNISPの値で主成分分析を行ない、図17に示した。各段階における傾向がみてとれるが、互いに近似する段階がない。特に下部はニホンジカの骨とイノシシの点数が少なく、鹿角の点数が多いことで、上部はイノシシの割合が高いこと

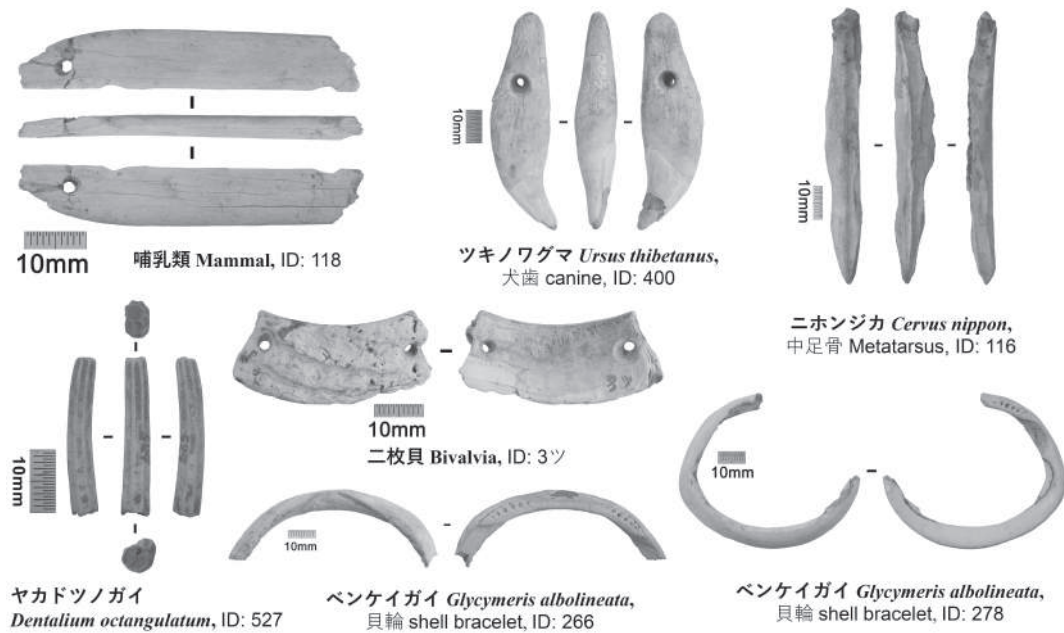


図 16 根方岩陰出土の動物遺存体 (2)

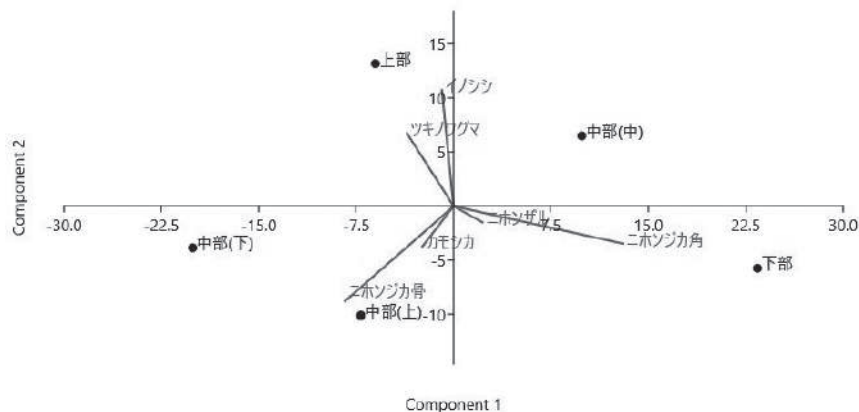


図 17 各段階の哺乳類構成による主成分分析の結果

で他の段階と大きく異なっていることが読み取れる。

狩猟対象動物以外では、貝類の殻がみられた。海産貝類では、下部からヤカドツノガイ *Dentalium octangulatum* が1点、中部(上)と(上または中)から貝輪に加工されたベンケイガイ *Glycymeris albolineata* が計2点、上部から二枚貝類の一種が1点出土している(図16)。これらの海産二枚貝遺存体の特徴については貝輪として既に詳細に報告されている(小林・早川1967)。ヤカドツノガイは両端の割れ口の角がやや丸みを帯び、人為的に成形されている可能性がある。長さは25.4mmで、ビーズとして遺跡内に持ち込まれたと考えられる。上部出土の二枚貝類の一種は研磨により成型され、両端が穿孔されている。これらの加工から形態情報は少なくなっているが、厚み

があり(8.2mm)、殻質が脆くない点から淡水産ではなく海産貝と推測される。以前の概報(小林・早川1967)ではウミギク科の一種(カバトゲウミギク?)とされている。根方岩陰から海岸部までは少なくとも直線距離で約65kmの距離があり、日本海側の富山湾が太平洋側より近い。成形されていることから、いずれも食用としてではなくビーズやプレスレットなどの装飾品として65km以上の距離を経て根方岩陰まで流通してきたと想定される。以前の概報(小林・早川1967)では、その他、ハマグリ、ヤマトシジミ、チリボタン?、メダカラガイが同定されているが、今回対象とした、出土情報から帰属時期を推測できる遺物群には含まれなかった。陸生貝類では、キセルモドキ *Mirus reinianus* やオオケマイマイ *Aegista vulgivaga*、

マイマイ属の一種 *Euhadra* sp. などが上部から下部にかけてみられる。これらの貝類は陸生であるため遺跡周辺にも生息し得るもので、石灰岩地帯を好むため人為的な作用なしに堆積中に含まれ得る。一方、淡水産の二枚貝類であるイシガイ科の一種 *Unionidae* gen. の殻の破片が上部から中部（下）にかけてみられ、食用等の目的をもって遺跡内に人為的に持ち込まれたと考えられる。その他、植物遺存体としてオニグルミ *Juglans mandshurica* の核の破片が上部と中部（上）で計2点みられた。

以上が確認された動植物種の内容である。最も NISP が多いニホンジカでは、骨端癒合状態が記録できた標本が全体で30点あり、そのうち未癒合のものが2点みられた（中手又は中足骨と尺骨）。いずれも上部段階からの出土であるが、これらはそれぞれ4歳及び5歳までに癒合する部位で（山崎 2016）、全体的に見て若い個体は少ないと解釈できる。イノシシの骨端癒合状態については記録された19点中2点（踵骨と第五中足骨）が未癒合であった。これらはそれぞれ中部（下）及び下部段階から出土したものであるが、ニホンジカ同様全体的に若い個体が少ない傾向にある。

一方、中部（中）において乳歯が残るイノシシの下顎骨が2点みられ（同一個体の可能性もある）、イノシシについては比較的若い個体が狩猟されることがニホンジカよりもあったと想定される。ただし、資料群のサイズが小さいこと、出土情報不明の標本群がデータに含まれていないことなど、この年齢構成の解釈には注意を要する。

動物遺存体の保存状態についてみると、岩陰であるためか骨表面が風化していない状態良好な資料もみられるが、全体的に骨表面が白色化し、風化しているものが散見された。上部から下部までの5段階における資料1点当たりの平均重量（動物遺存体の合計重量/標本数）は、3.1–4.0g（平均3.3g）と小さく、ある程度骨片化が進んでいると考えられる。篩による小さな遺物の回収までなされていないため、この値を他の遺跡の内容と単純には比較できないが、同じく半世紀以上前の調査で得られた縄文早期から前期初頭の愛知県南部の天神山遺跡の動物遺存体群では、一標本当たりの平均重量が約3.5gであり（投稿準備中）、根方岩陰の値と近い。天神山遺跡はオープンサイトであり、根方岩陰における骨片化率がそれに近いということは、遺物の遺存に際して風雨の影響を防ぐ岩陰の庇としての効果は大きなものではなかったと推測される。

骨表面の解体や加工の痕跡については、風化の影

響か、明確なカットマークを確認できた資料は少なかった。一方、骨の破断面の形状は55記録中12点（21.8%）でスパイラル状の割れ口であった。骨の風化や調査時の真新しい破損から破断面の記録に適した資料が少なかったものの、スパイラル状の割れ口から、人為的な骨の破碎による骨髄利用が想定できる。その他、被熱しているとみられる資料が12点みられた。骨角器についても前述の貝製品を除いて7点が概報（小林・早川 1967）にて詳細に報告されているが、その内ツキノワグマの犬歯製垂飾、小孔のある扁平な骨製装飾品がそれぞれ中部（下）、上部の段階に帰属することが判明した。加えて、上部から出土したもので、ニホンジカ中足骨の骨幹部片の一端が研磨によりやや尖った状態のもの（長さ81.4mm）が新たに一点みられた（図16）。

文化段階区分ごとの内容の変遷を提示するため、この再データ化に際してはできるだけ帰属段階が不明確な資料は対象から除外した。しかし、除外した中には発掘者や整理者らによる記録をより丁寧に読み解くことで帰属時期を確定できるものがまだ残されている可能性がある。また、形態的特徴が十分に残っているにもかかわらず種同定できなかった標本を「未同定」としているが、これらも含め十分な設備で分析を行うことで更なる知見をもたらす資料がまだ残されていると思われる⁶⁾。

6. 出土遺物の位置

本遺跡では、高山寺式土器と貝殻・沈線文土器が共存する遺跡の一つとして知られている。そのため土器編年研究上、重要な遺跡でもある。今回平面分布図並びに垂直分布図を復原した（図18–23）。これらの情報をもとにその検証を試みる。

貫ノ木式土器は第2、3、4区で出土し、高山寺式土器は第3区のみで出土している。これらの土器はそれぞれ180–220cmの深度帯で出土している。この深度帯には、それ以外の土器型式は出土していない。特にこの範囲でも200–210cmに集中しており、若干の層位的な上下関係も認定できない。このことから深度的には共存といっても問題はない。

一方で、平面分布的（図23）には、貫ノ木式と高山寺式ではやや分布がずれている。ただし微視的なものであり、共存に疑義をもたらすほどの距離ではないと考えられよう。

なお、第3区の土層断面図には押型文土器が3区の

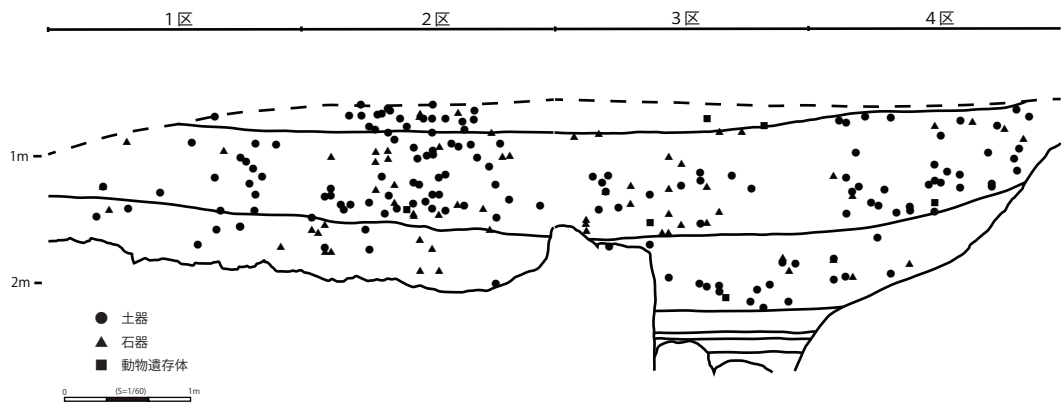


図 18 遺物垂直分布図

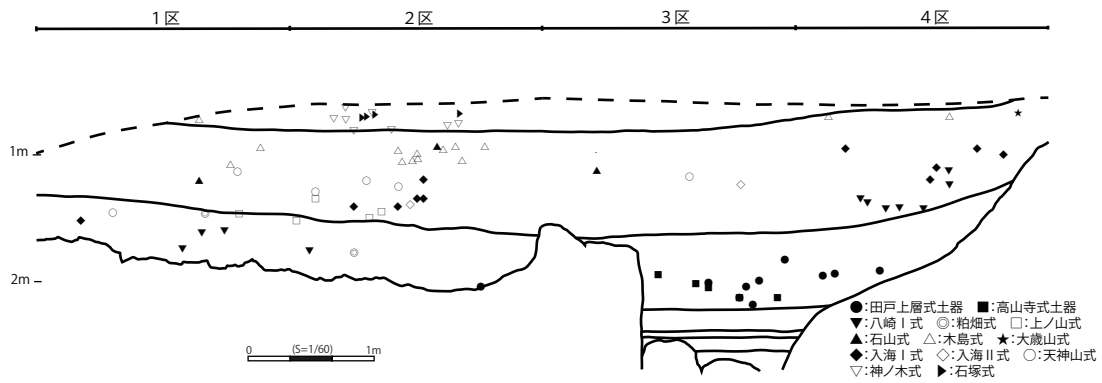


図 19 土器型式別垂直分布図

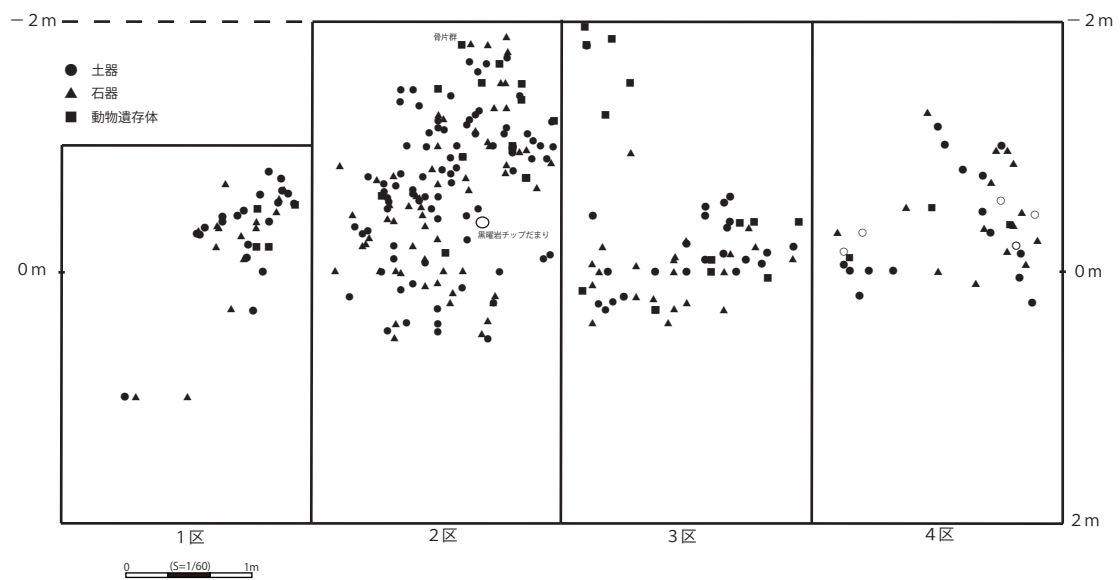


図 20 第一次調査の遺物平面分布図

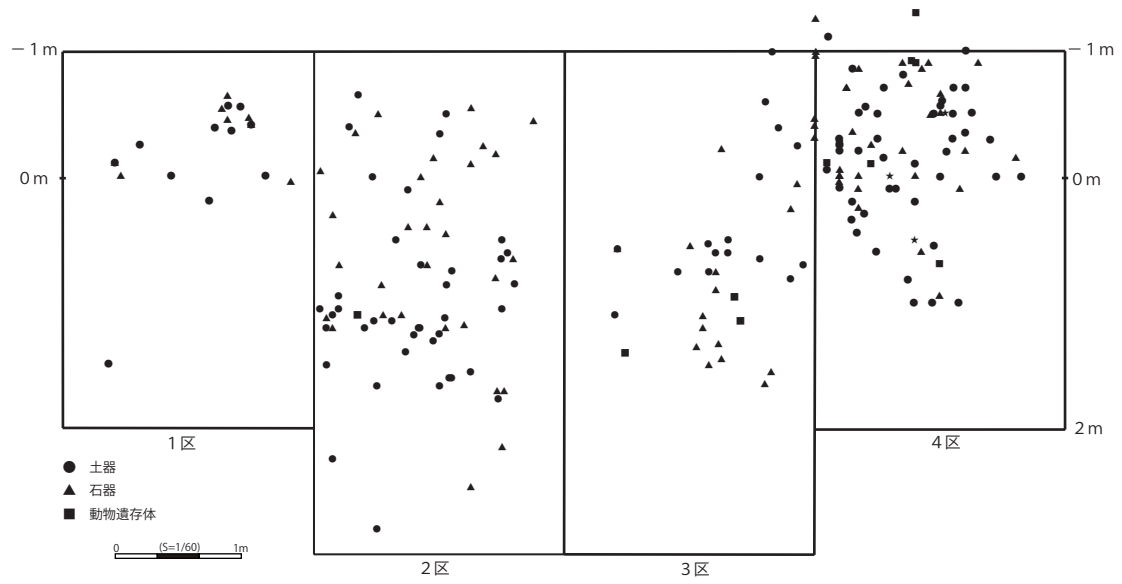


図 21 第二次調査の遺物平面分布図

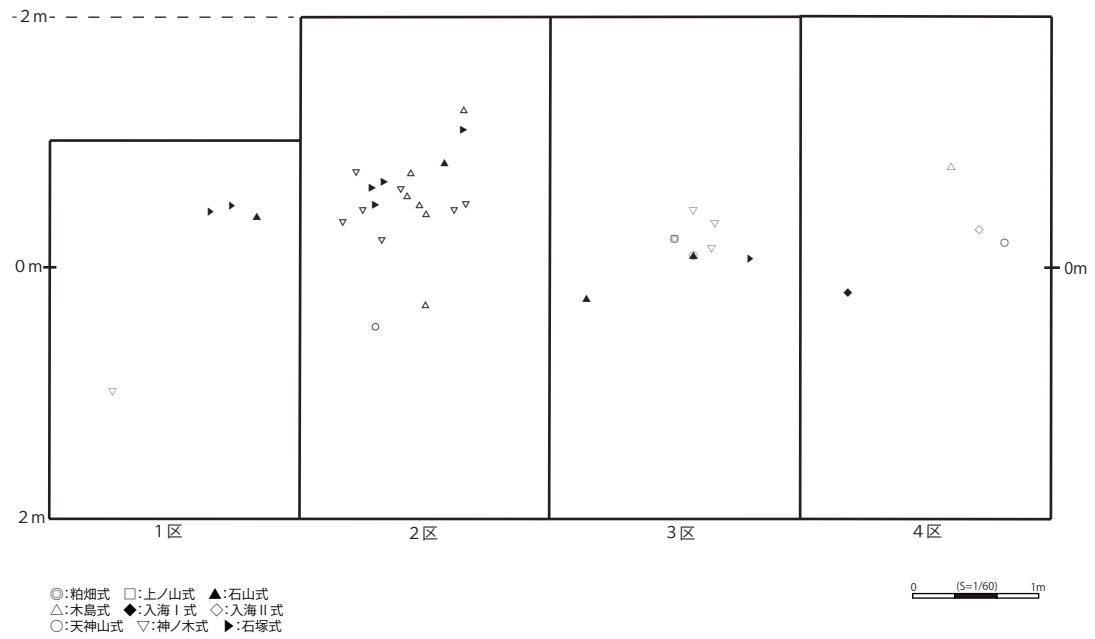


図 22 第一次調査時の土器型式別平面分布図

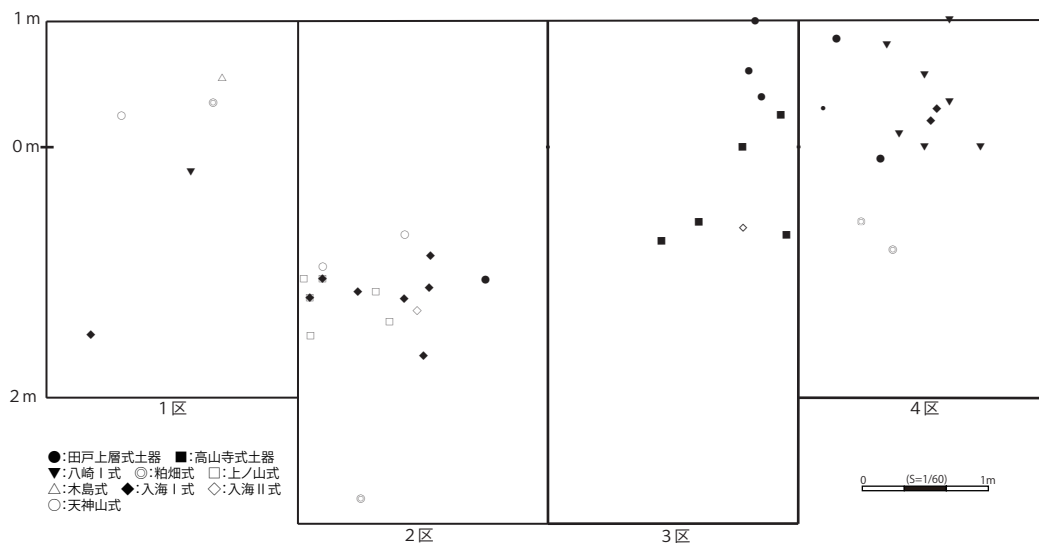


図 23 第二次調査時の土器型式別平面分布図

最下層にて直立した状態で出土したことがメモされていた。他にも各調査区における遺物の平面分布図及び垂直分布図の記録を確認しても、以上のことは追認できる。

7. 考察

調査時や整理時の記録を精査することで、縄文時代早期の中葉、後半、前期初頭の少なくともおよそ2000年間にまたがる遺物が、ある程度土器型式段階ごとにまとまって出土していることが改めて確認された。これらに伴う石器や動物遺存体の長期的な変遷は遺跡利用や暮らしの変化を検討する手掛りとなる。

石器のデータでは、各段階における器種の消長や形態的な特徴の変化、石器石材の利用傾向の変動がみられた。器種についてみると、石匙は上部と中部で出現する。また中部（上）では、スクレイパー類が増える。石材について見ると下部では下呂石が大半を占めるものの、中部にかけて遺跡周辺でも見られるチャートが40-60%近くを占めるようになる。黒曜岩が中部（下）から出現し、中部（中・上）にかけてより増加する。また中部（上）では中部（下・中）で石鏃のみに使用されてきた黒曜岩も、スクレイパー類の石材として利用されるようになるという傾向が示された。

動物遺存体のデータでは、各段階を通してニホンジカとイノシシが大半を占めるものの、カモシカ、ツキノワグマ、ニホンザルなど遺跡周辺の山地性資源の利用が読み取れた。加えて早期中葉から前期にかけてヤカドツノガイやベンケイガイなどの海産貝製の装飾品

がみられ、海岸部との交流が示唆された。また、早期前半から前期初頭にかけて鹿角の割合が減少する傾向がみられた。これは、遺跡を利用する季節の拡大や資源への負荷など要因が複数考えられる。

下部段階では在地性のチャートよりも下呂石の方が石器石材として主体であり、剥片や石核がみられないことから石器を持ち込む形の短期的な滞在であったと推測される。この段階では落角していない鹿角基部がみられることから季節は冬季前後とみられる。根方岩陰は南向きで陽当たりが良いため、冬季の利用に適している。一方、中部段階以降では、在地性のチャートの利用、剥片や石核の存在から石器製作が行なわれ、岩陰の利用度が増したと解釈できる。このことはNISPにおける鹿角の割合が中部、上部にかけて減少することの要因が遺跡利用時季の拡大にあるという仮説を支持する。

貫ノ木式など山岳地帯をまたぐ土器型式の文化圏に含まれること、黒曜岩や下呂石、さらにはサヌカイトなど周辺他地域の石材が持ち込まれていること、海産貝製装飾品がみられることから、山間部の谷間に立地しつつも、本格的に岩陰が利用され始めた縄文時代早期の中頃から、中部地方における広い範囲の地域との繋がりの中でこの岩陰を利用した人々の生活が営まれていたと考えられる。直接的にせよ間接的にせよ、遠方のものを獲得した人々の根方岩陰遺跡での生活は少なくとも縄文時代前期まで継続していると言える。根方岩陰は、白い石灰岩の幅広の崖に形成されており、東西に延びる小八賀川の谷の中ではその特徴的な見た



图 24 根方岩陰遺跡出土土器

- 1、2：貫ノ木式土器 5：ハッ崎I式土器 8：神ノ木式土器
 3、4：高山寺式土器 6、7：入海I式土器 9：木鳥式土器

目からランドマーク的な役割を果たしていたことが想定できる。それは信州と飛騨地方の往来の拠点としても、広い流通の中継拠点的な役割も担い得ることも想像に難くない。もしそうであるならば、冬季は降雪によりこの流通における移動がしにくくなることを考えると、鹿角が減少する季節（夏季前後）へ岩陰利用の時季が拡大したという想定と矛盾しない。

8. 総括

未報告であった根方岩陰遺跡における1965年の調査で出土した縄文時代早期中葉から前期にかけての遺物、及び調査時の記録について、整理を行ない、基礎的なデータを提示した。土器、石器、動物遺存体、骨角器が山間部の遺跡から複数の土器型式段階ごとにまとまって出土することは稀で、これらの資料は、中部地域における山間部の当該期の文化、生業、経済を知る上で極めて重要な資料群である。

本稿で提示した各種の基礎データから、土器型式に基づく各段階を比較することで、石器の形態的な特徴の変化や技術的傾向、石器石材の利用傾向の変化、動物利用の特徴における継続性と変化が読み取れた。これらは、他地域との繋がりによるモノや情報の伝播、根方岩陰の利用の活発化が背景にあると考えられた。

今後、動物遺存体の年代測定を行い、この研究で提示された各時期の年代的検証を実施することが求められる。また、根方岩陰遺跡の遺物群の特徴や傾向についてより深く追求するためには、周辺遺跡や海岸部の遺跡の内容と比較する作業が不可欠である。

あとがきと謝辞

この論稿では、未整理、未報告の情報について基礎的なデータの提示に努め、できるだけ他の研究者がデータを利用しやすいよう配慮した。

根方岩陰遺跡の整理作業の開始は偶然が重なったことによるところが大きい。正式な報告書に手の届くレベルでの整理作業が実施されていたにも関わらず、これらの調査報告書が刊行されなかったことが悔やまれる。おそらく、いくつかの諸事情が重なった故のことであろう。しかし飛騨の層位的な指標となっていたにも関わらず、その実態がブラックボックスとなっていた根方岩陰遺跡の調査記録を明らかにし、公表することが出来た。これまで資料を半世紀以上良好な状態で保管し、且つこの度資料のデータ化を快諾くださった

南山大学人類学博物館の関係者諸氏、及び、これまで根方岩陰の調査、整理作業に関わられた全ての先輩方に、改めて深く感謝申し上げる。また研究の過程で堀江咲名さんには土器についてご教示いただいた。南山大学人文学部人類文化学科の黒澤浩教授には原稿を読んでいただき、様々な点を指摘いただいた。感謝申し上げます。

一方で概報で提示されていた情報に齟齬が見られたりしたほか、一部の情報が欠落していたりなど、完全に公表できたわけではない。それは課題として残る。

註

- (1) 土器の拓本は、概報に掲載されているものの内、一部を見つけることができなかった。また、土器断面の実測図原本の存在は確認できなかった。
- (2) 今回確認した剥片や石核の一部は出土深度を復原できたが、基本的に出土深度、層位など不明なものが多かった。そのため今回は分析の対象から外した。
- (3) あいちの考古学（加藤・廣瀬 2021）にて下部のスクレイパーの一部は尖頭器としたが、再実見の結果スクレイパーに含めた。
- (4) 当時は下呂石の存在はあまり知られておらず硬砂岩や安山岩といった記載がされている。
- (5) 刃部の測定については、刃部の中央とその中央と各末端の中央の三点を測定し、そしてその平均値を刃部角度とした。
- (6) あいちの考古学等（加藤・廣瀬 2021）にて本研究の成果を予備的に報告したが、その際、動物骨の誤った同定結果を示してしまった。ここに改めて深く謝罪したい。

引用文献

- 上峯篤史・大塚宣明ほか 2017「滋賀県大津市真野遺跡の旧石器 湧別系細石刃核をふくむ資料群の発見」『旧石器考古学』82、旧石器談話会、pp. 71-82。
- 上峯篤史 2018『縄文石器 その視角と方法』京都大学学術出版会。
- 江原昭善・梶田澄雄・佐々木明・徳松正彦・大参義一・宮尾嶽雄・松本真・木下実 1986『根方第二岩陰遺跡発掘調査報告書』京都大学霊長類研究所。
- 大下 明 2003「関西における縄文時代前 中期石器群の概要と組成の検討」『縄文時代の石器Ⅱ—関西の縄文前期・中期—』関西縄文文化研究会、pp. 11-39。
- 岡本東三 2017『縄文時代早期 押型紋土器の広域編年研究』雄山閣。
- 奥谷喬司編 2000『日本近海産貝類図鑑』東海大学出版会

- 加藤大智・廣瀬允人 2021「根方岩陰遺跡（岐阜県高山市）における縄文時代早期を中心とした出土遺物の検討」『令和3年度考古学セミナー あいちの考古学 2021 資料集』愛知県埋蔵文化財センター、pp. 47-48。
- 吉良哲明 1982『原色日本貝類図鑑』保育社。
- 小林知生・早川正一 1967「岐阜県根方遺跡」『日本の洞穴遺跡』平凡社、pp. 175-188。
- 五味一郎 1983「石匙」『縄文文化の研究』9、雄山閣、pp. 259-271。
- 中島 宏 2008「押型文系土器（沢式・樋沢式・細久保式土器）小林達雄（編）『総覧縄文土器』アム・プロモーション、pp. 130-137。
- 西本豊弘 2002「動物骨格図集（1）」『動物考古学』第19号、pp. 93-119。
- 西本豊弘 2007「動物骨格図集（5）」『動物考古学』第24号、pp. 91-111。
- 波部忠重 1982『続原色日本貝類図鑑』保育社。
- 増子康真 1983「ハツ崎 I 土器をめぐって」『古代人』41号、名古屋考古学会、pp. 47-50。
- 松井 章 2008『動物考古学』京都大学学術出版会。
- 松岡廣繁・伊藤恵夫・原島広至・安部みき子・タカザワカズヒト 2013『鳥の骨探』NTS。
- 水ノ江和同 2020「特集にあたって一洞窟遺跡の過去・現在・未来」『季刊考古学 151 洞窟遺跡の過去・現在・未来』雄山閣、pp. 14-18。
- 森島稔・笹沢浩・原田勝美・福島邦男 1976「長野県更科郡大岡村鍋久保遺跡の調査」『長野県考古学会誌』23・24、pp. 1-54。
- 山崎 健 2016「ニホンジカの骨端癒合時期」『動物考古学』第33号、pp. 35-48。
- 山下勝年 1999「東海地方 早期後葉」『縄文時代』第10号、縄文時代文化研究会、pp. 106-115。
- 吉田泰幸 2009「南山大学人類学博物館所蔵の「考古学研究の研究」に関する資料のアーカイブ化に向けて附・第一展示室展示アルバム作成メモ追記」『南山大学人類学博物館紀要』第27号、南山大学人類学博物館、pp. 1-17。
- 領塚正浩 2005「〈研究ノート〉中部地方北東部における沈線土器群終末期の土器編年」『佐久考古通信』No. 92、佐久考古学会、pp. 2-10。
- France, D. L. 2009 Human and Nonhuman Bone Identification. CRC Press.
- Hillson, S. 2009 Teeth, Cambridge Manuals in Archaeology. Cambridge University Press.
- von den Driesch, A. 1976 A guide to the measurements of animal bones from archaeological sites (Peabody Museum Bulletin 1). Peabody Museum.

（加藤大智：飯田市教育委員会）

（廣瀬允人：木曾広域連合埋蔵文化財調査室、総合研究大学院大学 統合進化科学研究センター客員研究員）

Research on Gonbo Rockshelter in Central Japan: Excavation records in 1965 and recovered remains from the Initial Jomon to Early Jomon periods

KATO Daichi and HIROSE Masato

Gonbo Rockshelter, located on the right bank of the Kohachiga River, which flows in the mountainous Hida region of central Japan, was excavated by the research team of Nanzan University in 1965. The excavation uncovered abundant materials including pottery, lithics, faunal remains, and worked marine shells belonging to the middle Initial–early Early Jomon periods, and the artifact changes along with the stratigraphy has been divided into five cultural phases depending on the pottery styles. Although a brief preliminary report has been published, a formal detailed report has not yet been produced. The materials from this site are important in terms of understanding the economy of early Jomon culture because it is quite rare for lithics and faunal remains to be retrieved with assemblages of several pottery styles from a single site in a mountainous region of Japan. This study first attempts to verify the stratigraphic changes in pottery styles proposed in the preliminary report by reorganizing the excavation records. We then present the changes in lithics and faunal remains associated with the pottery style transition. As a result, although some older style pottery is seen in the upper phases, it can be inferred that the stratigraphic stage classification based on the pottery styles presented in the preliminary report is generally possible from the depth data of each potsherd. By comparing each phase according to lithic type and raw material composition, increasing and decreasing trends were identified. In the lowest phase, most of the raw material is glassy rhyolite, called Gero stone, and derived from Mt. Yugamine, which is about 40 km south of the site. Obsidian appeared from the middle phase. The nearest obsidian source is at least 60 km from the site as the crow flies. For faunal remains, the remains of sika deer and wild boar accounted for around 80% of the number of identified specimens of mammals in each phase. Mountainous mammals such as bears, macaques, and serows were also identified. In addition to mammals, a bead of a tusk shell (*Dentalium octangulatum*) was found in the lowest phase. Artifacts that were considered impractical, such as a perforated bear canine ornament, shell bracelets made from cockleshells (*Glycymeris albolineata*), a miniature tanged scraper, and a clay ornament, were generally found throughout each phase of the site. These marine shells indicate a connection to a coastal region at least 65 km away. Thus, the data of potteries, lithics, and faunal remains from the middle Initial Jomon period to the early Early Jomon period at Gonbo Rockshelter indicated that the Jomon people lived on mountainous resources and were presumably connected through a wide trade network from the early stage of the rock shelter use.

大須二子山古墳出土の高杯形器台とその諸問題

中里信之

はじめに

南山大学人類学博物館所蔵の名古屋市大須二子山古墳出土品の中に、大きい半球状の杯に脚がついた高杯形器台という須恵器がある(写真1)。5・6世紀、日本列島では、大阪の陶邑窯やそれを由来とする窯を中心に須恵器生産がなされるが、名古屋など尾張では、5世紀以降、東山窯(名古屋市東山丘陵)などで地域性を持った須恵器の生産が行われ、流通している。高杯形器台の分析はあまり多くなく、本事例の年代や産地の特定は一定の意義があるが、それ以上に本事例の検討意義は出土地の問題と絡めて高いと考えられる。

大須二子山古墳は、名古屋市中区門前町に所在し、熱田台地の中央に位置し、南1kmいくと正木町遺跡・伊勢山中学校遺跡など古墳時代中期の集落が開き、南4kmいくと熱田台地南端となり、熱田神宮、尾張最大の古墳断夫山古墳がある。終戦までは西本願寺別院境内であって、戦前までには前方後円墳と認識されていたが、戦後、道路工事、大須球場拡張工事等により、破壊され、その過程で石室内の副葬品や墳丘裾からの埴輪など遺物が採集され、また、破壊当時の様子が観察・記録された。犬塚康博によって、断夫山古墳に次ぐ、全長138mという尾張でも大規模な古墳であるという指摘がなされる(犬塚1990)など、尾張の古墳時代を考える上で欠かせない古墳だが、墳丘規模・内部構造・副葬品・年代などに検討の余地を多く残している。特に多くの須恵器が出土しているにも関わらず、墳丘下に古墳とは異なる時期の遺構(古墳下層遺構)が指摘されるなど、築造年代の問題は複雑である。

実際、大須二子山古墳の年代的評価は、南山大学人類学博物館オープンリサーチの総括的な論考(黒沢2011)を参照すれば、伊藤秋男が高杯形器台から5世紀後葉中頃までさかのぼる可能性を示した(伊藤1978)のに対して、犬塚は、出土した須恵器は古墳

下層遺構のもので古墳に伴うものではなく、埴輪から白鳥古墳・断夫山古墳よりも新しく、6世紀前半とした(犬塚1990)。その後、伊藤は副葬品や主体部の問題から、5世紀末に下げて位置付けるが、依然断夫山古墳より古くしている(伊藤2007)。一方、近年までの埴輪・副葬品研究は犬塚の理解を肯定する方向でとまとめられている(例えば、森ほか2003)。

筆者は、近年注目されなくなった高杯形器台を再検討し、墳丘に伴う可能性がある、つまり、初期須恵器ではなく、5世紀末に位置づけられ、それにより、大須二子山古墳を断夫山古墳直前の時期に位置づけられる可能性があると考えている。以下論考していきたい。

1. 資料観察(図1、口絵写真1)

全体長34.2cm、杯部長16.8cm、脚部長17.4cm、杯部と脚部はほぼ同じ長さである。杯口縁部復元径35.2cm、口縁部の残存率40%程度である。脚裾部径は楕円形で全周が残り、長径27cm、短径25.2cmである。接合径12.2cm。実測図(図1)では、杯部は反転実測とし、脚部は短径で図化し、杯部と脚部別々にロクロで成形しているので、杯部および脚部それぞれで中心軸を設定している。

この高杯形器台はすでに実測図が提示されており、脚部の実測図のもの(伊藤1978)と、杯部を含めた実測図のもの(南山大学2011)がある。2011年までに、杯部も復元されたわけだが、復元に使用された破片は杯口縁部から脚裾部まで連続して接合しており、同一個体であることが確認できる。

胎土は砂粒を含むも良好で、色調は青灰色を呈すが、一部黒鉛色になっている。焼成は良好で、杯部内面上部に自然釉が見られ、底部内面に窯ボロが見られ、正位で焼成したことがわかる。

杯口縁部は外上方へ開きつつ折り曲がり、内面は杯

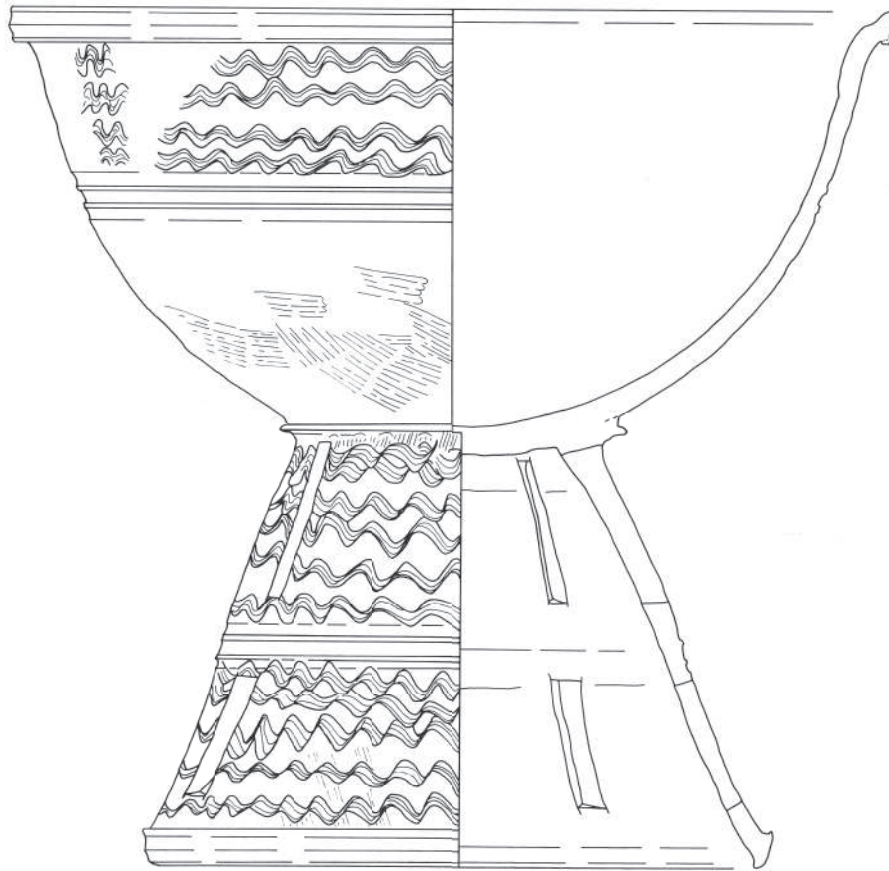


図1 大須二子山古墳出土高杯形器台 (S=1/3、筆者作成)

体部から口縁端部に緩やかに曲がり、口縁端部下に突帯が回る。杯部は半球状で、杯部下半の外面に回転ナデで消しつつも平行叩きが残り、内面は、上部が回転ナデ、底部が不定方向ナデがなされ、おそらく無紋当て具と叩き板で成形したものと思われる（口絵写真2）。杯部外面中心に3本の沈線が回り、その間が2本の突帯のようにになっている。杯部を成形し、口縁突帯を整え、この沈線で上下に区画した上で、さらに沈線上側に4条の波状文（4本単位）を、口縁部から底部に向かって順に施している。

杯部底面外面に、微かにいくつか弧状の痕跡がみられる（口絵写真3）。杯部と脚部の接合に伴う痕跡かと思われる。杯部と脚部の接合部分外部には突帯が回る。

脚部は、輪積みし、外面をハケメで整えた後、内外

面を回転ナデで整形する。接合部付近と裾部付近の外面にハケメが痕跡的に残っている。脚部外面中心に3本の沈線が回り、その間の2本が突帯のようにみえる。整形後、この沈線で脚部を上下に区画する。また、断面三角状の裾端部は、外側を撫でて面とし帯状にし、裾端上部を軽く摘み、下部内面を軽くくぼませる。

杯部と脚部の接合後、接合箇所突帯を巡らす。

以上の工程後、脚部上側で6条、脚部下側で5条の波状文（4本単位）をそれぞれ裾方向から杯部方向の順で施される。その上で5方向に上下二段で長方形透かしを入れる。

改めて、全体を正位で観察すると、杯部では波状文を上から下、脚部では下から上に施している。また、杯部と脚部が接合してから脚部の波状文が施されてい

る。波状文は、杯部がゆったりと広い波長であるが、脚部では上から下に行くにつれて、狭い波長になる。脚部上部と下部の波状文は共に右から左へ螺旋状に巡っている（口絵1）。杯部はわからないが、脚部がおかれたロクロ台の回転方向は正位なら左から右となる。

大阪府濁り池窯の高杯形器台の3個体を分析した事例（伊藤ほか1995）では、3点とも全て波状文の左右方向と上下方向は、杯部と脚部では異なっている。そして、ロクロ台の回転方向が一定であるという前提で、杯部が脚部との接合前の反転状態、脚部が接合後の正位状態での波状文施文を推測している。同様な製作を大須二子山古墳の事例にあてはめると、杯部のロクロ台の回転方向は、脚部と同じく左から右となるが、反転状態での施文の可能性はある。なお、脚部に螺旋状の波状文が見られるものも濁り池窯には2個体ある。

2. 型式学的検討から見る高杯形器台の位置づけ

(1) 尾張における高杯形器台の変遷

以前筆者は、高杯形器台について、東海古墳時代研究会「東山窯の須恵器編年研究」（2019年5月）にて、「東山窯須恵器編年研究の現状と課題」と題して、いくつかの器種と共に形態変遷の方向性をコメントした。今回、より詳細を肉付けたい。なお、現時点の筆者は、東山窯編年を、東山111号窯→（+）→東山11号窯→東山10号窯→東山61号窯→蝮ヶ池窯→（東谷山1号墳）とし（中里2012・2019・2021参照）、そこに名古屋市を中心に尾張地域などの古墳出土資料をもって補う尾張の須恵器編年を構想している。

東山111号窯資料（図2-1・2、斎藤1983）、杯部の口縁部を直角に折り曲げ、端部を肥厚させる。端部下に突帯を設けている。脚部全体が湾曲し、裾部を外に引き出し、裾端部に突帯を設ける。脚部に長方形透かしが2段8方向にある。

東山11号窯資料（図2-3・4、斎藤1983、愛知県陶磁美術館資料）、杯部の口縁部を折り曲げるも端部は薄く、下側にも突帯を引き出す。杯部底部外面に平行叩きと思われる痕跡がわずかに見られる。脚部の彎曲はなくなり、脚端部は屈曲させるに留め、端部直上に突帯を持ち、杯部口縁端部の形状に似ている。脚部に長方形透かしが2段6方向にある。脚部前面に自然釉が掛るため、不明瞭だが、上部に波状文5段、下部に波状文が3段見られる。

池下古墳資料（図2-5、愛知県埋蔵文化財センター1991）は杯部のみで、杯部の口縁端部を上方に折り曲げ、端部直下に突帯を設け、形状は東山11号窯のものに近い。ただし、杯部下半に平行叩きを残す。

東古渡町遺跡SZ11資料（図2-6、新修名古屋市史資料編編集委員会2008）も杯部のみで、杯部と脚部の接合径は太い。杯部口縁部は上方に折り曲げ、端部を丸く収め、外側に段があり、杯部下半に平行叩きを残す。

東谷山9号墳資料は大小2個体知られるが、大形のもの（図2-7、新修名古屋市史資料編編集委員会2008）脚部に2段3方向の三角形・台形透かしが見られるが長脚化している。杯部口縁部は上方に軽く折り曲げ、杯部下半部に平行叩きを残す。脚裾部を屈曲させ、裾端部は角張り、上に突帯を設ける。小形のもの（図2-8）は短脚だが、杯部が浅い。

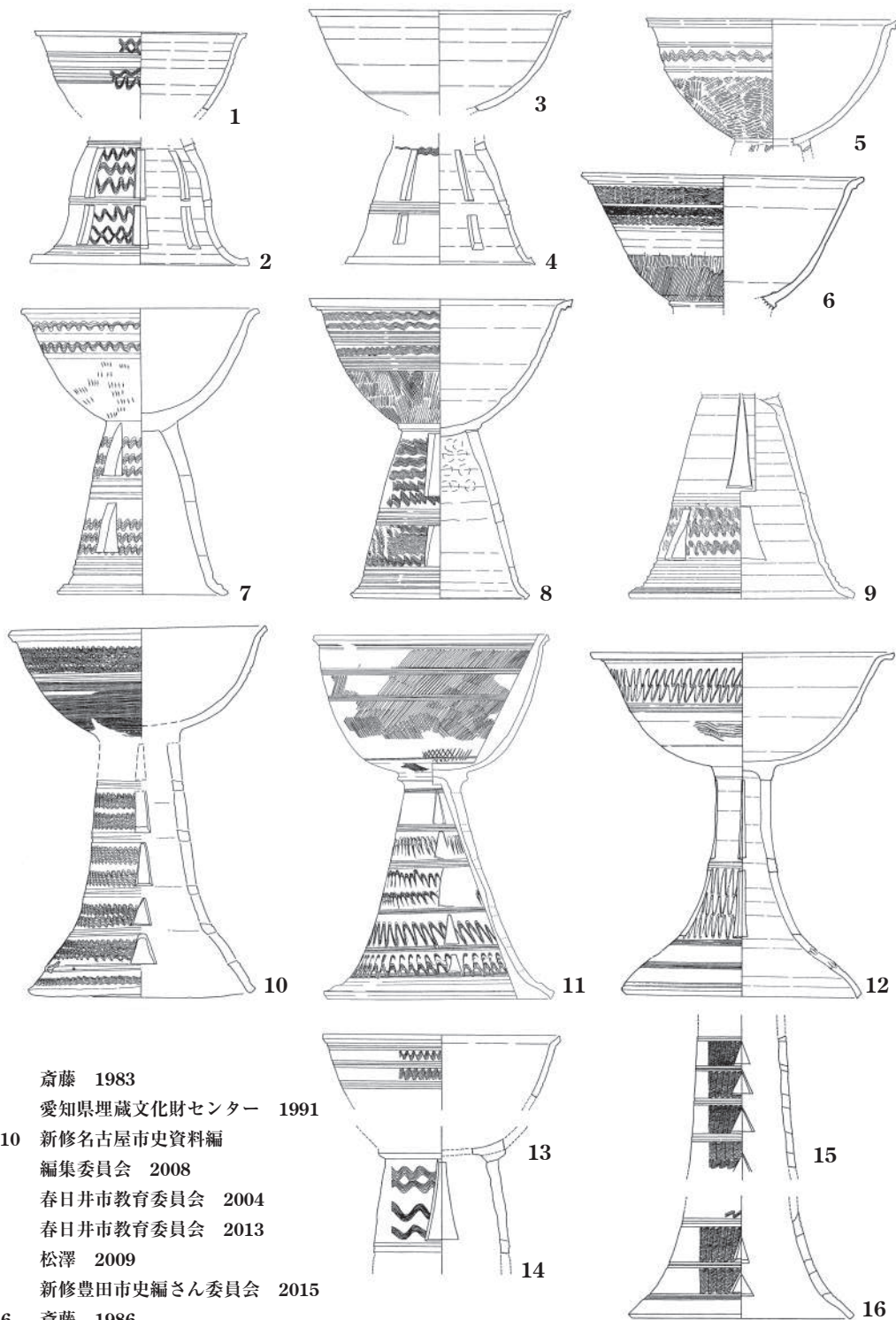
春日井市味美二子山古墳資料（図2-8、春日井市教育委員会2004）、脚部に2段4方向の方形透かしが見られ、長脚化している。杯部口縁部は上方に折り曲げ、下方に2段突帯を設ける。杯部下半部に平行叩きを残す。脚裾部は下方にわずかに屈曲させ、端部は角張るが、突帯は設けない。

春日井市御旅所古墳資料（図2-9、春日井市教育委員会2013）、脚部のみだが、脚部に上段3方向の三角形透かし、千鳥状に下段に3方向の台形透かしが見られ、長脚化している。脚裾部は屈曲させ、端部は角張り、上に2段突帯を設ける。

東谷山3号墳資料（図2-10、新修名古屋市史資料編編集委員会2008）は、さらに長脚化が進行し、三角形透かしが小さくなりつつも5段になる。杯部口縁部は上方に軽く折り曲げ、杯部下半の平行叩きを回転カキメで消す。脚裾部は屈曲せず、端部は角張るのみとなる。なお、東谷山3号墳の蓋杯・有蓋高杯には東山61号窯に近い資料もあるが、大枠は蝮ヶ池窯期に位置づけられる。

瀬戸市塚原1号墳資料（図2-11、松澤2009）、杯部は口縁端部を折り曲げ、波状文がなく平行叩きを全面に残す。より細くなった脚部に5段の三角形透かしがつく。なお、東谷山1号墳期の杯身が伴う。

豊田市根川3号墳資料（図2-12、新修豊田市史編さん委員会2015）は高杯形器台というよりも、大形の無蓋高杯ともいえる。杯部は浅く、口縁端部は横に引き出され、杯部上部は簡略化された波状文がつき、より細くなった脚部がつき、4方向2段長方形透かしがあり、裾部全体は椀状になっている。



出典

- 1～4 斎藤 1983
 5 愛知県埋蔵文化財センター 1991
 6、7、10 新修名古屋市史資料編
 編集委員会 2008
 8 春日井市教育委員会 2004
 9 春日井市教育委員会 2013
 11 松澤 2009
 12 新修豊田市史編さん委員会 2015
 13～16 斎藤 1986

図2 尾張等の高杯形器台の諸例 (S=1/6)

- | | | |
|---------------|-----------|--------------|
| 1、2 東山111号窯 | 7 東谷山9号墳 | 11 塚原1号墳 |
| 3、4 東山11号窯 | 8 味美二子山古墳 | 12 根川3号墳 |
| 5 池下古墳 | 9 御旅所古墳 | 13～16 東山61号窯 |
| 6 東古渡町遺跡 SZ11 | 10 東谷山3号墳 | |

以上の資料を形態から変遷に沿って整理したい。ただし、技術論を交えての議論は今後の課題としたい。

東山 111 号窯資料に見られる、杯部の口縁部を直角に折り曲げ、端部が肥厚している形状は、伊勢山中学校遺跡 SK109 資料など名古屋台地の初期須恵器に見られる（中里 2014）。東山 111 号窯資料は、脚部全体・裾端部の形状や、脚部に長方形透かしが 2 段 8 方向にあるなど、初期須恵器の装飾的要素を残す。東山 11 号窯資料は、杯部と脚部のバランスは東山 111 号窯資料に近いが、装飾的要素が少なくなる。

池下古墳や東古渡町遺跡 SZ11 資料も東山 11 号窯資料に近い要素を持つが、池下古墳資料は杯部下半に平行叩きを残し、脚部との接合径が狭く、東古渡町遺跡 SZ11 資料は、杯部口縁部は上方に折り曲げ、端部を丸く収め、杯部下半に平行叩きを残すなどそれぞれ新しい要素が見られる。東山 11 号窯と東谷山 9 号墳の段階の間に一段階設けられる可能性がある。

ただし、東山 11 号窯について、荒木集成館資料にも杯部、接合部、脚部がそれぞれ 1 点ずつあるようだが（荒木 1994）、脚部裾端部の形状は、端部上に突帯を設けるもので、愛知県陶磁美術館資料のものより新しく見え、今後再検討が必要である。また、西大久手古墳資料（深谷 2015）には、杯部が 2 点出土しているが、1 点は口縁端部を直角に折り曲げ肥厚させ、東山 111 号窯資料に近い。もう 1 点は口縁端部の折り曲げがやや弱く、叩きなど外面下半に残すなど新しい要素であり、池下古墳や東古渡町遺跡 SZ11 資料に近い要素がある。同時期共存の可能性もあるのか今後注意したい。

続いて東谷山 9 号墳資料（大形）を中心に、味美二子山古墳資料、御旅所古墳資料は、長脚化二段透かしにより、端部の形状には突帯を残すかどうかで差異が見られるが、ほぼ同一型式として理解してよいと思われる。脚部の長脚化から尾張の高杯形器台変遷の画期と思われる。なお、東山 10 号窯資料（荒木 1994）にも、同一型式と思われる脚部破片がある。

東谷山 3 号墳資料は、さらに長脚化が進行し、透かしが小さくなるが多段になる。杯部口縁部は上方に軽く折り曲げ、脚裾部は突帯がなくなり、簡素化する。小幡茶臼山古墳第 2 次造出周辺資料（新修名古屋市史資料編編集委員会 2008）も似ているが、裾端部に突帯を設ける。なお、東谷山 3 号墳の須恵器は蝮ヶ池窯期、小幡茶臼山古墳は東山 61 号窯期に位置づけられる。

問題は、東山 61 号窯採集資料（図 2-13 ~ 16、斎

藤 1986）には、東谷山 9 号墳・味美二子山古墳の長脚 2 段タイプと、東谷山 3 号墳の長脚多段タイプが共にあることである。長脚 2 段、長脚多段という出現時の差がありつつ、併存の可能性はある。現時点では、東谷山 9 号墳・味美二子山古墳にみられる長脚 2 段タイプは東山 10 号窯期を中心に東山 61 号窯期まで、東谷山 3 号墳にみられる長脚多段タイプを東山 61 号窯期～蝮ヶ池窯期に位置づけたい。ただし、東山 61 号窯採集の脚部 2 段透かしものは裾が開かず筒形で新しい要素が見られる一方で、下層資料（東山 10 号窯期並行か）に多条の可能性のある破片がある（尾野ほか 2010）。

塚原 1 号墳資料はより細くなった脚部に 5 段の三角形透かしがつき、東谷山 3 号墳資料より後出である。東谷山 1 号墳期に位置づけられ、形態は異なるが、根川 3 号墳資料も同時期であろう。

以上の諸例から、大須二子山古墳資料の形状は大枠は東山 11 号窯資料に近いが、杯部下半部の叩きの痕跡を部分的に残す、さらに口縁端部や脚端部の簡略化など新しい要素が見られ、現時点では池下古墳や東古渡町遺跡 SZ11 資料に近い時期と考えられる。つまり、東山 11 号窯期～東山 10 号窯期とするのが妥当である。少なくとも、東山 11 号窯期より前に遡上することは難しい。なお、池下古墳・東古渡町遺跡 SZ11 の有蓋高杯は脚部が東山 11 号窯よりも細くなり、SZ11 ののはそうは頸部が太くなるなど、東山 11 号窯のものよりも新しい時期のものである。東山 11 号窯期の細分、実態の不明瞭な東山 10 号窯期の位置づけなどについては今後の課題としたい。

この尾張における変遷を、陶邑窯の高杯形器台の変遷と比較すると興味深い。杯部は共に当て具を使うが、甕と同様に尾張は無紋当て具を、陶邑窯は同心円紋当て具を基本使用する。尾張では、脚裾端部を外部に折り曲げるものが残るが、陶邑窯では TK216 型式から裾部が内湾気味のものがみられる（例えば TK83 号窯）。さらに、尾張では、長脚化は東谷山 9 号墳資料（MT15 型式並行・東山 10 号窯期か）からであるが、陶邑窯では TK216 型式以前から杯部が浅く、多段で脚部の長脚化がみられる。以上の点に大須二子山古墳も含めた尾張の高杯形器台の独自性が指摘できる。

なお、岡崎市経ヶ峰 1 号墳では、N I トレンチで陶邑窯産と思われる高杯形器台と W II トレンチで尾張産の杯蓋が出土している（斉藤ほか 1981）。前者は杯部口縁端部が独特で、脚部は長脚で多段透かしで、裾

端部に突帯がない。TK208 型式以前であろう。後者は東山 111 号窯期（TK216 型式並行）以降に位置づけられよう。出土地点は異なるが、示唆的である。

かつて、伊藤秋男が本稿の大須二子山古墳の高杯形器台を TK208 型式と「類比的」であり、5 世紀後葉の中頃に位置づけたが（伊藤 1978）、東山窯編年の大枠ができる（斎藤 1989・1991）以前であり、参照枠を陶邑窯田辺編年（田辺 1966）に求めれば、納得できうる指摘であったし、また、脚部方形透かしに陶邑窯ではなく、尾張や伊勢に産地を想定した見解は今日的にも注意されるものであった。

（2）大須二子山古墳下層遺構の初期須恵器等との比較

筆者はかつて、下層遺構の須恵器について名古屋市博物館資料（犬塚 1990）を中心に部分的に再検討したことがある（中里 2014）。杯身は土釜形杯身の系譜で理解でき、東山 111 号窯かそれ以前に位置づけた。杯部と脚部の接合方法、裾部のユビオサエ、非ロクロの回転ナデなど土師器高杯の要素を持ちながら穿窯焼成の高杯がある。高杯脚部片で、3 方向に円孔透かしを穿ち、裾部を横に広げ、名古屋の在地要素のないものもある。しかしながら、これらが一括資料といえるのか確証がなく、まとめて扱わなかった。

今回、南山大学所蔵資料を一瞥してみて、「椀状高杯」（中里 2014 参照）があること、多孔透かしの筒形器台、コップ形、盃（柴山江由来か）、格子目叩きの甕などの存在から、一部の甕を除いて基本的に下層資料が、一括性の有無は別として東山 111 号窯（TK216 型式並行）以前の初期須恵器とみなしてよいと再確認した。このように考えると、下層遺構も含めた「大須二子山古墳須恵器」のほとんどは従来から言われるように初期須恵器であるが、甕の一部と共に高杯形器台は時期の降るものといえ、墳丘に伴う可能性を残すものといえる。

なお、比較的残りの良い 4 方向透かしの筒形器台がある。袖木和夫採集資料として「封土のくびれ部から出土したという」（伊藤 1978、36 頁）。しかし、証言の検証から、犬塚は墳丘下の遺物包含層からの出土を考える（犬塚 1990）。尾張の筒形器台は志賀公園遺跡 SU11 資料（東山 111 号窯期前後）→東古渡町遺跡 SD03 資料・羽根古墳資料→東谷山 9 号墳資料が大枠の変遷と思われる。志賀公園遺跡 SU11 資料は最上部の杯部がないが上部に壺部がある。東古渡町遺跡 SD03 資料は壺内部が充填しており、東谷山 9 号墳資料になると、上部の杯部底が埋まってしまい、筒形器

台なのに筒ではなくなる。

大須二子山古墳資料のものは壺内部が充填しておらず、志賀公園遺跡 SU11 資料と共通するが、透かしの方向が 8 方向から 4 方向になり、下部が箱状から椀状になっている。一方で、下部裾部の屈曲は東古渡以降とは異なる古い要素であろう。つまり、形式的には志賀公園遺跡 SU11（東山 111 号窯期）と東古渡町遺跡 SD03（東山 11 号窯期直後）の間に位置づけられる。しかし、時期的に不明確であり、初期須恵器と見なすか、高杯形器台に伴うのかは保留としたい。

3. 高杯形器台の発見経緯を巡って

本稿の高杯形器台は「名古屋市大須二子山古墳調査報告」（伊藤 1978）によって、脚部のみ実測図が提示された。また、この報告によれば、筒形器台を含め須恵器の大半は柚木が採集したとのことであるが、本稿の高杯形器台自体の発見された場所は不明とのことである。

この報告段階では、杯部が確認されていなかった。「杯の大部分を欠損しているが、発見当時は部分的に杯の口縁まで遺存していたらしい」という八賀晋の証言に注で触れているが、人類学博物館には現在杯部も含めて全体が復元されて存在している。伊藤報告後、人類学博物館収蔵庫から杯部片が発見されたとのことである（注 1）。

伊藤禎樹は「尾張の大型古墳」（伊藤 1972）において、「岐阜県城山古墳」出土として提示されている『日本の考古学』V 巻末の「須恵器編年図表」（植崎 1966）にある高杯形器台はこの大須二子山古墳の高杯形器台であると書いている。提示された図は確かに当該資料と似ている。この「城山古墳」出土とされる資料は八賀も関わった「後期古墳時代の諸段階」（植崎 1959）にも出土地記載がなく提示されている。

今となっては、大須二子山古墳の高杯形器台が「城山古墳出土」として掲載されたかの真偽は確認できない。また、1950～60 年代に杯部が残り、1978 年前後に杯部の行方が分からなくなっていたという経過もよくわからない。

ところで、伊藤は、高杯形器台について田中稔が大須二子山古墳のくびれ部より採集した資料であると、田中本人から教示をえた旨を書いている（伊藤 1972）。ただし、田中自身は、「大須二子山古墳は、稿了後、一九五三年四月五日後円部北端を最後に全封土は趾形もなく土取され、古墳は壊滅し去った」。「こ

の時採取された遺物としてコップ形須恵器および器台として、埴輪円筒の破片がある」(原文ママ)と書くのみである(田中 1953)。

犬塚の再検討により、大須二子山古墳出土品は、昭和 22 年伏見町線道路拡張工事、昭和 23 年大須球場スタンド拡張工事、昭和 28 年(1953) 球場撤去工事の 3 回の出土・採集時期があったことが明らかになった。そして、田中の論考に出てくる、「コップ形須恵器」、「器台」、「円筒埴輪」は昭和 28 年の工事の際のもので、これらは山田吉昭が集約した主体部出土品(昭和 23 年の工事採集)と共に、鶴舞公園事務所の保管を経て、南山大学人類学博物館に至り(犬塚 1990)、実際コップ形須恵器も博物館に現存する。つまり、筒形器台を袖木が採集(昭和 22 年道路拡張工事)したのに対して、「器台」(高杯形器台)の採集には昭和 28 年に田中が関与した可能性が高い。

田中が高杯形器台を認識し、自身の論考には直接書いてはいないが、くびれ部から採集したという証言は重要である。田中は工事による削平で墳丘断面を記録し、古墳築造法について言及しているが、古墳下層に遺物包含層があることも認識していた。その上で、田中は「器台」が古墳墳丘に伴うという認識を持っていた。高杯形器台が墳丘に伴う可能性を再度提起したい。

ところで、犬塚は、昭和 22 年の伏見町線拡幅工事の際に「遺物は地山の赤土と黒色土の境界線直下から出土した」という伊藤要造の証言をえて、「袖木氏採集にかかる須恵器も古墳下の遺物包含層の出土と見るべきであろう」とした。これにより、南山大学所蔵の須恵器も下層資料と見られるようになった。

「袖木氏採集須恵器は、同氏の断面スケッチ中、前方部の黒色土最下層から出土しているが、この黒色土は田中氏論文の断面図中、上下に接する封土最下層位の黒色有機土層と古墳下遺物包含層に対応するものとみなすことができる」(犬塚 1990)。

しかし、田中の関わった高杯形器台と袖木氏採集須恵器は出土時期が区別される以上、同一に扱うことは慎重にならねばならない。

4. 大須二子山古墳の年代的位置づけの再考

以上、高杯形器台が、形式的検討から初期須恵器ではなく、さらに墳丘に伴う可能性があることを指摘した。その可能性を認めると、大須二子山古墳は東山 10 号窯期ないしその直前となる。当然ながら、大須

二子山古墳の年代を考える際、埴輪や副葬品の年代観も考慮する必要があり、他の研究者の見解を参照しながら見ていきたい。

(1) 大須二子山古墳の埴輪

安達厚三によって、名古屋市博物館所蔵の比較的残りの良い円筒埴輪が 2 点紹介されている。須恵質のものは筒形というよりもやや開き気味で、3 突帯 4 段以上で、内外に底部ヘラケズリがある。土師質は内側に底部ヘラケズリがある。ヘラ状工具による切り離し痕共にみられる(安達 1973)。南山大学所蔵資料を実測図の提示(黒沢 2011)された以外のものを含めて観察するなかでは、須恵質もあるが土師質主体で、ヒモずれによる味美技法は見られなかった。袖木所蔵資料には、「斜めに叩いて表面を調整したのち、縦の刷毛目で再調整し、このあと突帯を貼付している」[須恵質円筒埴輪片]が写真で提示されている(伊藤 1978)。現在展示品のなかに見られる(黒沢 2011、図版 5-36)が、倒立技法の可能性もある。

かつて、犬塚はタガ(突帯)が低い点は、白鳥古墳や断夫山古墳に見られないもので退化現象とし、新しく位置づけた(犬塚 1988)。大須二子山古墳の円筒埴輪の突帯は全体的に低い、高いものも須恵質埴輪にある(黒沢 2011、図版 5-34 など)。

(2) 味美地域にみる尾張の円筒埴輪の変遷

大須二子山古墳の円筒埴輪を理解するために、尾張の埴輪と比較したい。尾張の円筒埴輪編年は赤塚次郎(赤塚 1991)や藤井康隆(藤井 2006)などの研究が知られる。ここでは発掘調査などにより、資料が比較的整っている味美地域(春日井市西側周辺)の様相を浅田博造の見解から参照したい。

この地域の残存する前方後円墳は、白山神社古墳(墳長 79m)と二子山古墳(墳長 101m、愛知県史平成 2 年測量値、春日井市教育委員会 2004)、春日山古墳(墳長 74m、大下 1998)で、比較すると、二子山古墳と春日山古墳は前方部が大きく拡張し発達している。発掘で、白山神社古墳は馬蹄形の周溝と確認され(春日井市教育委員会 2013)、二子山古墳は盾形の周溝であり、2 重周溝の可能性があり、春日山古墳(大下 1997、71 頁)も盾形の周溝であると推測されている。また、春日山古墳は埴輪が見つからない。白山神社古墳→二子山古墳→春日山古墳という変遷が想定されている(春日井市教育委員会 2013)が、肯定される。その上で、埴輪の変遷を円墳である御旅所古

墳、南東山古墳を含めて考えてみたい。

白山神社古墳（春日井市教育委員会 2013）、確認されている円筒埴輪は、筒形で二突帯三段のみで、味美技法（1回のみ）が2点確認される。後続の古墳の円筒埴輪と比べても、突帯が低い。土師質のみとなっている。

御旅所古墳（春日井市教育委員会 2013）、直径約35mの円墳である。埴輪は、昭和50年に墳丘外周土留め工事の際にみつかった。埴輪の年代は白山神社古墳と二子山古墳の間に位置づくが、全体的に二子山古墳の方に近い。円筒埴輪は、筒形で、三突帯四段、倒立技法、突帯が高く、須恵質主体で土師質もまざる。出土した高杯形器台脚部は（図2-9）、長脚化しつつ透かし2段で、東山10号窯期に位置づけられよう。

味美二子山古墳（春日井市教育委員会 2004・2013）、二突帯三段・三突帯四段が形態上の大小としてあり、それぞれ筒形・逆台形がある。二突帯三段のものには味美技法（正位に製作・複数回）、三突帯四段のものには倒立技法がみられる。須恵質主体であるが土師質も混ざる（出土重量では、7:3）。二突帯三段のものに土師質、三突帯四段のものに須恵質が多く、浅田は倒立技法のある三突帯四段により強い須恵器工人の関与を見る（浅田 2021）。なお、円筒埴輪の口縁端部が肥厚し、突帯が高い。出土須恵器は、高杯形器台から東山10号窯期に位置づけたいが、蓋杯などには、東山61号窯期、蝮ヶ池窯期に降るものが含まれる。

南東山古墳、直径40m円墳とされる（浅田 2016）。円筒埴輪は3突帯4段で、倒立技法のものや底部ヘラケズリから正位でつくられたものもある。突帯が突出する。蓋杯など出土須恵器は基本的に蝮ヶ池窯期である（中里 2019）。

以上、味美地域の埴輪の変遷を整理すると、埴輪は土師質主体から須恵質主体、筒形→逆台形、味美技法は1回から複数回、3突帯4段以上には倒立技法が登場し、焼きひずみを考慮して突帯が高くなるといった傾向がみえる。

味美地域の状況からすると、突帯が低いという犬塚の指摘は、逆に古くさせる根拠といえる。つまり、大須二子山古墳の円筒埴輪は、須恵質がありつつも土師質が主体で、明確な味美技法がなく（ヒモズレ・ユビズレがない）、倒立技法がほとんどなく、突帯も低い点から、白山神社古墳と御旅所古墳の間に位置づけられるという見通しが立つ。須恵器と同様に埴輪からも、東山11号窯期～東山10号窯期に位置づけられ

る。

(3) 断夫山古墳との先後関係

断夫山古墳は、墳丘長151mの尾張最大の前方後円墳であり、後円部高さ13m、前方部高さ16m、前方部の方が高く、盾形周濠である。埴輪には須恵質、土師質、中間的なものが見られる。また、倒立技法の大形円筒埴輪（8突帯9段）が提示されている（赤塚 1991）。

近年の断夫山古墳の年代根拠は田端勉採集須恵器であろう。尾野善裕は東山11号窯前後に断夫山古墳出土須恵器（森ほか 2003）を位置づけるが、筆者は東山61号窯期の可能性も考えた。杯身の口径復元が残存率から難しいこと、長脚一段透かし高杯があること、刺突文のある壺類、壺類の端部が角ばっていること、器台の長脚化などを根拠とする。その際、断夫山古墳の年代的な位置づけは須恵器のみならず多面的に再検討が必要であると述べた（中里 2015・2018）。

深谷淳は、尾張において最初に周堤が採用されたのは東山11号窯期～東山10号窯期の断夫山古墳の可能性が高く、ニサンザイ型の墳丘形態、多条突帯大型円筒埴輪とともに大王墓の墳墓要素の一つとして畿内地域から断夫山古墳に導入されたと考えられるという（深谷 2015）。

浅田は「近畿地方（王権中枢）との政治的関係や多条突帯の系譜的起源は検討課題とするが、倒立技法・朝顔形埴輪の分割成形は断夫山古墳を初源とし、大型の埴輪を大量生産するために案出した成形手順と考えられる。味美古墳群で想定した埴輪生産の技術革新・体制の刷新は断夫山古墳の築造を契機とし、猿投窯からの技術伝播による下原窯の開窯を通じて共有されたと推定」する（浅田 2021）。浅田の考えでは、倒立技法の登場する御旅所古墳を東山11号窯期に位置づけるので、断夫山古墳もそれ以前となろう。尾野の須恵器の理解を念頭に、歴史解釈を前面に出している。

断夫山古墳の年代は、尾野、深谷、浅田などの東山11号窯期、東山10号窯期、そして筆者の東山61号窯期までの幅で各種説があり、筆者の考えが一番新しい時期といえる。

それでは埴輪からはどうか。多条突帯埴輪があり、倒立技法・須恵質・土師質がある、突帯は低いものと高いものがある。

断夫山古墳は、味美地域と比較すると、盾形周溝、須恵質埴輪と倒立技法から味美二子山古墳（東山10号窯期）に近く、名古屋・熱田台地では突帯の高さな

どから大須二子山古墳より新しく、白鳥古墳（東山 61 号窯期か、突帯が高い）より古いといえ、埴輪から古くて東山 10 号窯期、新しく東山 61 号窯期に位置づけるのが妥当であろう。問題は、大須二子山古墳は断夫山古墳よりも古いという筆者の見解は、犬塚、藤井、浅田、深谷などの一般的な見解とは異なっている。

なお、白鳥古墳は、墳丘長 70m の前方後円墳、後円部高さ 6.5m、前方部高さ 7m、前方部の方が高い。盾形周濠。周溝からの円筒埴輪は、多条突帯、土師質、回転ヨコハケ。直口口縁と貼付口縁がある。突帯は高い。断夫山古墳よりも新しいとされる（新修名古屋市史資料編編集委員会 2008）。ただし、土師質である点は注意したい。

(4) 馬具を中心とした副葬品の評価

最後に、副葬品にも言及したいが、筆者の能力を超えるので、ここでは森泰通による馬具の分析を参照するに留める（森ほか 2003）。大須二子山古墳の馬具は銜と引手が f 字形鏡板の外側で連結されている。TK47 型式から MT15 型式に鏡板外側での連結から内側での連結へと変化する、しかし、f 字形鏡板のサイズや銜数などに新しい要素を見て、MT15 型式を中心とする時期に置く考えもあることを紹介し、その上で森は、尾野編年Ⅲ期古段階（東山 61 号窯期）並行期の亀山市井田川茶白山古墳・磐田市甕塚古墳の引手が内側での連結であり、また、大須二子山古墳にみられる心葉形杏葉が TK47 型式以前になく、飾銜留の盛行は MT15 型式以降盛行するという岡安光彦の見解（岡安 1988）も根拠に、馬具から大須二子山古墳を尾野編年Ⅱ期新段階（MT15 型式・東山 10 号窯期）に位置づける。

MT15 型式と東山 10 号窯期の並行関係が認められるならば、副葬品からは東山 10 号窯期に位置づけられる。副葬品は須恵器高杯形器台と同じか、一段階新しくも見える。横穴式石室であった可能性もあり（服部 2005）、副葬品の追葬の可能性もありうるが、また、器台そのものの伝世も考慮に入れても良いかもしれない。

おわりに

本稿では、高杯形器台の再検討から、その年代的な位置づけを再確認した。また、そこから派生する大須二子山古墳の年代問題を論じた。出土状況など不確定様

相も多いが、大須二子山古墳を須恵質化する尾張の埴輪の直前の時期に位置づけ、全国的には MT15 型式並行期、尾張では東山 10 号窯期ないしその直前に位置づけ、その上で断夫山古墳に先行する可能性を示した。多くの批判を頂戴すると思うが、問題提起として、当該時期の活発な議論につながる呼び水になることを希望し、本稿を閉じたい。

本稿執筆にあたり、資料調査の便宜及び執筆の機会を頂いた黒澤浩教授、また、秦優莉香学芸員（当時）、博物館事務室の水田真紀子氏をはじめ南山大学人類学博物館スタッフの皆様様に深謝いたします。

註

- (1) 伊藤秋男南山大学名誉教授にご教示頂いた。

引用・参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 1991『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集
愛知県埋蔵文化財センター 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 90 集
赤塚次郎 1991「尾張型埴輪について」『池下古墳』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 24 集
浅田博造 2016「勝川古墳群と味美古墳群の系譜関係—南東山古墳出土尾張型埴輪の検討を中心として—」『尾張勝川Ⅴ古墳から古代寺院へ』考古学フォーラム
浅田博造 2021「味美古墳群と下原古窯跡群」『断夫山古墳と埴輪研究の最前線を語る』しだみの里守グループ
安達厚三 1973「名古屋市大須二子山古墳出土の遺物をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要』第 1 巻
荒木実 1994『東山古窯址群』中日出版本社
伊藤秋男 1978「名古屋市大須二子山古墳調査報告」『小林知生教授退職記念考古学論文集』南山大学考古学研究室
伊藤秋男 2007「大須二子山古墳とその時代」『東海学セミナー (3) 一県下の二子山古墳—』春日井市教育委員会
伊藤禎樹 1972「尾張の大型古墳」『考古学研究』第 19 巻 2 号
伊藤純・内田好昭 1995「波状文の施文方向から見た須恵器高杯形器台の製作手順」『大阪府埋蔵文化財協会研究紀要 3—設立 10 周年記念論集—』財団法人大阪府埋蔵文化財協会
犬塚康博 1990「大須二子山古墳の復元的再検討」『名古屋市博物館研究紀要』第 13 号
大下武 1998「味美二子山古墳の時代 (1) —尾張の段丘・丘陵地帯の古墳分布論—」『味美二子山古墳の時代

- (第1分冊)』春日井市
- 岡安光彦 1988「心葉形鏡板付轆・杏葉の編年」『考古学研究』第35巻第3号考古学研究会
- 尾野善裕・梶原義実ほか 2010『東山61号窯発掘調査報告書』名古屋大学大学院文学研究科考古学研究室
- 岡戸哲紀 2006「陶邑の成立」『須恵器の成立展開』2005年度(財)大阪府文化財センター・近つ飛鳥博物館共同研究発表会資料
- 春日井市教育委員会 2004『味美二子山古墳—二子山公園遺跡第1次～第3次発掘調査報告書—』春日井市遺跡発掘調査報告書第10集
- 春日井市教育委員会 2013『白山神社古墳—白山神社古墳第1次発掘調査報告書・付編御旅所古墳出土遺物について—』春日井市遺跡発掘調査報告書第13集
- 黒沢浩 2011「付編 大須二子山古墳出土埴輪・須恵器」『南山大学人類学博物館所蔵考古資料 高蔵遺跡の研究／大須二子山古墳と地域史の研究』南山大学人類学博物館オープンリサーチ研究報告第4冊、六一書房
- 斎藤孝正 1983「猿投窯成立期の様相」『名古屋大学文学部研究論集』(史学29)名古屋大学文学部
- 斎藤孝正 1986「東山61号窯出土の須恵器」『名古屋大学総合研究資料館報告』2、名古屋大学総合研究資料館
- 斎藤孝正 1989「古墳時代の猿投窯」『断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会
- 斎藤孝正 1991「須恵器編年 5 東海 A 愛知」『古墳時代の研究』第6巻雄山閣
- 斉藤嘉彦ほか 1981『経ヶ峰1号墳』岡崎市教育委員会
- 新修名古屋市史資料編編集委員会 2008『新修名古屋市史資料編考古』第1巻 名古屋市
- 新修豊田市史編さん委員会 2015『新修豊田市史資料編考古II 弥生・古墳』豊田市
- 田中稔 1953「前方後円墳の築造方法 名古屋市大須二子山古墳の場合」『歴史評論』49
- 田辺昭三 1966『陶邑古窯址群1』研究論集10 平安学園
- 中里信之 2012「東山窯編年の諸問題」『東海の古代③尾張・三河の古墳と古代社会』同成社
- 中里信之 2014「名古屋台地とその周辺における初期須恵器の再検討」『韓式系土器研究』Ⅷ韓式系土器研究会
- 中里信之 2015「コメント：「東山61号窯」埴輪同工品分析の提起する問題」『考古学フォーラム』22 考古学フォーラム
- 中里信之 2018「東海—横穴式石室登場時の尾張の須恵器生産を中心に—」『季刊考古学』第142号雄山閣
- 中里信之 2019「東山61号窯前後の杯身の再検討—尾張の古墳時代須恵器編年の再検討のために—」『東海窯業史研究論集』2
- 中里信之 2021「東山窯成立に関わる系譜と編年の諸問題」『古墳文化基礎論集』古墳文化基礎論集刊行会
- 榑崎彰一 1959「後期古墳時代の諸段階」『名古屋大学文学部十周年記念論集』名古屋大学文学部
- 榑崎彰一 1966「須恵器編年図表」『日本の考古学』V 河出書房新社
- 服部哲也 2005「大須二子山古墳」『愛知県史』資料編3 考古3 古墳 愛知県
- 深谷淳 2015『尾張の大型古墳群 国史跡志段味古墳群の実像』名古屋市教育委員会文化財保護室・六一書房
- 藤井康博 2006「尾張における円筒埴輪の変遷と「猿投型円筒埴輪」—「尾張型埴輪」の再構築」『埴輪研究会誌』第10号
- 松澤和人 2009『塚原古墳群—瀬戸環状東部線(塚原古墳群)発掘調査報告書—』瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第38集 財団法人瀬戸市文化振興財団
- 森泰通・尾野善裕 2003「尾張断夫山古墳の時代—故田端勉氏採集資料をめぐって—」『三河考古』第16号三河考古刊行会

(長野県下伊那郡阿智村教育委員会)

‘Some Questions about a Stem-cup-shaped Vessel Stand from Osu Futagoyama Kofun’

NAKASATO Nobuyuki

Nanzan University Museum of Anthropology has a collection of Sue wares found in Osu Futagoyama Kofun (burial mound), situated in Nagoya City, and it contains a stem-cup-shaped vessel stand. This burial mound, in Osu, Naka Ward in Nagoya, is an essential large site for studying the Kofun period in Owari (Western part of Aichi Prefecture). Still, many issues remain that need to be examined concerning its scale, inner structure, grave goods and its date. Although a lot of Sue wares were found at the site, the researchers have suggested the existence of another-period ruin beneath the burial mound, and the date of construction remains complicated. The author in this paper re-examines the date and production area of the item and also suggests that the vessel stand can be dated at the end of the fifth century, associated with the burial mound itself, and therefore, that be different from the general understanding of the site; it can be possible to suggest that Osu Futagoyama Kofun was constructed just before the period of Danpusan Kofun.

切手コレクションの寄贈

——昭和の切手、小学生コレクターの思い出——

丸山 徹

私たち人間はときに「身体が震えるような喜び」を持つことがあるが、それはどんな時なのだろうか。

作曲家である私の伯父は戦後、何年もの間、南の島で（毎日ビスケット三枚で一日を凌ぐ）捕虜生活を送っていた。そんな中でも捕虜たちは楽しみを求め、楽器がないので木の枝などで楽器の形を作り、毎日、皆（の声）で「合奏」していたという。日本に帰還後、プロの作曲家として活動する中、自分たちが純粋に音楽を楽しんでいたのは実はあの頃だけだったのではないかと語っていたことがある。そんな中、日々音楽をほんとうに身体全体で楽しんでいるのはいわゆる文明国の「文化人」ではなく、南の島々で生活する、物質的には極めて貧しい「原住民」たちであったとも生前、述懐していた。

私は、これまでの我が人生で「身体が震えるような喜び」を持ったのはどんな時であったかを回想し、記してみたことがある。その時、小学校時代を思い出し、なんの躊躇もなく、「ほしい切手が手に入ったとき」とまずはじめに記したことを思い出す。これってコレクターにしかわからない気持だろうなあとは思いますが、伯父が捕虜生活における「音楽活動」から得ていた「やすらぎ」を、また南の島の人々が身体全体で音楽を楽しみながら享受していた「喜び」を、戦後の平和な時代を過ごす小学生の私は「切手収集」の中で味わっていたのである。

私の子供時代、周りは確かに平和な時代であった。高度経済成長期に重なり、大人は皆わき目もふらずに朝から晩まで働き続け、子供たちはいくつもの習い事、塾や進学教室での生活に追われていた。私の場合、それはそれで時に苦しく、また時に楽しくもあったのだが、日々の生活の中で「身体が震えるような喜び」を持つことはとてもできなかった。唯一、それを

持てたのは「切手収集」の中であったと思う。記念切手の発行日に朝早くから郵便局の窓口に並んだり⁽¹⁾、お小遣いをためてそれを握りしめ、少し遠くの確か「スタンプ商会」という名の（年配のご夫婦が経営していた）記念切手販売店まで自転車を飛ばして通ったりしていた。その頃の「幸せ」は今でも決して忘れることはない。その時の頬への心地よい風の感触まで鮮明に覚えている。

そんな小学生時代であったと思う。たまたま我が家を訪ねてきた母の友人に私の「切手収集」を見せたことがある。記念切手を一枚一枚丁寧にビニールの小袋に入れて、それをまたきれいにアルバムに整理してある私の「宝物」を見たその人は、ものすごく感激し、自分も昔、切手を集めていたけれど、今はもう興味がないからすべて君に上げる、と言って後日、その方の若い頃の収集切手をすべて届けてくれた。その中にあったのが、夢にまで見ていた「月に雁」や「見返り美人」をはじめとする、その頃の小学生には到底手に入れることのできないものばかりであった。その時の喜びは、もうどう表現したらよいかわからない。何日



かは眠れないほどうれしかった。

実はこの話には後日譚があり、何年か後にその方の息子さんが大きくなり、切手収集に夢中になり始めたという。その方は、貴重なコレクションをすべて私に譲渡してしまったことを後悔し、私の母に「少しでもいから切手を戻してくれないか」と頼んできた。私も相当数の切手を二つのアルバムに整理して差し上げ、息子さんは大喜びされたと聞いたが、「月に雁」や「見返り美人」をはじめとする、その頃小学生の私には到底手に入れることのできなかった「貴重品」⁽²⁾は私の手元から離さなかった。今から考えると申し訳ない気持ちにもなるが、「月に雁」や「見返り美人」は、私の胸に今もそんな思い出と共に残っている。

いわゆる「切手ブーム」の昭和30年代、その象徴となる切手は何といても「月に雁」と「見返り美人」であった。先日、近くの切手商を訪ねると、その店主が「あの頃、そのふたつの切手を持つてる子はもうヒーローだったもんなあ」と感慨深げに話していた。今でもこれらの切手が切手収集の象徴であることには変わらないようで、最新版（2023年度）カタログを見ると、その表紙に掲載される写真も「月に雁」「見返り美人」……などである。

中学、高校時代になると、私の「収集癖」も少しマシネリ化してきて、昔のような「喜び」は持てなくなっていた。小学校以来、私の「切手収集」を眺めていた父が、友人の（プロのような）収集家を通して、新しく発行される切手をシート単位で購入してくれるようになった。それはそれでうれしかったが、もはや「身体が震えるような喜び」を持つことはできなくなっていた。

今回、人類学博物館に寄贈させていただいたものは、シート単位のものや、年賀記念切手シートを別とすれば、先ほど言及した「月に雁」や「見返り美人」をはじめとする「単片」（こちらの方が貴重なのであるが）は、その一部はヒンジというものでアルバムに貼ってある。ヒンジ跡がついてしまい切手としての価値は落ちるので今はもうこのような収集の仕方は取らないと思うが、昔はこの方法が一般であった。そんなことも知っていただければ幸いです。

社会の動きがこうした記念切手に反映することはも

ちろんあった。一番印象に残るのは1964年の東京オリンピックである。この頃、私自身はもう中学生になっていて我が家にもテレビが入っていたが、「もはや戦後ではない」というスローガンと共に国を挙げて催された一大イベントに合わせる形で記念切手が何種類も発行されている。

またその少し前の話であるが、私の記憶に残る大きな出来事は「テレビの普及」であった。小学生のころ、近所にたった一台しかなかったテレビの前に集まり、小学生の仲間十数名と一緒に全員正座してプロレスなど（の番組）を食い入るように観戦していたことを思い出す。不思議とその頃、「テレビブーム」をテーマとする切手は発行されていないようだ。現在手元にあるのは平成15（2003）年にテレビ放送50周年を記念して発行された「テレビ局タイトルの鳩」⁽³⁾と街頭テレビ⁽⁴⁾をテーマとする700万枚発行、額面80円の記念切手のみである。

日本にもいくつかある切手の博物館や記念館が所蔵する多くの貴重品と比べたら、今回私が寄贈するものなど物の数ではない。ただ昭和の時代、小学生のこんな一コレクターがいたのだということを知っていただけたら幸いです。

【謝辞】

南山大学人類学博物館 黒澤浩先生、井原瑠梨さん、秦優莉香さんをはじめとする学芸員の方々、中村さま、水田さまをはじめとする事務職員の方々、資料評価委員会の先生方のあたたかいご配慮に御礼申し上げます。特に井原瑠梨さんは今回の寄贈打診以来、いろいろ相談にも乗っていただきお世話になった。他にもお礼を申し上げなければならない方はいらっしゃると思うが、私としてはそうした方々すべてに、今ここで心より感謝申し上げます、拙文を閉じたいと思う。皆さま、ほんとうにありがとうございました。

今回の寄贈切手について⁽⁵⁾

今回、人類学博物館で受け入れていただく切手類（主として「昭和の切手」）につき、カタログも参照しながら、簡条書きで簡単に解説を付す。

1. 年賀切手 New Year Greeting Stamps (1952年～
[昭和27年～])

「切手名」	発行年月日 (単片)	発行枚数
	[発行年月日 (小型シート)]	
・昭和24年用	「はねつき (2円)」 1948.12.13.	750万枚
・昭和25年用	「とら (円山応挙) (2円)」 1950.2.1.	1,000万枚
・昭和26年用	「うさぎと少女 (2円)」 1951.1.1.	1,000万枚
・昭和27年用	「おきな <small>(6)</small> の面 (5円)」 1952.1.16. [1952.1.20.]	1,000万枚
・昭和28年用	「三番叟人形 (5円)」 1953.1.1.	500万枚
・昭和29年用	「三春駒 (5円)」 1953.12.25.	500万枚
・昭和30年用	「起上り (5円)」 1954.12.20. [1955.1.20.]	500万枚
・昭和31年用	「こけし (5円)」 1955.12.20. [1956.1.20.]	600万枚
・昭和32年用	「だんじり (5円)」 1956.12.20. [1957.1.20.]	600万枚
・昭和33年用	「犬はりこ (5円)」 1957.12.20. [1958.1.20.]	800万枚
・昭和34年用	「鯛えびす (5円)」 1958.12.20. [1959.1.20.]	1,500万枚
・昭和35年用	「米くいねずみ (5円)」 1959.12.19. [1960.1.20.]	1,000万枚
・昭和36年用	「赤べこ (5円)」 1960.12.20. [1961.1.20.]	800万枚
・昭和37年用	「張子とら (5円)」 1961.12.15. [1962.1.20.]	1,000万枚
・昭和38年用	「のごみ土鈴 (5円)」 1962.12.15. [1963.1.20.]	1,500万枚
・昭和39年用	「竜神と辰 (5円)」 1963.12.16. [1964.1.20.]	2,000万枚
・昭和40年用	「麦わらへび <small>(7)</small> (5円)」 1964.12.15. [1965.1.20.]	3,300万枚
・昭和41年用	「しのび駒 (5円)」 1965.12.10. [1966.1.20.]	3,500万枚
・昭和42年用	「ひつじ (7円)」 1966.12.10. [1967.1.20.]	一億枚
・昭和43年用	「のぼりざる (7円)」 1967.12.11. [1968.1.20.]	7,000万枚

・昭和44年用	「とり (7円)」 1968.12.5. [1969.1.20.]	7,000万枚
・昭和45年用	「守り犬 (7円)」 1969.12.10. [1970.1.20.]	7,000万枚
・昭和46年用	「いのしし (7円)」 1970.12.10. [1971.1.20.]	7,000万枚
・昭和47年用	「宝船 (7円)」 1971.12.10. [-.]	7,000万枚
・昭和47年用	「宝船 (10円)」 1972.1.11. [1972.1.20.]	5,000万枚
	(昭和47年は2月1日からの郵便料金値上げに合わせて発行された)	
・昭和48年用	「色絵土器皿 <small>(8)</small> (10円)」 1972.12.11. [1973.1.20.]	一億枚
・昭和49年用	「梅竹透釣灯ろう (10円)」 1973.12.10. [1974.1.20.]	一億枚
・昭和50年用	「水仙の釘隠し <small>(9)</small> (10円)」 1974.12.10. [1975.1.20.]	5,000万枚
・昭和51年用	「たつぐるま (10円)」 1975.12.13. [1976.1.20.]	8,000万枚
・昭和52年用	「竹へび (20円)」 1976.12.1. [1977.1.20.]	5,000万枚
・昭和53年用	「飾り馬 (20円)」 1977.12.1. [1978.1.20.]	5,000万枚
・昭和54年用	「ひつじ鈴 (20円)」 1978.12.1. [1979.2.5.]	5,000万枚
・昭和55年用	「喜々猿 (20円)」 1979.12.1. [1980.1.21.]	5,000万枚
・昭和56年用	「にわとり (20円)」 1980.12.1. [1981.1.20.]	5,000万枚
・昭和57年用	「犬 (40円)」 1981.12.1. [1982.1.20.]	5,000万枚
・昭和58年用	「金太郎 <small>(10)</small> (40円)」 1982.12.1. [1983.1.20.]	5,000万枚
・昭和59年用	「ねずみ <small>(11)</small> (40円)」 1983.12.1. [1984.1.20.]	7,000万枚
・昭和60年用	「作州牛 (40円)」 1984.12.1. [1985.1.21.]	7,000万枚
・昭和61年用	「神農の虎 (40円)」 1985.12.2. [1986.1.20.]	7,000万枚
・昭和62年用	「うさぎの餅つき (40円)」 1986.12.1. [1987.1.20.]	7,000万枚
・昭和63年用	「倉敷はりこ (40円)」 1987.12.1. [1988.1.20.]	7,000万枚
・昭和64年用	「土鈴の蛇 (40円)」 1988.12.1. [1989.1.20.]	7,000万枚

〔以上が寄贈済の昭和の年賀切手小型シート。それ以降、平成2年用から令和3年用までの年賀切手小型シート寄贈済〕

2. 花シリーズ Flower series (1961年 [昭和36年])

切手名	発行年月日	発行枚数
「すいせん (10円)」	1961.1.30.	800万枚 [Sg] ⁽¹²⁾
「うめ (10円)」	1961.2.28.	800万枚 [Sg]
「つばき (10円)」	1961.3.20.	800万枚 [Sg]
「さくら (10円)」	1961.4.28.	800万枚 [Sg]
「ぼたん (10円)」	1961.5.25.	800万枚 [Sg]
「しょうぶ (10円)」	1961.6.15.	800万枚 [Sg]
「やまゆり (10円)」	1961.7.15.	1,000万枚 [Sg]
「あさがお (10円)」	1961.8.1.	1,000万枚 [Sg]
「ききょう (10円)」	1961.9.1.	1,000万枚 [Sg]
「りんどう (10円)」	1961.10.2.	1,000万枚 [Sg]
「きく (10円)」	1961.11.1.	1,000万枚 [Sg]
「さざんか (10円)」	1961.12.1.	1,000万枚 [Sg]

3. 鳥シリーズ Bird series (1963年～64年 [昭和38年～39年])

切手名	発行年月日	発行枚数
「るりかけす (10円)」	1963.6.10.	1,350万枚 [Sh] [Sg]
「らいちょう (10円)」	1963.8.10.	1,690万枚 [Sh] [Sg]
「きじばと (10円)」	1963.11.20.	1,720万枚 [Sh]
「こうのとりのり (10円)」	1964.1.10.	1,750万枚 [Sh]
「うぐいす (10円)」	1964.2.10.	1,800万枚 [Sh] [Sg]
「ほおじろ (10円)」	1964.5.1.	2,500万枚 [Sh] [Sg]

4. 切手趣味週間 Philatelic week (1948年～ [昭和23年～])

切手名	発行年月日	発行枚数
「見返り美人 ⁽¹³⁾ (5円)」	1948.11.29.	150万枚 [Sg]
「月に雁 ⁽¹⁴⁾ (8円)」	1949.11.1.	200万枚 [Sg]
「ビードロを吹く娘 ⁽¹⁵⁾ (10円)」	1955.11.1.	550万枚 [Sg]
「市川えび蔵 ⁽¹⁶⁾ (10円)」	1956.11.1.	550万枚 [Sg]
「まりつき ⁽¹⁷⁾ (10円)」	1957.11.1.	850万枚 [Sg]
「雨中湯帰り ⁽¹⁸⁾ (10円)」	1958.4.20.	2,500万枚 [Sg]
「浮世源氏 ⁽¹⁹⁾ (10円)」	1959.5.20.	1,500万枚 [Sg]
「三十六歌仙 ⁽²⁰⁾ (10円)」	1960.4.20.	1,000万枚 [Sg]

「女舞姿 (10円)」	1961.4.20.	800万枚 [Sg]
「花下遊楽 ⁽²¹⁾ (10円)」	1962.4.20.	1,000万枚 [Sg]
「千姫 (10円)」	1963.4.20.	1,450万枚 [Sh]
「源氏物語」 ⁽²²⁾ (10円)」	1964.4.20.	2,800万枚 [Sh]
「序の舞 ⁽²³⁾ (10円)」	1965.4.20.	3,800万枚 [Sh]
「蝶 ⁽²⁴⁾ (10円)」	1966.4.20.	3,500万枚 [Sh]
「湖畔 ⁽²⁵⁾ (15円)」	1967.4.20.	3,300万枚 [Sh]
「舞妓林泉 ⁽²⁶⁾ (15円)」	1968.4.20.	3,000万枚 [Sh]
「髪 ⁽²⁷⁾ (15円)」	1969.4.20.	3,150万枚 [Sh]

5. 東京オリンピック募金 Tokyo Olympic Games Fund (1961年～1964年 [昭和36年～昭和39年])

切手名	発行年月日	発行枚数
〔第1次〕	1961.10.11.	各400万枚
「槍投げ (5+5円)」	1961.10.11.	400万枚 [Sg]
「飛込み (5+5円)」	1961.10.11.	400万枚 [Sg]
「レスリング (5+5円)」	1961.10.11.	400万枚 [Sg]
〔第2次〕	1962.6.23.	各450万枚
「柔道 (5+5円)」	1962.6.23.	450万枚 [Sg]
「水球 (5+5円)」	1962.6.23.	450万枚 [Sg]
「平均台 (5+5円)」	1962.6.23.	450万枚 [Sg]
〔第3次〕	1962.10.10.	各500万枚
「バスケットボール (5+5円)」	1962.10.10.	500万枚 [Sg]
「ボート (5+5円)」	1962.10.10.	500万枚 [Sg]
「フェンシング (5+5円)」	1962.10.10.	500万枚 [Sg]
〔第4次〕	1963.6.23.	各800万枚
「バレーボール (5+5円)」	1963.6.23.	800万枚 [Sg]
「ボクシング (5+5円)」	1963.6.23.	800万枚 [Sg]
「ヨット (5+5円)」	1963.6.23.	800万枚 [Sg]
〔第5次〕	1963.11.11.	各1,400万枚
「自転車 (5+5円)」	1963.11.11.	1,400万枚 [Sg]
「馬術 (5+5円)」	1963.11.11.	1,400万枚 [Sg]
「ホッケー (5+5円)」	1963.11.11.	1,400万枚 [Sg]
「射撃 (5+5円)」	1963.11.11.	1,400万枚 [Sg]
〔第6次〕	1964.6.23.	各1,400万枚
「カヌー (5+5円)」	1964.6.23.	1,400万枚 [Sg]
「サッカー (5+5円)」	1964.6.23.	1,400万枚 [Sg]
「重量あげ (5+5円)」	1964.6.23.	1,400万枚 [Sg]

・「近代五種 (5+5 円)」	1964. 6.23.	1,400 万枚 [Sg]	[第 5 回国体	1950.10.28.	100 万組]
「募金小型シート	1964. 8.20.]	・「つり輪 (8 円)」	1950.10.28.	100 万枚 [Sg]
・「第一次小型シート」	1964. 8.20.	200 万枚 [Sg]	・「棒高跳び (8 円)」	1950.10.28.	100 万枚 [Sg]
・「第二次小型シート」	1964. 8.20.	200 万枚 [Sg]	・「サッカー (8 円)」	1950.10.28.	100 万枚 [Sg]
・「第三次小型シート」	1964. 8.20.	200 万枚 [Sg]	・「馬術 (8 円)」	1950.10.28.	100 万枚 [Sg]
・「第四次小型シート」	1964. 8.20.	150 万枚 [Sg]			
・「第五次小型シート」	1964. 8.20.	150 万枚 [Sg]	[第 6 回国体	1951.10.27.	200 万組]
・「第六次小型シート」	1964. 8.20.	150 万枚 [Sg]	・「砲丸なげ (2 円)」	1951.10.27.	200 万枚 [Sg]
			・「ホッケー (2 円)」	1951.10.27.	200 万枚 [Sg]
・東京オリンピック 1964 18 th Olympic Games, Tokyo (1964 年					
[昭和 39 年])			[第 7 回国体	1952.10.18.	200 万組]
「聖火台と選手 (5 円)」	1964. 9. 9.	5,500 万枚 [Sh]	・「山岳競技 (5 円)」	1952.10.18.	200 万枚 [Sg]
「国立競技場 (10 円)」	1964.10.10.	4,500 万枚 [Sh]	・「レスリング (5 円)」	1952.10.18.	200 万枚 [Sg]
「日本武道館 (30 円)」	1964.10.10.	2,000 万枚 [Sh]			
「室内競技場 (40 円)」	1964.10.10.	2,000 万枚 [Sh]	[第 8 回国体	1953.10.22.	200 万組]
「駒沢体育館 (50 円)」	1964.10.10.	2,000 万枚 [Sh]	・「ラグビー (5 円)」	1953.10.22.	200 万枚 [Sg]
小型シート (タトゥ付き) (140 円)	1964.10.10.	400 万枚 [Sh]	・「柔道 (5 円)」	1953.10.22.	200 万枚 [Sg]

6. 国体 National Athletic Meet (1948 年～ [昭和 23 年～])

・「切手名」	発行年月日	発行枚数			
			[第 9 回国体	1954. 8.22.	250 万組]
[第 3 回国体 (水泳)	1948. 9. 9.]	・「卓球 (5 円)」	1954. 8.22.	250 万枚 [Sg]
・「水泳 (5 円)」	1948. 9. 9.	240 万枚 [Sg]	・「弓道 (5 円)」	1954. 8.22.	250 万枚 [Sg]
[第 3 回国体	1948.10.29.	200 万組]	[第 10 回国体	1955.10.30.	300 万組]
・「ランナー (5 円)」	1948.10.29.	200 万枚 [Sg]	・「ロードレース (5 円)」	1955.10.30.	300 万枚 [Sg]
・「走り高とび (5 円)」	1948.10.29.	200 万枚 [Sg]	・「マスゲーム (5 円)」	1955.10.30.	300 万枚 [Sg]
・「野球 (5 円)」	1948.10.29.	200 万枚 [Sg]			
・「自転車 (5 円)」	1948.10.29.	200 万枚 [Sg]	[第 11 回国体	1956.10.28.	400 万組]
			・「走り巾とび (5 円)」	1956.10.28.	400 万枚 [Sg]
[第 4 回国体 (冬季)	1949]	・「バスケットボール (5 円)」	1956.10.28.	400 万枚 [Sg]
・「スケート (5 円)」	1949. 1.27.	300 万枚 [Sg]			
・「スキー (5 円)」	1949. 3. 3.	300 万枚 [Sg]	[第 12 回国体	1957.10.26.	600 万組]
			・「段違い平行棒 (5 円)」	1957.10.26.	600 万枚 [Sg]
[第 4 回国体 (水泳)	1949. 9.15.]	・「ボクシング (5 円)」	1957.10.26.	600 万枚 [Sg]
・「水泳 (8 円)」	1949. 9.15.	300 万枚 [Sg]			
			[第 13 回国体	1958.10.19.	1,500 万組]
[第 4 回国体	1949.10.30.	200 万組]	・「バドミントン (5 円)」	1958.10.19.	1,500 万枚 [Sg]
・「槍投げ (8 円)」	1949.10.30.	200 万枚 [Sg]	・「重量あげ (5 円)」	1958.10.19.	1,500 万枚 [Sg]
・「ヨット (8 円)」	1949.10.30.	200 万枚 [Sg]			
・「リレー (8 円)」	1949.10.30.	200 万枚 [Sg]	[第 14 回国体	1959.10.25.	1,000 万組]
・「テニス (8 円)」	1949.10.30.	200 万枚 [Sg]	・「ハンマー投げ (5 円)」	1959.10.25.	1,000 万枚 [Sg]
			・「マスゲーム (5 円)」	1959.10.25.	1,000 万枚 [Sg]
			[第 15 回国体	1960.10.23.	800 万組]
			・「剣道 (5 円)」	1960.10.23.	800 万枚 [Sg]
			・「鞍馬 (5 円)」	1960.10.23.	800 万枚 [Sg]

〔第16回国体〕	1961.10. 8.	800万組
・「鉄棒 (5円)」	1961.10. 8.	800万枚 [Sg]
・「漕艇 (5円)」	1961.10. 8.	800万枚 [Sg]

〔第17回国体〕	1962.10.21.	1,000万組
・「射撃 (5円)」	1962.10.21.	1,000万枚 [Sh]
・「ソフトボール (5円)」	1962.10.21.	1,000万枚 [Sh]

〔第18回国体〕	1963.10.27.	1,400万組
・「すもう (5円)」	1963.10.27.	1,400万枚 [Sh]
・「床運動 (5円)」	1963.10.27.	1,400万枚 [Sh]

〔第19回国体〕	1964. 6. 6.	2,200万組
・「ハンドボール (5円)」	1964. 6. 6.	2,200万枚 [Sh]
・「平均台 (5円)」	1964. 6. 6.	2,200万枚 [Sh]

〔第20回国体〕	1965.10.24.	2,500万組
・「鞍馬 (5円)」	1965.10.24.	2,500万枚 [Sh]
・「競歩 (5円)」	1965.10.24.	2,500万枚 [Sh]

〔第21回国体〕	1966.10.23.	1,750万組
・「三段とび (7円)」	1966.10.23.	1,750万枚 [Sh]
・「クレー射撃 (7円)」	1966.10.23.	1,750万枚 [Sh]

〔第22回国体〕	1967.10.22.	1,800万枚
・「選手とさくらそう (15円)」	1967.10.22.	1,800万枚 [Sh]

〔第23回国体〕	1968.10. 1.	1,800万枚
・「選手とすいせん (15円)」	1968.10. 1.	1,800万枚 [Sh]

〔第24回国体〕	1969.10.26.	1,950万枚
・「ラグビーと「つばき」 (15円)」	1969.10.26.	1,950万枚 [Sh]

7. お祭りシリーズ Festival series (1964年～65年 〔昭和39年～40年〕)

「切手名」	発行年月日	発行枚数
・「高山祭 (10円)」	1964. 4.15.	2,300万枚 [Sh]
・「祇園祭 (10円)」	1964. 7.15.	2,800万枚 [Sh]
・「相馬野馬追 (10円)」	1965. 7.16.	3,000万枚 [Sh]
・「秩父祭 (10円)」	1965.12. 3.	3,000万枚 [Sh]

8. 国際文通週間 International Letter Writing Week (1958年〔昭和33年〕～)

「切手名」	発行年月日	発行枚数
・「京師 (安藤広重) (24円)」	1958.10. 5.	800万枚 [Sg]
・「桑名 (安藤広重) (30円)」	1959.10. 4.	800万枚 [Sg]
・「蒲原 (安藤広重) (30円)」	1960.10. 9.	500万枚 [Sg]
・「箱根 (安藤広重) (30円)」	1961.10. 8.	500万枚 [Sg]
・「日本橋 (安藤広重) (40円)」	1962.10. 7.	500万枚 [Sg]
・「神奈川沖浪裏 (葛飾北斎) (40円)」	1963.10. 6.	750万枚 [Sh]
・「保土ヶ谷 (葛飾北斎) (40円)」	1964.10. 4.	850万枚 [Sh]
・「三坂水面 (葛飾北斎) (40円)」	1965.10. 6.	1,200万枚 [Sh]
・「関谷の里 (葛飾北斎) (50円)」	1966.10. 6.	900万枚 [Sh]
・「甲州かじか沢 (葛飾北斎) (50円)」	1967.10. 6.	800万枚 [Sh]
・「不二見原 (葛飾北斎) (50円)」	1968.10. 7.	900万枚 [Sh]
・「甲州三島越 (葛飾北斎) (50円)」	1969.10. 7.	900万枚 [Sh]

9. 魚介シリーズ Fish and Shell series (1966年～ 67年〔昭和41年～42年〕)

「切手名」	発行年月日	発行枚数
・「いせえび (10円)」	1966. 1.31.	2,800万枚 [Sh]
・「こい (10円)」	1966. 2.28.	2,800万枚 [Sh]
・「まだい (10円)」	1966. 3.25.	2,800万枚 [Sh]
・「かつお (10円)」	1966. 5.16.	3,000万枚 [Sh]
・「あゆ (10円)」	1966. 6. 1.	3,000万枚 [Sh]
・「うなぎ (15円)」	1966. 8. 1.	2,800万枚 [Sh]
・「まさば (15円)」	1966. 9. 1.	2,800万枚 [Sh]
・「さけ (15円)」	1966.12. 1.	2,800万枚 [Sh]
・「ぶり (15円)」	1967. 2.10.	2,600万枚 [Sh]
・「とらふぐ (15円)」	1967. 3.10.	2,600万枚 [Sh]
・「するめいか (15円)」	1967. 6.30.	2,400万枚 [Sh]
・「さざえ (15円)」	1967. 7.25.	2,400万枚 [Sh]

10. 第1次国宝シリーズ 1st National Treasures series (1967年～69年〔昭和42年～44年〕)

「切手名」	発行年月日	発行枚数
飛鳥時代		
・「くだらかんのん ⁽²⁸⁾ (15円)」	1967.11. 1.	2,200万枚 [Sh]
・「みろくぼさつ ⁽²⁹⁾ (15円)」	1967.11. 1.	2,200万枚 [Sh]
・「法隆寺 ⁽³⁰⁾ (50円)」	1967.11. 1.	1,000万枚 [Sh]

奈良時代

・「あしゆら ⁽³¹⁾ (15円)」	1968. 2. 1.	2,200万枚 [Sh]
・「がっこうぶつ ⁽³²⁾ (15円)」	1968. 2. 1.	2,200万枚 [Sh]
・「吉祥天 ⁽³³⁾ (50円)」	1968. 2. 1.	1,000万枚 [Sh]

平安時代

・「手箱 ⁽³⁴⁾ (15円)」	1968. 6. 1.	2,000万枚 [Sh]
・「しぎさんえんぎ ⁽³⁵⁾ (15円)」	1968. 6. 1.	2,000万枚 [Sh]
・「ふけんぼさつ ⁽³⁶⁾ (50円)」	1968. 6. 1.	800万枚 [Sh]

鎌倉時代

・「源頼朝像 ⁽³⁷⁾ (15円)」	1968. 9. 2.	2,000万枚 [Sh]
・「平治物語 ⁽³⁸⁾ (15円)」	1968. 9. 2.	2,000万枚 [Sh]
・「よろい ⁽³⁹⁾ (50円)」	1968. 9. 2.	800万枚 [Sh]

室町時代

・「銀閣 ⁽⁴⁰⁾ (15円)」	1969. 2.10.	2,100万枚 [Sh]
・「八角三重塔 ⁽⁴¹⁾ (15円)」	1969. 2.10.	2,100万枚 [Sh]
・「秋冬山水図(雪舟) (50円)」	1969. 2.10.	850万枚 [Sh]

桃山時代

・「姫路城 (15円)」	1969. 7.21.	2,100万枚 [Sh]
・「松林図(長谷川等伯) (15円)」	1969. 7.21.	2,100万枚 [Sh]
・「桧図(狩野永徳) (50円)」	1969. 7.21.	900万枚 [Sh]

江戸時代

・「白梅図(尾形光琳) (15円)」	1969. 9.25.	1,250万組 [Sh]
・「紅梅図(尾形光琳) (15円)」	1969. 9.25.	1,250万組 [Sh]
・「十便図 ⁽⁴²⁾ (池の大雅) (15円)」	1969. 9.25.	2,200万枚 [Sh]
・「きじ香炉(野々村仁清) ⁽⁴³⁾ (50円)」	1969. 9.25.	900万枚 [Sh]

11. 季節の行事シリーズ Season's folklore series

(1962年～63年 [昭和37年～38年])

切手名	発行年月日	発行枚数
・「ひな祭 (10円)」	1962. 3. 3.	800万枚 [Sg]
・「七夕 (10円)」	1962. 7. 7.	1,000万枚 [Sg]
・「七五三 (10円)」	1962.11.15.	1,000万枚 [Sg]
・「節分 (10円)」	1963. 2. 3.	1,000万枚 [Sg]

12. 観光地百選シリーズ Tourist Promotion Series

(1951年～53年 [昭和26年～28年])

・切手名・英文切手名 (発行年)
「図柄説明 (額面)」 発行年月日 発行枚数[Sg]or[Sh]⁽⁴⁴⁾

・蔵王山 Zao San (1951年 [昭和26年])		
「樹氷とスキーヤー (8円)」	1951. 2.15.	500万枚 [Sg]
「樹氷とスキーヤー (24円)」	1951. 2.15.	50万枚 [Sg]
・日本平 Nihon Daira (1951年 [昭和26年])		
「茶つみ (8円)」	1951. 4. 2.	500万枚 [Sg]
「日本平より富士 (24円)」	1951. 4. 2.	50万枚 [Sg]
・箱根温泉 Hakone Onsen (1951年 [昭和26年])		
「大涌谷 (8円)」	1951. 5.25.	450万枚 [Sg]
「芦ノ湖 (24円)」	1951. 5.25.	100万枚 [Sg]
・赤目四十八滝 Akame Shiju-Hattaki (1951年 [昭和26年])		
「千手滝 (8円)」	1951. 6. 1.	450万枚 [Sg]
「にない滝 (24円)」	1951. 6. 1.	100万枚 [Sg]
・和歌浦・友ヶ島 Wakanoura-Tomogashima (1951年 [昭和26年])		
「和歌浦観海閣 (8円)」	1951. 6.25.	450万枚 [Sg]
「沖ノ島野奈浦 (24円)」	1951. 6.25.	100万枚 [Sg]
・宇治川 Ujigawa (1951年 [昭和26年])		
「宇治川ライン (8円)」	1951. 8. 1.	450万枚 [Sg]
「宇治橋 (24円)」	1951. 8. 1.	100万枚 [Sg]
・長崎 Nagasaki (1951年 [昭和26年])		
「大浦天主堂 (8円)」	1951. 9.15.	450万枚 [Sg]
「崇福寺山門 (24円)」	1951. 9.15.	100万枚 [Sg]
・菅沼・丸沼 Sugenuma-Marunuma (1951年 [昭和26年])		
「丸沼 (8円)」	1951.10. 1.	450万枚 [Sg]
「菅沼 (24円)」	1951.10. 1.	100万枚 [Sg]
・昇仙峡 Shosenkyo (1951年 [昭和26年])		
「覚円峰 (8円)」	1951.10.15.	450万枚 [Sg]
「長潭橋 ⁽⁴⁵⁾ (24円)」	1951.10.15.	100万枚 [Sg]
・錦帯橋 Kintai Bashi (1953年 [昭和28年])		
「広重の版画 (10円)」	1953. 5. 3.	450万枚 [Sg]
「錦帯橋 (24円)」	1953. 5. 3.	100万枚 [Sg]

13. 日本三景シリーズ Famous scenic trio of Japan (1960年 [昭和35年])

・「切手名」 発行年月日 発行枚数

- ・「松島五大堂 (10円)」 1960.3.15. 800万枚 [Sg]
- ・「天橋立 (10円)」 1960.7.15. 800万枚 [Sg]
- ・「宮島⁽⁴⁶⁾ (10円)」 1960.11.15. 800万枚 [Sg]

- 「七面山より (14円)」 500万枚 [Sg]
- 「山中湖より (24円)」 500万枚 [Sg]
- ・阿寒 1950.7.15.
 - 「雌阿寒岳より (2円)」 300万枚 [Sg]
 - 【「ぐっちゃろ湖 (5円)」 300万枚 [Sg]
 - 【「阿寒富士 (14円)」 50万枚 [Sg]
 - 【「摩周湖 (24円)」 50万枚 [Sg]

14. 名園シリーズ Famous park series (1966年～67年 [昭和41年～42年])

・「切手名」 発行年月日 発行枚数

- ・「偕楽園 (10円)」 1966.2.25. 2,400万枚 [Sh]
- ・「後楽園 (15円)」 1966.11.3. 2,200万枚 [Sh]
- ・「兼六園 (15円)」 1967.1.25. 2,200万枚 [Sh]

- ・十和田 1951.7.20.
 - 「おいらせ (2円)」 300万枚 [Sg]
 - 「十和田湖 (8円)」 300万枚 [Sg]
 - 「観湖台より (14円)」 50万枚 [Sg]
 - 「八甲田連峰 (24円)」 50万枚 [Sg]

15. 国立公園切手 National Park Stamps (1936年～74年 [昭和11年～49年])

(第1次国立公園シリーズ 1st National Park Series)

・「切手名」 発行年月日 発行枚数

- ・富士箱根 1936.7.10.
 - 【「暁の富士 (1銭5厘)」 120万枚 [Sg]
 - 「芦ノ湖より (3銭)」 65万枚 [Sg]
 - 【「三ッ峠より (6銭)」 25万枚 [Sg]
 - 【「東海道の富士 (10銭)」 25万枚 [Sg]

- ・日光 1938.12.25.
 - 「中禅寺湖 (2銭)」 400万枚 [Sg]
 - 「華厳の滝 (4銭)」 250万枚 [Sg]
 - 【「神橋 (10銭)」 50万枚 [Sg]
 - 【「あやめ平 (20銭)」 50万枚 [Sg]

- ・吉野熊野 1949.4.10.
 - 【「獅子岩 (2円)」 500万枚 [Sg]
 - 「大峰山 (5円)」 500万枚 [Sg]
 - 「とろ八丁 (10円)」 100万枚 [Sg]
 - 「橋杭岩 (16円)」 100万枚 [Sg]

- ・第2次富士箱根 1949.7.15.
 - 「三ッ峠より (2円)」 500万枚 [Sg]
 - 【「河口湖より (8円)」 500万枚 [Sg]

- ・磐梯朝日 1952.10.18.
 - 「吾妻小富士 (5円)」 300万枚 [Sg]
 - 【「大朝日岳 (10円)」 300万枚 [Sg]
 - 【「磐梯山 (14円)」 100万枚 [Sg]
 - 【「月山 (24円)」 100万枚 [Sg]

- ・支笏洞爺 1953.7.25.
 - 「支笏湖 (5円)」 400万枚 [Sg]
 - 「洋てい山 (10円)」 400万枚 [Sg]

- ・伊勢志摩 1953.10.2.
 - 「二見ヶ浦 (5円)」 400万枚 [Sg]
 - 「波切海岸 (10円)」 400万枚 [Sg]

- ・雲仙 1953.11.20.
 - 「ゴルフ場 (5円)」 400万枚 [Sg]
 - 「雲仙岳 (10円)」 400万枚 [Sg]

- ・上信越高原 1954.6.25.
 - 【「浅間山 (5円)」 400万枚 [Sg]
 - 「谷川岳 (10円)」 400万枚 [Sg]

- ・秩父多摩 1955.3.1.
 - 「奥多摩溪流 (5円)」 400万枚 [Sg]

「奥秩父連山 (10円)」		400万枚 [Sg]	・伊勢志摩	1964. 3.15.	
			「宇治橋 (5円)」		1,750万枚 [Sh] [Sg]
・陸中海岸	1955. 9.30.		「鳥羽湾 (10円)」		1,750万枚 [Sh] [Sg]
「北山崎 (5円)」		400万枚 [Sg]			
【「浄土ヶ浜 (10円)」		400万枚 [Sg]	・大山隠岐	1965. 1.20.	
			「大山 (5円)」		2,500万枚 [Sh]
・西海	1956.10. 1.		「隠岐浄土ヶ浦 (10円)」		2,400万枚 [Sh]
「大瀬崎 (5円)」		400万枚 [Sg]			
「九十九島 (10円)」		400万枚 [Sg]	・上信越高原	1965. 3.15.	
			「清津峡 (5円)」		2,500万枚 [Sh]
(第2次国立公園シリーズ 2 nd National Park Series)			「野尻湖 (10円)」		2,400万枚 [Sh]
・「切手名」	発行年月日	発行枚数	・阿蘇	1965. 6.15.	
			「中岳 (5円)」		2,500万枚 [Sh]
・富士箱根伊豆	1962. 1.16.		「阿蘇五岳 (10円)」		2,450万枚 [Sh]
「芦の湖 (5円)」		800万枚 [Sg]			
「石廊崎 (5円)」		800万枚 [Sg]	・知床	1965.11.15.	
「三ッ峠 (10円)」		800万枚 [Sg]	「硫黄山 (5円)」		2,550万枚 [Sh]
「大瀬崎 (10円)」		800万枚 [Sg]	「羅臼岳 (10円)」		2,500万枚 [Sh]
・日光	1962. 9. 1.		・南アルプス	1967. 7.10.	
「至仏山 (5円)」		900万枚 [Sg]	「北岳と駒ガ岳 (7円)」		1,600万枚 [Sh]
「茶臼岳 (5円)」		900万枚 [Sg]	「赤石岳・聖岳・東岳 (15円)」		1,800万枚 [Sh]
「中禅寺湖 (10円)」		900万枚 [Sg]			
「潜竜峡 (10円)」		900万枚 [Sg]	・秩父多摩	1967.11.27.	
			「雲取山 (7円)」		1,600万枚 [Sh]
・雲仙天草	1963. 2.15.		「秩父湖 (15円)」		1,800万枚 [Sh]
「普賢岳 (5円)」		1,000万枚 [Sg]			
「天草松島 (10円)」		1,000万枚 [Sg]	・十和田八幡平	1968. 9.16.	
			「岩手山 (7円)」		1,500万枚 [Sh]
・白山	1963. 3. 1.		「十和田湖 (15円)」		1,700万枚 [Sh]
「翠ヶ池 (5円)」		1,000万枚 [Sg]			
「白山連峰 (10円)」		1,000万枚 [Sg]	・霧島屋久	1968.11.20.	
			「高千穂の峰 (7円)」		1,500万枚 [Sh]
・磐梯朝日	1963. 5.25.		「屋久島本富岳 (15円)」		1,700万枚 [Sh]
「以東岳 (5円)」		1,100万枚 [Sh] [Sg]			
「磐梯山 (10円)」		1,100万枚 [Sh] [Sg]	・阿寒	1969. 8.25.	
			「雄阿寒岳 (7円)」		1,750万枚 [Sh]
・瀬戸内海	1963. 8.20.		「硫黄山 (15円)」		1,850万枚 [Sh]
「鷲羽山より (5円)」		1,400万枚 [Sh] [Sg]			
「鳴門の渦潮 (10円)」		1,400万枚 [Sh] [Sg]	・陸中海岸	1969.11.20.	
			「北山崎 (7円)」		1,800万枚 [Sh]
・大雪山	1963. 9. 1.		「碓石海岸 (15円)」		1,900万枚 [Sh]
「しかりべつ湖 (5円)」		1,400万枚 [Sh] [Sg]			
「黒岳 (10円)」		1,400万枚 [Sh] [Sg]			

・【吉野熊野 1970. 4.30.
「吉野山の桜 (7円)」 1,900 万枚
「那智の滝 (15円)」 2,000 万枚】

・錦江湾 1962. 4.30.
「桜島 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・金剛生駒 1962. 5.15.
「金剛山 (10円)」 800 万枚 [Sg]

16. 国定公園切手 Quasi-National Park Stamps (1958年～73年 [昭和33年～48年])

・「切手名」 発行年月日 発行枚数

・水郷 1962. 6. 1.
「水郷 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・佐渡弥彦 1958. 8.20.
「佐渡おけさ (10円)」 2,000 万枚 [Sg]
「弥彦山 (10円)」 2,000 万枚 [Sg]

・石鎚 1963. 1.11.
「石鎚山 (10円)」 1,000 万枚 [Sg]

・秋吉台 1959. 3.16.
「カルスト高原 (10円)」 1,500 万枚 [Sg]
「秋芳洞 (10円)」 1,500 万枚 [Sg]

・玄海 1963. 3.15.
「芥屋の大門 (10円)」 1,000 万枚 [Sg]

・耶馬日田英彦山 1959. 9.25.
「耶馬溪 (10円)」 1,200 万枚 [Sg]
「水郷日田 (10円)」 1,200 万枚 [Sg]

・伊豆七島 1963.12.10.
「八丈富士 (10円)」 1,500 万枚 [Sh]

・三河湾 1960. 3.20.
「竹島 (10円)」 1,000 万枚 [Sg]

・若狭湾 1964. 1.25.
「高浜海岸 (10円)」 1,550 万枚 [Sh] [Sg]

・網走 1960. 6.15.
「原生花園 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・日南海岸 1964. 2.20.
「堀切峠より (10円)」 1,560 万枚 [Sh]

・足摺 1960. 8. 1.
「足摺岬 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・ニセコ積丹 1965. 2.15.
「ニセコアンヌプリ (10円)」 2,400 万枚 [Sh]

・南房総 1961. 3.15.
「白浜 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・蔵王 1966. 3.15.
「蔵王の火口湖 (10円)」 2,400 万枚 [Sh]

・琵琶湖 1961. 4.25.
「びわ湖夜景 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・室戸阿南 1966. 3.22.
「室戸岬 (10円)」 2,150 万枚 [Sh]
「阿南海岸 (10円)」 2,150 万枚 [Sh]

・山陰海岸 1961. 8.15.
「鳥取砂丘 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・祖母傾 1967.12.20.
「祖母山 (15円)」 1,800 万枚 [Sh]
「高千穂峡 (15円)」 1,600 万枚 [Sh]

・大沼 1961. 9.15.
「大沼と駒ヶ岳 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・八ヶ岳中信高原 1968. 3.21.
「八ヶ岳 (15円)」 1,600 万枚 [Sh]
「蓼科山 (15円)」 1,600 万枚 [Sh]

・北長門 1962. 2.15.
「青海島 (10円)」 800 万枚 [Sg]

・利尻礼文 1968. 5.10.
「礼文から利尻島 (15円)」 1,800 万枚 [Sh]

・飛騨木曾川	1968. 7.20.	
「日本ライン下り (15 円)」		1,700 万枚 [Sh]
「犬山城附近 (15 円)」		1,700 万枚 [Sh]
・越前加賀	1969. 1.27.	
「呼鳥門附近 (15 円)」		1,800 万枚 [Sh]
・鳥海	1969. 2.25.	
「飛鳥から鳥海山 (15 円)」		1,800 万枚 [Sh]
・高野竜神	1969. 3.25.	
「高野山 (15 円)」		1,700 万枚 [Sh]
「ごまだん山 (15 円)」		1,700 万枚 [Sh]
・下北半島	1969. 7.15.	
「仏ヶ浦 (15 円)」		1,900 万枚 [Sh]

17. 【文化人シリーズ⁽⁴⁷⁾ Cultural leaders series (1949 年～ 52 年 [昭和 24 年～ 27 年])】

「切手名」	発行年月日	発行枚数
・「野口英世 ⁽⁴⁸⁾ (8 円)」	1949.11. 3.	3,000 万枚 [Sg]
・「福沢諭吉 ⁽⁴⁹⁾ (8 円)」	1950. 2. 3.	3,000 万枚 [Sg]
・「夏目漱石 ⁽⁵⁰⁾ (8 円)」	1950. 4.10.	3,000 万枚 [Sg]
・「坪内逍遙 ⁽⁵¹⁾ (8 円)」	1950. 5.23.	3,000 万枚 [Sg]
・「市川團十郎 ⁽⁵²⁾ (8 円)」	1950. 9.13.	1,000 万枚 [Sg]
・「新島襄 ⁽⁵³⁾ (8 円)」	1950.11.22.	1,000 万枚 [Sg]
・「狩野芳崖 ⁽⁵⁴⁾ (8 円)」	1951. 2.27.	1,000 万枚 [Sg]
・「内村鑑三 ⁽⁵⁵⁾ (8 円)」	1951. 3.23.	1,000 万枚 [Sg]
・「樋口一葉 ⁽⁵⁶⁾ (8 円)」	1951. 4.10.	1,000 万枚 [Sg]
・「森鷗外 ⁽⁵⁷⁾ (8 円)」	1951. 7. 9.	1,000 万枚 [Sg]
・「正岡子規 ⁽⁵⁸⁾ (8 円)」	1951. 9.19.	1,000 万枚 [Sg]
・「菱田春草 ⁽⁵⁹⁾ (8 円)」	1951. 9.21.	1,000 万枚 [Sg]
・「西周 ⁽⁶⁰⁾ (10 円)」	1952. 1.31.	1,000 万枚 [Sg]
・「梅謙次郎 ⁽⁶¹⁾ (10 円)」	1952. 8.25.	1,000 万枚 [Sg]
・「木村栄 ⁽⁶²⁾ (10 円)」	1952. 9.26.	1,000 万枚 [Sg]
・「新渡戸稲造 ⁽⁶³⁾ (10 円)」	1952.10.16.	1,000 万枚 [Sg]
・「寺田寅彦 ⁽⁶⁴⁾ (10 円)」	1952.11. 3.	1,000 万枚 [Sg]
・「岡倉天心 ⁽⁶⁵⁾ (10 円)」	1952.11. 3.	1,000 万枚 [Sg]

18. その他

切手名・英文切手名 (発行年)	発行年月日	発行枚数[Sg]or[Sh] ⁽⁶⁶⁾
「図柄説明 (額面)」	発行年月日	発行枚数[Sg]or[Sh] ⁽⁶⁶⁾
・大正大礼 Enthronement of Emperor Taisho(1915 年 [大正 4 年])		
「式典のかんむり (1 銭 5 厘)」	1915.11.10.	2,270 万枚 [Sg]
・昭和立太子礼 Nomination of Heir Apparent(1916 年 [大正 5 年])		
「おしどり模様 (1 銭 5 厘)」	1916.11. 3.	647.2 万枚 [Sg]
・平和 Restoration of Peace (1919 年 [大正 8 年])		
「はと (1 銭 5 厘)」	1919. 7. 1.	1,147 万枚 [Sg]
・昭和天皇 Enthronement of Emperor Hirohito(1928 年 [昭和 3 年])		
「ほうおう (1 銭 5 厘)」	1928.11.10.	2,548.5 万枚 [Sg]
・神宮式年遷宮 Rebuilding of Ise Shrine (1929 年 [昭和 4 年])		
「伊勢神宮 (1 銭 5 厘)」	1929.10. 2.	342 万枚 [Sg]
・赤十字会議 International Red Cross Conference(1934 年 [昭和 9 年])		
「日本赤十字社章 (1 銭 5 厘)」	1934.10. 1.	238.9 万枚 [Sg]
・満州国皇帝御来訪 Manchukuo Emperor's Visit to Japan (1935 年 [昭和 10 年])		
「赤坂離宮 (3 銭)」	1935. 4. 2[20].	440.5 万枚 [Sg]
・議事堂竣工 Completion of Diet Building(1936 年 [昭和 11 年])		
「議事堂全景 (1 銭 5 厘)」	1936.11. 7.	529 万枚 [Sg]
「皇室用階段 (3 銭)」	1936.11. 7.	432 万枚 [Sg]
・愛国募金 Patriotic Aviation Fund (1937 年 [昭和 12 年])		
「日本アルプスとダグラス機 (2+2 銭)」	1937. 6. 1.	2,358 万枚 [Sg]
「日本アルプスとダグラス機 (3+2 銭)」	1937. 6. 1.	694 万枚 [Sg]
「日本アルプスとダグラス機 (4+2 銭)」	1937. 6. 1.	2,014 万枚 [Sg]
・赤十字条約 75 年 75 th Anniv. Red Cross Treaty(1939 年 [昭和 14 年])		
「地球と赤十字 (2 銭)」	1939.11.15.	222 万枚 [Sg]
・紀元 2600 年 2600 th Anniv. of Founding of Japan(1940 年 [昭和 15 年])		
「金鷄 (きんし) (2 銭)」	1940.[2.11.]	345 万枚 [Sg]
「鮎といつべ (10 銭)」	1940.[2.11.]	57 万枚 [Sg]

- ・教育勅語50年 Imperial Edict on Education(1940年 [昭和15年])
「勅語下賜の図 (2 銭)」 1940.10.25. 582 万枚 [Sg]
「忠孝の文字 (4 銭)」 1940.10.25. 559 万枚 [Sg]
- ・満州建国10年 10th Anniv. of Founding of Manchukuo (1942年 [昭和17年])
「(満州建国) (2 銭)」 1942. [3.10.] 500 万枚 [Sg]
- ・鉄道70年 70th Anniv. of the Railway in Japan(1942年 [昭和17年])
「C59 型機関車 (5 銭)」 1942.10.14 500 万枚 [Sg]
- ・大東亜戦争1年 1st Anniv. of the Pacific War (1942年 [昭和17年])
「戦車の進撃 (2+1 銭)」 1942.12. 8. 284 万枚 [Sg]
「真珠湾攻撃 (5+2 銭)」 1942.12. 8. 283 万枚 [Sg]
- ・関東神宮鎮座 Dedication of Kwantung Shrine(1944年 [昭和19年])
「関東神宮と地図 (3 銭)」 1944.10. 1. 75 万枚 [Sg]
「関東神宮と地図 (7 銭)」 1944.10. 1. 75 万枚 [Sg]
- ・郵便創始75周年 75th Anniv. of the Postal Services(1946年 [昭和21年])
「通信の象徴 (1 円)」 1946.12.12. 50 万枚 [Sg]
- ・日本国憲法 Adoption of New Constitution(1947年 [昭和22年])
「5月の花束 (1 円)」 1947. 5. 3 1,040 万枚 [Sg]
- ・司法保護 Relief of Ex-convicts Day (1947年 [昭和22年])
「すずらんと手 (2 円)」 1947. 9.13. 300 万枚 [Sg]
- ・全国緑化 National Land Afforestation Campaign(1948年 [昭和23年])
「樹木 (1 円 20 銭)」 1948. 4. 1. 279 万枚 [Sg]
- ・教育復興 Restoration of Educational System(1948年 [昭和23年])
「男女学童 (1 円 20 銭)」 1948. 5. 3. 525 万枚 [Sg]
- ・競馬法25年 Horse Race Law (1948年 [昭和23年])
「競馬 (5 円)」 1948. 6. 6. 510 万枚 [Sg]
- ・アルコール専売10年 Alcohol Monopoly Law(1948年 [昭和23年])
「アルコール蒸留塔 (5 円)」 1948. 9. 14. 240 万枚 [Sg]
- ・赤十字・共同募金 Red Cross & Community Chest Fund (1948年 [昭和23年])
「看護婦 (5+2 円 50 銭)」 1948. 10. 1. 240 万枚 [Sg]
「やまがら (5+2 円 50 銭)」 1948. 10. 1. 240 万枚 [Sg]
- ・【別府観光 Beppu Spa (1949年 [昭和24年])
「別府港と高崎山 (2 円)」 1949. 3.10. 500 万枚 [Sg]
「別府港と高崎山 (5 円)」 1949. 3.10. 500 万枚 [Sg]
- ・【日本貿易博 Japan Foreign Trade Fair (1949年 [昭和24年])
「博覧会記念塔 (5 円)」 1949. 3.15. 300 万枚 [Sg]
「博覧会記念塔 (5 円)」 1949. 3.15. 200 万枚 [Sg]
- ・【岡山博覧会 Okayama Exhibition (1949年 [昭和24年])
「瀬戸内海風景 (10 円)」 1949. 3.20. 50 万枚 [Sg]
- ・【松山博覧会 Matsuyama Exhibition (1949年 [昭和24年])
「瀬戸内海風景 (10 円)」 1949. 3.20. 50 万枚 [Sg]
- ・【高松博覧会 Takamatsu Exhibition (1949年 [昭和24年])
「瀬戸内海風景 (10 円)」 1949. 3.20. 50 万枚 [Sg]
- ・【国土緑化 National Land Afforestation(1949年 [昭和24年])
「樹木 (5 円)」 1949. 4. 1. 300 万枚 [Sg]
- ・【長野平和博 Peace Exhibition in Nagano(1949年 [昭和24年])
「穂高岳 (16 円)」 1949. 4. 1. 50 万枚 [Sg]
- ・こどもの日 Children's Day (1949年 [昭和24年])
「こどもの笑顔 (5 円)」 1949. 5. 5. 300 万枚 [Sg]
- ・中央気象台75年 Central Meteorological Observatory (1949年 [昭和24年])
「気象台 (8 円)」 1949. 6. 1. 300 万枚 [Sg]
- ・【郵政省・電通省 Postal Ministry & Ministry of Telecommunications (1949年 [昭和24年])
「はとと無線塔 (8 円)」 1949. 6. 1. 300 万枚 [Sg]
- ・広島平和都市 Hiroshima City (1949年 [昭和24年])
「ばらをもつ乙女 (8 円)」 1949. 8. 6. 200 万枚 [Sg]
- ・長崎文化都市 Nagasaki City (1949年 [昭和24年])
「長崎名所とはと (5 円)」 1949. 8. 9. 200 万枚 [Sg]
- ・【ボーイスカウト National Boy Scout Jamboree(1949年 [昭和24年])
「ボーイスカウト (8 円)」 1949. 9.22. 300 万枚 [Sg]
- ・【新聞週間 Newspaper Week (1949年 [昭和24年])
「ペン型の紙型 (8 円)」 1949.10. 1. 300 万枚 [Sg]

- ・ UPU75年 75th Anniversary of U.P.U. (1949年 [昭和24年])
 - 「日本地図 (2円)」 1949.10.10. 300万枚 [Sg]
 - 「通信の象徴 (8円)」 1949.10.10. 300万枚 [Sg]
 - 【「日本地図 (14円)」 1949.10.10. 100万枚 [Sg]】
 - 【「通信の象徴 (24円)」 1949.10.10. 100万枚 [Sg]】
- ・ 緯度観測所 Mizusawa Latitudinal Observatory(1949年 [昭和24年])
 - 「浮遊天頂儀 (8円)」 1949.10.30. 300万枚 [Sg]
- ・ 放送25年 25th Anniv. of Broadcasting (1950年 [昭和25年])
 - 「マイクロホン (8円)」 1950.3.22. 300万枚 [Sg]
- ・ 郵政記念日 Communications Day (1950年 [昭和25年])
 - 「はととポスト (8円)」 1950.4.20. 300万枚 [Sg]
- ・ 【児童憲章 Children's Charter (1951年 [昭和26年])
 - 「児童とふたば (8円)」 1951.5.5. 300万枚 [Sg]
- ・ 平和条約 Signing of the Peace Treaty (1951年 [昭和26年])
 - 「菊の花 (2円)」 1951.9.1. 500万枚 [Sg]
 - 「国旗 (8円)」 1951.9.1. 500万枚 [Sg]
 - 【「菊の花 (24円)」 1951.9.1. 100万枚 [Sg]】
- ・ UPU加入75年 75th Anniversary of Joining U.P.U.(1952年 [昭和27年])
 - 「船と南十字星 (5円)」 1952.2.19. 300万枚 [Sg]
 - 【「地球と北斗七星 (10円)」 1952.2.19. 300万枚 [Sg]】
- ・ 【日赤創立75年 75th Anniversary of the Japanese Red Cross (1952年 [昭和27年])
 - 「赤十字とゆり (5円)」 1952.5.1. 300万枚 [Sg]
 - 「日赤看護婦 (10円)」 1952.5.1. 300万枚 [Sg]
- ・ 【東京大学75年 75th Anniversary of Tokyo University (1952年 [昭和27年])
 - 「東大安田講堂 (10円)」 1952.10.1. 300万枚 [Sg]
- ・ 【立太子礼 Nomination of Heir Apparent(1952年 [昭和27年])
 - 「きりんと菊花 (5円)」 1952.11.10. 500万枚 [Sg]
 - 「きりんと菊花 (10円)」 1952.11.10. 500万枚 [Sg]
 - 「皇太子旗 (24円)」 1952.11.10. 100万枚 [Sg]
- ・ 【電灯75年 75th Anniversary of Electric Lamp in Japan (1953年 [昭和28年])
 - 「アーク灯 (10円)」 1953.3.25. 300万枚 [Sg]
- ・ 【皇太子殿下ご帰朝 Return of Crown Prince from Visit Abroad (1953年 [昭和28年])
 - 「ほうおう (5円)」 1953.10.12. 300万枚 [Sg]
 - 「つる (10円)」 1953.10.12. 300万枚 [Sg]
- ・ 東京天文台75年 Tokyo Astronomical Observatory (1953年 [昭和28年])
 - 「大赤道儀室 (10円)」 1953.10.29. 300万枚 [Sg]
- ・ スピードスケート Men's Speed Skating Championship (1954年 [昭和29年])
 - 「スケート競技 (10円)」 1954.1.16. 200万枚 [Sg]
- ・ 国際見本市Japan International Trade Fair(1954年 [昭和29年])
 - 「輸出品の象徴 (10円)」 1954.4.10. 300万枚 [Sg]
- ・ 【レスリング選手権 Wrestling Championship(1954年 [昭和29年])
 - 「レスリング (10円)」 1954.5.22. 400万枚 [Sg]
- ・ 【電気通信連合加盟75年 75th Anniversary of Joining I.T.U. (1954年 [昭和29年])
 - 「初期の電信機 (5円)」 1954.10.13. 300万枚 [Sg]
 - 「ITU記念碑10円)」 1954.10.13. 300万枚 [Sg]
- ・ 国際商業会議所 15th Congress of I.C.C.(1955年 [昭和30年])
 - 「こいのぼり (10円)」 1955.5.16. 300万枚 [Sg]
- ・ 【卓球選手権 Table Tennis Championship(1956年 [昭和31年])
 - 「卓球 (10円)」 1956.4.2. 500万枚 [Sg]
- ・ 【柔道選手権 Judo World Championship Meet(1956年 [昭和31年])
 - 「柔道 (10円)」 1956.5.3. 500万枚 [Sg]
- ・ 世界こどもの日 World Children's Day (1956年 [昭和31年])
 - 「こどもと鯉のぼり (10円)」 1956.5.5. 600万枚 [Sg]
- ・ 【東京開都500年 Tokyo Quincentenary(1956年 [昭和31年])
 - 「皇居附近の風景 (10円)」 1956.10.1. 500万枚 [Sg]
- ・ 佐久間ダム Completion of Sakuma Dam(1956年 [昭和31年])
 - 「佐久間ダム (10円)」 1956.10.15. 500万枚 [Sg]
- ・ マナスル登頂 Conquest of Mt. Manaslu(1956年 [昭和31年])
 - 「マナスルと登山隊員 (10円)」 1956.11.3. 500万枚 [Sg]

- ・ 東海道電化 Electrification of Tokaido Line(1956年 [昭和31年])
「EF58 型と広重の「由井」(10円)」
1956.11.19. 500 万枚 [Sg]
- ・ 巡航見本市 Japan Machinery Floating Fair(1956年 [昭和31年])
「見本市船 (10円)」 1956.12.18. 500 万枚 [Sg]
- ・ 国際連合加盟 Admission of Japan to U.N.(1957年 [昭和32年])
「国連マーク (10円)」 1957. 3. 8. 500 万枚 [Sg]
- ・ 【地球観測年 International Geophysical Year(1957年 [昭和32年])
「宗谷とペンギン (10円)」1957. 7. 1. 600 万枚 [Sg]
- ・ 原子炉竣工 Completion of Nuclear Reactor(1957年 [昭和32年])
「原子炉 (10円)」 1957. 9.18. 700 万枚 [Sg]
- ・ 小河内ダム Completion of Ogochi Dam(1957年 [昭和32年])
「小河内ダム (10円)」 1957.11.26. 800 万枚 [Sg]
- ・ 【製鉄100年 Iron Manufacturing Industry(1957年 [昭和32年])
「新旧の溶鉱炉 (10円)」 1957.12. 1. 800 万枚 [Sg]
- ・ 関門トンネル Completion of Kanmon Tunnel(1958年 [昭和33年])
「トンネルの断面図 (10円)」 1958. 3. 9. 1,000 万枚 [Sg]
- ・ 日本開港100年 Centenary of Opening of Ports(1958年 [昭和33年])
「井伊大老銅像と港 (10円)」 1958. 5. 10. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 第3回アジア競技大会 3rd Asian Games 1958. 5. 24.
「国立競技場 (5円)」 3,000 万枚 [Sg]
「聖火とマーク (10円)」 3,000 万枚 [Sg]
「ランナー (14円)」 1,000 万枚 [Sg]
「ダイビング (24円)」 1,000 万枚 [Sg]
- ・ ブラジル移住50年 Japanese Emigration to Brazil(1958年 [昭和33年])
「笠戸丸と南米地図 (10円)」 1958. 6.18. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 胸部医学会議 International Medical Congress(1958年 [昭和33年])
「聴診器 (10円)」 1958. 9. 7. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 慶應義塾100年 Centenary of Keio University(1958年 [昭和33年])
「校舎と福沢諭吉 (10円)」 1958.11. 8. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 児童福祉会議 9th I.C.W. & 2nd I.S.C.C.W.(1958年 [昭和33年])
「地球と子どもたち (10円)」 1958.11.23. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ 人権宣言10年 Declaration of Human Rights(1958年 [昭和33年])
「人権のシンボル (10円)」 1958.12.10. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 児島湾堤防 Kojima Bay Reclamation Dike(1959年 [昭和34年])
「地図とトラクター (10円)」 1959. 2. 1. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ アジア文化会議 Asian Cultural Congress(1959年 [昭和34年])
「東南アジア地図 (10円)」1959. 3.27. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ 皇太子殿下ご成婚 Wedding of Crown Prince(1959年 [昭和34年])
「ひおうぎ (5円)」 1959. 4.10. 2,500 万枚 [Sg]
「皇太子ご夫妻 (10円)」 1959. 4.10. 2,500 万枚 [Sg]
「ひおうぎ (20円)」 1959. 4.10. 1,500 万枚 [Sg]
「皇太子ご夫妻 (30円)」 1959. 4.10. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ メートル法実施 Adoption of Metric System(1959年 [昭和34年])
「はかり・ます・ものさし (10円)」
1959. 6. 5. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ 赤十字思想100年 Centenary of Red Cross Concept (1959年 [昭和34年])
「看護婦の活動 (10円)」 1959. 6.24. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ 自然公園の日 Natural Parks Day (1959年 [昭和34年])
「本栖湖より富士 (10円)」 1959. 7.21. 1,500 万枚 [Sg]
- ・ 名古屋350年 350th Anniversary of Nagoya City(1959年 [昭和34年])
「金のシャチ (10円)」 1959.10. 1. 1,200 万枚 [Sg]
- ・ 【航空運送会議 15th I.A.T.A. General Meeting(1959年 [昭和34年])
「つると協会マーク (10円)」 1959.10.12. 1,000 万枚 [Sg]
- ・ 松陰100年・PTA大会 PTA Congress(1959年 [昭和34年])
「PTAマークと松陰 (10円)」 1959.10.27. 1,000 万枚 [Sg]
- ・ ガット東京総会 15th GATT Session in Tokyo(1959年 [昭和34年])
「地球 (10円)」 1959.11. 2. 1,000 万枚 [Sg]
- ・ 尾崎記念館 Ozaki Memorial Hall (1960年 [昭和35年])
「尾崎翁と時計塔 (10円)」1960. 2.25. 800 万枚 [Sg]
- ・ 奈良遷都 1250th Anniversary of Nara City(1960年 [昭和35年])
「正倉院御物 (10円)」 1960. 3.10. 1,000 万枚 [Sg]

- ・日米修好100年 Centennial of Japan-U.S. Treaty(1960年 [昭和35年])
「咸臨丸 (10円)」 1960. 5.17. 1,000万枚 [Sg]
【「大統領の引見 (30円)」 1960. 5.17. 700万枚 [Sg]】
- ・鳥類保護会議 Congress of Bird Preservation(1960年 [昭和35年])
「天然記念物「とき」(10円)」 1960. 5.24. 800万枚 [Sg]
- ・国際放送25年 25th Anniversary of Radio Japan(1960年 [昭和35年])
「地球と電波 (10円)」 1960. 6. 1. 800万枚 [Sg]
- ・ハワイ移住75年 Japanese Emigration to Hawaii(1960年 [昭和35年])
「にじのかけ橋 (10円)」 1960. 8.20. 800万枚 [Sg]
- ・【航空50年 50th Anniversary of Aviation in Japan(1960年 [昭和35年])
「新旧の飛行機 (10円)」 1960. 9.20. 800万枚 [Sg]】
- ・列国議会同盟会議 49th Inter-parliamentary Conference (1960年 [昭和35年])
【「議会議席 (5円)」 1960. 9.27. 800万枚 [Sg]】
「赤富士 (葛飾北斎) (10円)」 1960. 9.27. 800万枚 [Sg]
- ・岡山天体観測所 Okayama Astro-physical Observatory (1960年 [昭和35年])
「観測所 (10円)」 1960.10.19. 800万枚 [Sg]
- ・【南極探検50年 Lt. Shirase's Antarctic Expedition(1960年 [昭和35年])
「白瀬中尉と南極地図 (10円)」
1960.11.29. 800万枚 [Sg]】
- ・議会開設70年 70th Anniversary of Japanese Diet(1960年 [昭和35年])
「議事堂と星 (5円)」 1960.12.24. 800万枚 [Sg]
「議会開院式 (10円)」 1960.12.24. 800万枚 [Sg]
- ・【郵便90年 90th Anniversary of Postal Services(1961年 [昭和36年])
「前島密 (10円)」 1961. 4.20. 800万枚 [Sg]】
- ・国際ロータリー 52nd Rotary International Convention (1961年 [昭和36年])
「世界の人々とマーク (10円)」
1961. 5.29. 800万枚 [Sg]
- ・【愛知用水 Opening of Aichi Irrigation (1961年 [昭和36年])
「用水の恩恵 (10円)」 1961. 7. 7. 800万枚 [Sg]】
- ・標準時75年 Japan Standard Time (1961年 [昭和36年])
「地球上の子午線 (10円)」 1961. 7.12. 800万枚 [Sg]
- ・国立国会図書館 New Building for Diet Library(1961年 [昭和36年])
「本と図書館 (10円)」 1961.11. 1. 800万枚 [Sg]
- ・北陸トンネル Completion of Hokuriku Tunnel(1962年 [昭和37年])
「トンネル内の列車 (10円)」 1962. 6.10. 800万枚 [Sg]
- ・アジア・ジャンボリー Asian Boy Scout Jamboree(1962年 [昭和37年])
「少年団帽子と地図 (10円)」 1962. 8. 3. 1,000万枚 [Sg]
- ・若戸大橋 Completion of Wakato Bridge(1962年 [昭和37年])
「若戸大橋 (10円)」 1962. 9.26. 900万枚 [Sg]
- ・北九州市発足 Kitakyushu City (1963年 [昭和38年])
「地図と鳩と船 (10円)」 1963. 2.10. 1,000万枚 [Sg]
- ・飢餓救済 Freedom from Hunger (1963年 [昭和38年])
「地球とマーク (10円)」 1963. 3.21. 1,100万枚 [Sg]
- ・赤十字100年 Centenary of Red Cross(1963年 [昭和38年])
「赤十字マークと地図 (10円)」 1963. 5. 8. 1,200万枚 [Sg][Sh]
- ・灌漑排水会議 International Communion [Conference] on Irrigation and Drainage (1963年 [昭和38年])
「水路を表わす木の葉 (10円)」
1963. 5.15. 1,100万枚 [Sh]
- ・名神高速道路 Opening of Meishin Expressway(1963年 [昭和38年])
「インターチェンジ (10円)」 1963. 7.15. 1,300万枚 [Sh]
- ・ガールスカウト Girl Scout Asian Camp(1963年 [昭和38年])
「ガールスカウト (10円)」 1963. 8. 1. 1,350万枚 [Sh]
- ・電波科学連合 International Scientific Radio Union (1963年 [昭和38年])
「パラボラアンテナ (10円)」 1963. 9. 9. 1,400万枚 [Sh]
- ・国際スポーツ大会 Tokyo International Sports Meet (1963年 [昭和38年])
「競技種目の一部 (10円)」 1963.10.11. 1,400万枚 [Sh]
- ・姫路城修理 Restoration of Himeji Castle(1964年 [昭和39年])
「姫路城 (10円)」 1964. 6. 1. 2,200万枚 [Sh]

- ・太平洋ケーブル Trans-Pacific Submarine Cable(1964年 [昭和39年])
「太平洋地図 (10円)」 1964. 6.19. 2,400万枚 [Sh]
- ・首都高速道路 Metropolitan Expressway(1964年 [昭和39年])
「高速道路 (10円)」 1964. 8. 1. 2,400万枚 [Sh]
- ・国際通貨基金 General Assembly of IMF & IBRD(1964年 [昭和39年])
「通貨 (10円)」 1964. 9. 7. 2,400万枚[Sg][Sh]
- ・八郎潟干陸式 Reclamation of Lake Hachirogata(1964年 [昭和39年])
「稲・麦・牛・りんご (10円)」
1964. 9.15. 2,400万枚[Sg][Sh]
- ・東海道新幹線 Opening of New Tokaido Line(1964年 [昭和39年])
「新幹線列車 (10円)」 1964.10. 1. 2,500万枚[Sg][Sh]
- ・富士山頂レーダー Weather Rader on Mt. Fuji(1965年 [昭和40年])
「山頂レーダー (10円)」 1965. 3.10. 2,400万枚 [Sh]
- ・通信総合博物館 Communications Museum(1965年 [昭和40年])
「博物館全景 (10円)」 1965. 3.25. 2,400万枚 [Sh]
- ・こどもの国 National Children's Land (1965年 [昭和40年])
「こどもと動物 (10円)」 1965. 5. 5. 2,400万枚 [Sh]
- ・国土緑化 National Land Afforestation Campaign(1965年 [昭和40年])
「樹木と陽光 (10円)」 1965. 5. 9. 2,400万枚 [Sh]
- ・電気通信連合100年 Centenary of the I.T.U.(1965年 [昭和40年])
「地球と100年の歩み (10円)」
1965. 5.17. 2,400万枚 [Sh]
- ・国際協力年 International Co-operation Year(1965年 [昭和40年])
「協力年のマークとはと (10円)」
1965. 6.26. 1,000万枚 [Sh]
- ・海の記念日 25th Anniversary of Maritime Day(1965年 [昭和40年])
「明治丸とかもめ (10円)」 1965. 7.20. 2,500万枚 [Sh]
- ・愛の血液 Blood Donation Campaign (1965年 [昭和40年])
「血液と採血車 (10円)」 1965. 9. 1. 2,500万枚 [Sh]
- ・国際原子力機関 International Atomic Energy Agency (1965年 [昭和40年])
「原子力発電所 (10円)」 1965. 9.21. 2,500万枚 [Sh]
- ・第10回国勢調査 10th National Census(1965年 [昭和40年])
「日の丸と住民 (10円)」 1965. 9.25. 2,500万枚 [Sh]
- ・国民参政75年 75th Anniversary of the General Suffrage (1965年 [昭和40年])
「衆参両議員章 (10円)」 1965.10.15. 2,500万枚 [Sh]
- ・耳鼻小児科学会 International Medical Congress(1965年 [昭和40年])
「横顔と小児 (30円)」 1965.10.30. 1,200万枚 [Sh]
- ・南極観測再開 Re-Opening of the Antarctic Observation (1965年 [昭和40年])
「南極地図 (10円)」 1965.11.20. 2,550万枚 [Sh]
- ・電話創業75年 75th Anniversary of Telephone(1965年 [昭和40年])
「電話ダイヤル (10円)」 1965.12.16. 2,500万枚 [Sh]
- ・ユネスコ20年 20th Anniv. of the Founding of UNESCO (1966年 [昭和41年])
「ユネスコと国連マーク (15円)」
1966. 7. 2. 2,300万枚 [Sh]
- ・太平洋学術会議 11th Pacific Science Congress(1966年 [昭和41年])
「太平洋地図 (15円)」 1966. 8.22. 2,200万枚 [Sh]
- ・天草架橋 Completion of the Amakusa Bridges(1966年 [昭和41年])
「天草五橋 (15円)」 1966. 9.24. 2,200万枚 [Sh]
- ・簡易保険50年 PO.Life Insurance System(1966年 [昭和41年])
「マークと家族 (10円)」 1966.10. 1. 2,200万枚 [Sh]
- ・ガン征圧運動 Cancer Eradication Campaign(1966年 [昭和41年])
「コバルト照射機 (7+3円)」 1966.10.21. 3,000万枚 [Sh]
「X線診療 (15+5円)」 1966.10.21. 2,500万枚 [Sh]
- ・国立劇場開場 Opening of the National Theater(1966年 [昭和41年])
「国立劇場 (15円)」 1966.11. 1. 2,200万枚 [Sh]
「歌舞伎 (25円)」 1966.11. 1. 1,600万枚 [Sh]
「文楽 (50円)」 1966.11. 1. 1,200万枚 [Sh]
- ・国際米穀年 International Agrarian Year(1966年 [昭和41年])
「米穀年マーク (15円)」 1966.11.21. 2,200万枚 [Sh]
- ・衛星通信開始 Satellite Telecommunication(1967年 [昭和42年])
「通信衛星 (15円)」 1967. 1.27. 2,200万枚 [Sh]

- ・世界一周航空路 Round World Air Route(1967年 [昭和42年])
「ジェット機と地図 (15円)」 1967. 3. 6. 2,200万枚 [Sh]
- ・日本近代文学館 Museum of Modern Literature(1967年 [昭和42年])
「近代文学館 (15円)」 1967. 4.11. 1,900万枚 [Sh]
- ・港湾協会総会 International Ports & Harbours Conference
(1967年 [昭和42年])
「神戸港の風景 (50円)」 1967. 5. 8. 900万枚 [Sh]
- ・民生委員50年 Volunteers of Welfare Service(1967年 [昭和42年])
「民生委員の記章 (15円)」1967. 5.12. 1,900万枚 [Sh]
- ・交通安全 National Traffic Safety Campaign(1967年 [昭和42年])
「交通安全 (15円)」 1967. 5.22. 1億枚 [Sh]
- ・生化学会議 International Congress of Biochemistry (1967年 [昭和42年])
「微生物構造 (15円)」 1967. 8.19. 1,800万枚 [Sh]
- ・ユニバーシアード東京大会 Universiade 1967, Tokyo (1967年 [昭和42年])
「鉄棒 (15円)」 1967. 8.26. 1,800万枚 [Sh]
「大会マーク (50円)」 1967. 8.26. 800万枚 [Sh]
- ・国際観光年 International Tourist Year (1967年 [昭和42年])
「ちょうちん (15円)」 1967.10. 2. 1,800万枚 [Sh]
「霊峰不二 (50円)」 1967.10. 2. 800万枚 [Sh]
- ・道路会議 13th World Road Congress (1967年 [昭和42年])
「高速道路 (50円)」 1967.11. 5. 800万枚 [Sh]
- ・青年の船 Japan Youth Good Will Cruise(1968年 [昭和43年])
「若人と青年の船 (15円)」 1968. 1.19. 1,800万枚 [Sh]
- ・北海道100年 Hokkaido Centenary (1968年 [昭和43年])
「道章と記念塔 (15円)」 1968. 6.14. 1,800万枚 [Sh]
- ・小笠原復帰 Return of Ogasawara Is. to Japan(1968年 [昭和43年])
「太平洋の夜明け (15円)」1968. 6.26. 2,000万枚 [Sh]
- ・郵便番号 Popularizing of Postal Code System(1968年 [昭和43年])
「地図とナンバー君 (7円)」 1968. 7. 1. 5,000万組 [Sh]
「地図とナンバー君 (15円)」 1968. 7. 1. 1億5000万枚 [Sh]
- ・ユースホステル International Youth Hostel Conference (1968年 [昭和43年])
「シンボルマーク (15円)」1968. 8. 6. 1,800万枚 [Sh]
- ・高校野球選手権 High School Baseball Tournament (1968年 [昭和43年])
「人文字 (15円)」 1968. 8. 9. 1,500万組 [Sh]
「投手と旗 (15円)」 1968. 8. 9. (1,500万組 [Sh])
- ・明治100年 Meiji Centenary (1968年 [昭和43年])
「マークと軍艦 (15円)」 1968.10.23. 2,000万枚 [Sh]
「東京御著輦 (15円)」 1968. 6.14. 2,000万枚 [Sh]
- ・灯台100年 Lighthouse Centenary (1968年 [昭和43年])
「新旧灯台 (15円)」 1968.11. 1. 1,800万枚 [Sh]
- ・【新宮殿落成 Completion of the New Imperial Palace (1968年 [昭和43年])
「正殿と舞楽 (15円)」 1968.11.14. 1,800万枚 [Sh】
- ・国際人権年 International Human Rights Year(1968年 [昭和43年])
「マークと男女 (50円)」 1968.12.10. 800万枚 [Sh]
- ・【貯蓄増強 Savings Promotion (1968年 [昭和43年])
「しまりす (15円)」 1968.12.14. 1億枚 [Sh】
- ・【日本万国博募金 Japan World Exposition(1969年 [昭和44年])
「地球とマーク (15+5円)」 1969. 3.15. 1,500万枚 [Sh]
「知積院の「桜図」 (50+10円)」
1969. 3.15. 750万枚 [Sh】
- ・交通安全 National Traffic Safety Campaign(1969年 [昭和44年])
「横断する母子 (15円)」 1969. 5.10. 1億枚 [Sh]
- ・東名高速道路 Tokyo-Nagoya Expressway(1969年 [昭和44年])
「高速道路 (15円)」 1969. 5.26. 1,800万枚 [Sh]
- ・近代美術館 National Modern Art Museum(1969年 [昭和44年])
「近代美術館 (15円)」 1969. 6.11. 1,900万枚 [Sh]
- ・原子力船進水 Launch of Nuclear Ship (1969年 [昭和44年])
「原子力船 (15円)」 1969. 6.12. 1,900万枚 [Sh]
- ・日本海ケーブル開通 Opening of Japan Sea Cable(1969年 [昭和44年])
「ケーブル敷設船 (15円)」 1969. 6.25. 1,900万枚 [Sh]

- ・郵便番号 Popularizing of Postal Code System(1969年 [昭和44年])
 - 「はがきとナンバー君 (7円)」 1969. 7. 1. 2億枚 [Sh]
 - 「ポストとナンバー君 (15円)」 1969. 7. 1. 4億枚 [Sh]

- ・第52回ライオンズ大会 52nd Convention of Lions International (1969年 [昭和44年])
 - 「協会マークとばら (15円)」 1969. 7. 2. 1,900万枚 [Sh]

- ・UPU大会議 16th Universal Postal Union Congress(1969年 [昭和44年])
 - 「地球とはと (15円)」 1969.10. 1. 1,800万枚 [Sh]
 - 「文よむ女 (北川歌麿) (30円)」
 - 1969.10. 1. 1,000万枚 [Sh]
 - 「文読み (鈴木晴信) (50円)」
 - 1969.10. 1. 800万枚 [Sh]
 - 「都伝内 (東洲斎写楽) (60円)」
 - 1969.10. 1. 800万枚 [Sh]

- ・ILO 50年 50th Anniversary of I.L.O. (1969年 [昭和44年])
 - 「働く人」 (15円)」 1969.11.26. 1,950万枚 [Sh]

- ・【日本万国博 (第1次) Expo. '70 1st Issue(1970年 [昭和45年])
 - 「博覧会場風景 (7円)」 1970. 3.14. 3,500万枚 [Sh]
 - 「地球と桜花 (15円)」 1970. 3.14. 3,500万枚 [Sh]
 - 「かきつばた (尾形光琳) (50円)」
 - 1970. 3.14. 2,000万枚 [Sh]

- ・【日本万国博 (第2次) Expo. '70 2nd Issue(1970年 [昭和45年])
 - 「会場とかん燈 (7円)」 1970. 6.15. 3,500万枚 [Sh]
 - 「地球と万博会場 (15円)」 1970. 6.15. 3,500万枚 [Sh]
 - 「夏秋草図 (酒井抱一) (50円)」
 - 1970. 6.15. 2,000万枚 [Sh]

- ・【郵便番号 Popularizing of Postal Code System(1970年 [昭和45年])
 - 「住宅とナンバー君 (7円)」 1970. 7. 1. 1億枚 [Sh]
 - 「住宅とナンバー君 (15円)」 1970. 7. 1. 3億枚 [Sh]

註

(1) 日本の記念切手発行枚数は1960年頃までは200万枚から800万枚くらいであったが、1970年代から1980年代にかけての切手収集ブームの時期には、毎回3000万枚から5000万枚発行されるようになっていた。発行枚数の少なかった1960年頃までは記念切手が発売されると郵便局に行列ができていた。私自身は小中学生時代から常に「よい子」であったため、学校をさ

ぼって朝早くから郵便局で長蛇の列に並びやつのことで発売直後の記念切手を買い求めるなど、ただの一度もしたことはない(と確信するが、なんといっても半世紀以上前のことなので、必ずしも記憶は定かでない)。

- (2) いわゆる「記念切手の相場」も収集ブームの時期とそうでないときでは大きく異なる。「月に雁」や「見返り美人」も収集ブームの1970年代あたりまでは単片でも一枚数万円していたように記憶するが、2022年現在では同じものが一枚数千円で専門店やネットで手に入ってしまう。
- (3) 放送開始当時から局名を知らせるタイトルとして平和のシンボルである鳩が巣箱から羽ばたく姿が放映されていた。
- (4) 各戸でテレビを購入できなかった時代にはテレビ放送を普及させるため、盛り場、駅、公園などに街頭テレビが設置され、多くの人が集まり熱狂してテレビを観ていた。
- (5) 長年に渡り記してきた私の(収集切手に関する)手元のメモに基づく記録で、今回、改めて寄贈切手現物に当たり、(どこかに紛れてしまい)その所在が確認できなかったものについても、情報としては意味があると考え、【 】に入れて(記録として)残してある。
- (6) 「おきな(翁)の面」
- (7) 「麦わらへび(蛇)」
- (8) 「色絵土器皿「梅模様」(尾形乾山)」
- (9) 「桂離宮の「水仙の釘隠し」
- (10) 「ししのり金太郎」
- (11) 「小槌乗りねずみ」
- (12) [Sh] -シート (Sheet) で寄贈したもの. [Sg] -今回単片 (Single piece) で寄贈したもの
- (13) 「見返り美人(菱川師宣)」
- (14) 「月に雁(安藤広重)」
- (15) 「ビードロを吹く娘(喜多川歌麿)」
- (16) 「市川えび蔵(東洲斎写楽)」
- (17) 「まりつき(鈴木春信)」
- (18) 「雨中湯帰り(鳥居清長)」
- (19) 「浮世源氏(細田栄之)」
- (20) 「三十六歌仙「伊勢」
- (21) 「花下遊楽(狩野長信)」
- (22) 「源氏物語「宿木」
- (23) 「序の舞(上村松園)」
- (24) 「蝶(藤島武二)」
- (25) 「湖畔(黒田清輝)」
- (26) 「舞妓林泉(土田麦僊)」
- (27) 「髪(小林古径)」
- (28) 法隆寺百済観音
- (29) 広隆寺弥勒菩薩
- (30) 法隆寺金堂・五重塔
- (31) 興福寺阿修羅

- (32) 東大寺月光菩薩
- (33) 薬師寺吉祥天
- (34) 片輪車蒔絵螺鈿手箱
- (35) 朝護孫子寺信貴山縁起絵巻
- (36) 普賢菩薩
- (37) 神護寺伝源頼朝像（藤原隆信）
- (38) 平治物語絵巻
- (39) 春日大社赤糸威鎧
- (40) 慈照寺銀閣
- (41) 安楽寺八角三重塔
- (42) 十便函・釣便（池大雅）
- (43) 色絵雉香炉（野々村仁清）
- (44) [Sg] -今回の寄贈が単片のもの、[Sh] -今回の寄贈がシートのもの
- (45) 長潭橋（ながとろばし）
- (46) 「海上から見た宮島」
- (47) このシリーズの切手はすべて、手元のメモには記録があるが、今回どうしてもその所在を確認することができなかった。「昭和切手」の情報としてここに記録を残しておく。
- (48) 「野口英世（医学者）」
- (49) 「福沢諭吉（教育者）」
- (50) 「夏目漱石（文学者）」
- (51) 「坪内逍遙（文学者）」
- (52) 「市川団十郎（歌舞伎役者）」
- (53) 「新島襄（教育者）」
- (54) 「狩野芳崖（画家）」
- (55) 「内村鑑三（宗教家）」
- (56) 「樋口一葉（文学者）」

- (57) 「森鷗外（文学者）」
- (58) 「正岡子規（俳人）」
- (59) 「菱田春草（画家）」
- (60) 「西周（哲学者）」
- (61) 「梅謙次郎（法律家）」
- (62) 「木村栄（天文学者）」
- (63) 「新渡戸稲造（教育者）」
- (64) 「寺田寅彦（科学者）」
- (65) 「岡倉天心（画家）」
- (66) [Sg] -今回の寄贈が単片のもの、[Sh] -今回の寄贈がシートのもの

[主な参考文献]

日本郵便切手商協同組合カタログ編集委員会編 日本切手カタログ 2023（明治・大正・昭和・平成版）JSDA 2022. 6.30.

ビジュアル版日本切手カタログ

Vol. 1 記念切手編 1894-2000 日本郵趣協会 2012.
（2016. 第1版2刷）

Vol. 2 ふるさと・公園・沖縄切手編 日本郵趣協会 2013.

Vol. 3 年賀・グリーティング切手編 日本郵趣協会 2014.

Vol. 4 普通切手編 日本郵趣協会 2015.

（南山大学名誉教授）

‘Donation of Showa-period Stamps to Nanzan University Museum of Anthropology’

MARUYAMA Toru

Humans sometimes have a joy that makes our bodies tremble; what kind of occasion would cause such experiences? In my childhood, the 1950s—60s, Japan experienced high economic growth, and adults concentrated on working day and night. At the same time, parents persuaded children to have many kinds of lessons and go to private tutoring schools. At that time, stamp collection was the only issue I could have the greatest joy. I sometimes waited in lines to purchase commemorative stamps at post offices in the early morning or, by making pocket money, rode a bicycle to the specialized stamp shop to buy stamps. Such experiences made me happy, and I never forget that. I donated to the museum from those acquainted during such a period. However, it contains some popular ones such as ‘Wild Geese and the Moon’ and ‘Looking Back Beauty’ (a friend of my mother gave them to me), unattainable stamps for ordinary school kids. Of course, my collection is minor compared to other stamp museums or memorial halls in Japan. Still, I would be delighted if people knew about an ex-elementary-school kid-collector like me.

2023年12月15日 印刷

2023年12月20日 発行

南山大学人類学博物館紀要 第42号

編集・発行人 南山大学人類学博物館

466-8673 名古屋市昭和区山里町18

Phone 052(832)3147 (直通)

印刷 株式会社クイックス

456-0004 名古屋市熱田区桜田町19-20

Phone 052(871)9190